

令和 3 年度 文部科学省

「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業

くぬぎカレッジ 成果報告書

国分寺市教育委員会

目次

国分寺市教育委員会 教育長あいさつ	1
指導者・コーディネーター総評	5
くぬぎカレッジ活動報告	9
くぬぎ青空ジャーナル	21
参加者の声	27
運営スタッフ	
会議の記録より	31
振り返り記録	49
運営スタッフの声	59
連携協議会	
会議の記録より	65
委員の声	79
指導者・コーディネーター会議の記録より	87
事業を通して見えてきたもの	95
（資料1）アンケート結果	99
（資料2）事業チラシ一覧	113
（資料3）くぬぎカレッジ全体スケジュール	125

国分寺市教育委員会 教育長あいさつ

「くぬぎカレッジ」は、文部科学省受託事業として、令和2・3年度の2年間にわたり公民館が取り組んだ事業です。公民館ではこれまでも、知的障害のある方のための「くぬぎ教室」事業を多くの運営スタッフを中心に、ご家族や地域の方々に支えられながら実施してまいりました。

「くぬぎ教室」事業は、今年で45年を迎える公民館事業の中でも歴史あるもので、知的障害のある方の貴重な居場所の一つとなっています。その45年の中で、時代も変わり、参加者のみなさんのニーズなども変化していることから、「くぬぎ教室」事業を見直し、より良いものにするため、「くぬぎカレッジ」事業を進めてまいりました。

この「くぬぎカレッジ」事業は大きく3つの柱で構成しています。

一つ目の「学びの場」では、自身のトリセツ（取扱説明書）を作ってみたり、お互いを褒め合うことで相手の気持ちを理解することを学んだり、音楽表現や造形活動で自分自身を表現したりするなど、新しいことにも挑戦しました。

二つ目の「交流・発信の場」では、古いリヤカーを解体し、新たに移動式屋台として組み立てるとともにカラフルに色付けをし「くぬぎレインボー」と名付けリニューアルさせました。また自分たちの気持ちを「くぬぎ青空ジャーナル」にまとめて発刊し、広く発信しました。

三つ目の「みんなで考える」では、一つのテーマについてみんなで意見を出し合うことを通じて、話し合いの方法や自分の意見の伝え方、さらにその意義を学びました。

ここで学んだことは今後、各公民館の「くぬぎ教室」事業へとつなぎ、持続可能な学びとなるより充実した新たな「くぬぎ教室」事業を展開してまいります。

「くぬぎカレッジ」事業を進めるにあたってはコーディネーターとしてご指導・ご助言をいただきました明治大学小林繁先生、連携協議会委員の皆さま、また運営に直接携わっていただきました運営スタッフの皆さまをはじめ多くの方々のお力添えを頂きました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

国分寺市教育委員会教育長 古屋 真宏

指導者・コーディネーター 総評

くぬぎカレッジを今後の取り組みの糧に

くぬぎカレッジ指導者・コーディネーター 小林 繁(明治大学)

去る1月30日に開かれた「くぬぎカレッジ」活動報告会に参加して、あらためてこの間のくぬぎカレッジの試みが、今後の障害をもつ人の学習文化活動支援のあり方を考える上での一つのモデルになると実感した幸いです。「学びの場」「交流・発信の場」「みんなで考える」の3つの分野から構成されたプログラムが、それぞれが互いにつながり、循環しながら全体として障害をもつ人の豊かな学習と文化を保障していく取り組みになっていくことが確認されたと思うからです。その意味で、今日の障害をもつ人の学習文化支援に必要とされる要素がほとんど網羅されているといっても過言ではなく、しかもそこには障害をもつ人だけではなく、全ての人々に必要とされている学習文化支援の要素も含まれていると思います。

学びの場におけるコミュニケーション、自己表現、自分を知るというテーマは、自分で考えたことを他者に伝えながらやり取りすることでコミュニケーションの力を高めることができ、また言葉と音声、表情や身体などの媒体(メディア)を通して表現することによって、自らの存在を確認(自尊感情)できるという点で、私たちが日々生活していく上でとても大事なものです。さらにみんなで考えることは、そうした自己表現とコミュニケーションをより確かなもの、豊かなものにしていくことを可能にする。みんなでひとつのテーマについて話し合うことが、一人ひとりの考える力だけではなく、集団としての力、仲間意識や帰属意識を高めることにつながっていきます。

そうした点で、昨年度の報告書にも書いたことですが、自分の思いをメールや通信、造形などいろいろな方法や形で表現し、発信していく活動、恋愛や結婚という青年期の切実なニーズに応える学習、ぶらっと集まって楽しいおしゃべりをしたり、リラックス時間を過ごす場などを用意するという取り組みはとても有意義であり、このようなくぬぎカレッジのプログラムの斬新性と先進性が、今後のくぬぎ教室の活動の発展に生かされるとともに、文科省のモデル事業として、今後全国の地域の取り組みに反映されていくことを期待します。

と同時に、あらためて支援者やスタッフの確保と養成の課題が提起されたことも確認したいと思います。その際の大事な視点として強調したいのが、スタッフや支援者を、外部からだけではなく、障害者青年学級などのメンバーからも求めるということです。長年青年学級に参加する中で、学級生のメンバーの中でリーダー的役割や具体的な活動の際に中心的な役割を演ずる人が少なからず想定されるのではないのでしょうか。そのような人に、支援者としての役割を果たしてもらうよう働きかけていくことを通じて、メンバーから支援者へというロール(役割)モデルのイメージと道筋を示す。そのことによって、青年学級への参加意欲がさらに高まるのではないかと思います。

そうした学級生の、いわば成長・発達の見通しや期待をもって青年学級等を企画・運営していくことも今後の課題としてとらえていきたい。それが、障害者青年学級が社会教育事業として行われる根拠ともいえるからです。そしてそのことは、重度の障害をもつメンバーであっても、学級への参加をとおして成長・発達といえる確かな営みが存在することを明らかにしていくという課題につながることも確認したいと思います。

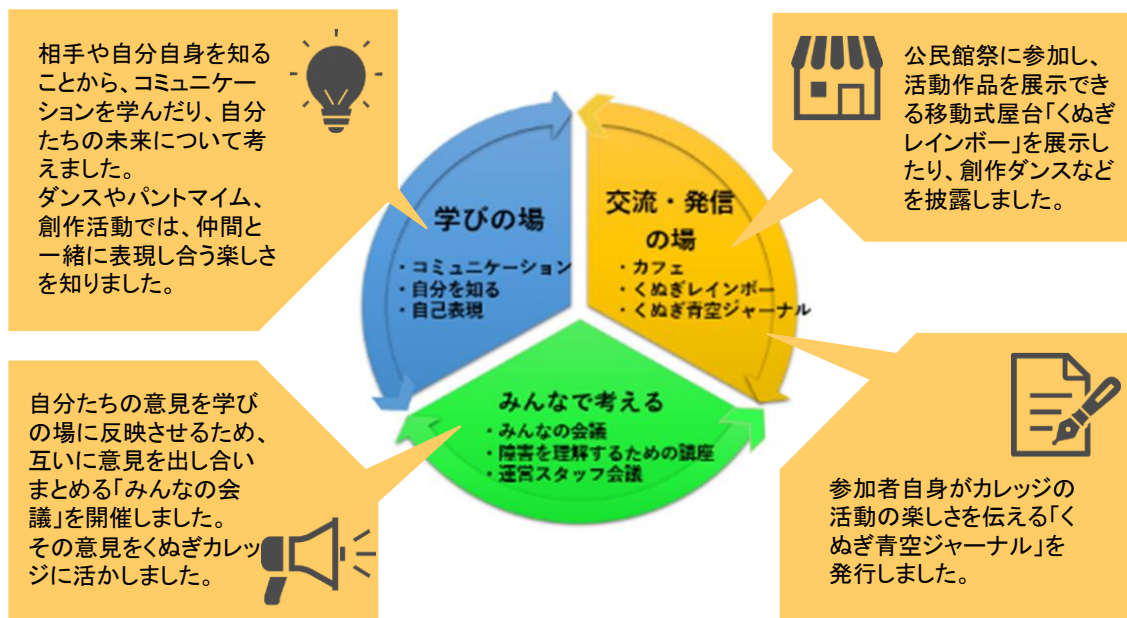
(2022年2月14日記)

知りたい・学びたいから始まる

「くぬぎカレッジ」

～地域の人々と考え、発信していくために～

活動報告



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(Ⅰ)「学びの場」①

『自分の「トリセツ(取扱説明書)」をつくろう』



私は、何が好きで何か嫌いなのかな？
得意なこと、苦手なことはどんなことかな？
自分のことをあらためて見つめてみました。

令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(1)「学びの場」②

『わたしとみんな』



まわりの人たちとの気持ちの良い
コミュニケーションについてみんな
で考えました。



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(1)「学びの場」③

『わたしのミライ・みんなのミライ』



これからも安心して暮らしていけるよう
未来のことをみんなで考えました。



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(Ⅰ)「学びの場」④



パントマイムやダンス
で体を動かして自分
を表現する楽しさを
知ろう！



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(Ⅰ)「学びの場」④

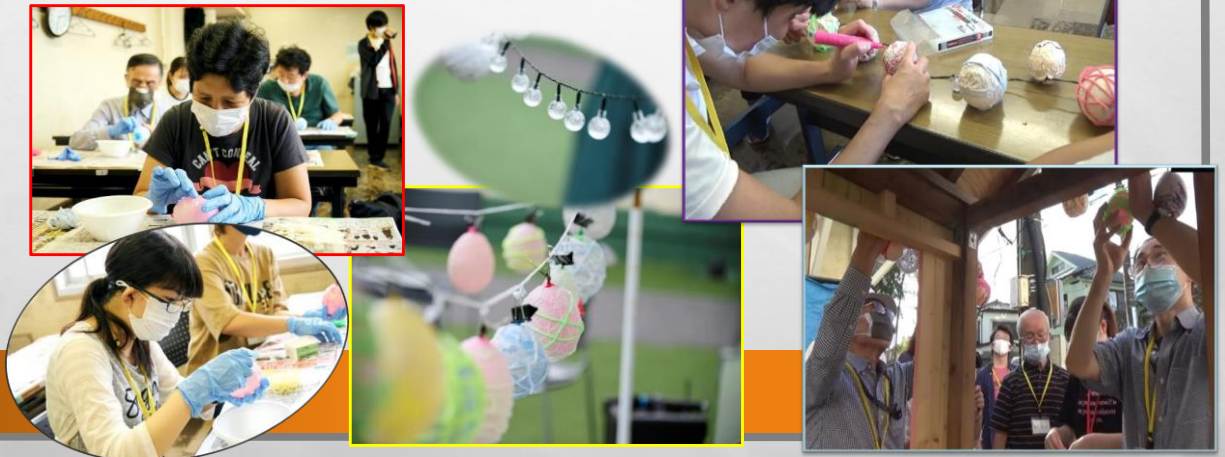


イメージしながら動いてみよう
…こんな感じかなあ～
こんな動きもどうかなあ～
…自分を表現することって
なんだかおもしろい!(^^)!



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(Ⅰ)「学びの場」⑤

昨年度作成した移動式屋台「くぬぎレインボー」を
今年度の活動の中で“バージョンアップ”！



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(Ⅰ)「学びの場」⑤



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(2)「交流・発信の場」

移動式屋台「くぬぎレインボー」を、秋の公民館まつりには有志で参加しお披露目。そして舞台では昨年度から練習してきたオリジナルダンス「コロナっ禍」を、地域の子どもたちと一緒に Let's Dance !



この「くぬぎレインボー」をみんなで引いて歩いて地域の人にアピールしたり、地域のイベントに参加して、自分たちのことをもっと知ってもらいたい！

令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(2)「交流・発信の場」



カレッジの活動や自分たちのことを知ってもらうための新聞「くぬぎ青空ジャーナル」。
移動式屋台「くぬぎレインボー」に載せて、配って歩きたい！

令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

①みんなの会議

自分たちが取り組んでいくことは“自分たち”で考えます。



司会・進行、タイムキーパーは、毎回くじ引きで決定します。
「背筋が伸びて“ぎっちり”したよ！」



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

「みんなの会議」テーマ

◎どんな「くぬぎカレッジ」が良い？



◎「くぬぎ青空ジャーナル」

- ・載せたいこと
- ・原稿づくり



◎くぬぎレインボーの活用

◎成果報告会に向けて



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

②障害を理解するための講座(全4回)

<第1回>

具体的な事例を参考に、知的障害のある人をサポートするときの基本について学びました。



令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

<第2回>『疑似体験から学ぼう』



知的障害のある方は、世界をどのように見て感じているのか、体験型ワークショップを通して理解を深め、コミュニケーションや支援の方法を考えました。

令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

<第3回>『地域でともに暮らすために』



知的障害のある方の結婚生活や仕事についてなどを含めたライフスタイルについて直接お話を聞きながら、障害のあるなしにかかわらず、地域で暮らしていくことについて考えました。

令和3年度くぬぎカレッジ 学習プログラム(3)「みんなで考える」

<第4回>『差別のない未来をつくる』



とびたつ会のみなさんが ⇒
とても素敵なオリジナル曲を
披露してくれました♪

社会に大きなインパクトを与えた「やまゆり園事件」にも触れながら、障害者に対する差別や偏見をなくすためにはどうしたら良いか、障害のある人とともに考えました。

令和3年度くぬぎカレッジ「成果報告会」



↑
息の合った
ジャンプ!



↑
「くぬぎレインボー」の紹介
は別室から“生中継”。
帰りに見に寄ってもらい
装飾の生花(スイトピー)を
プレゼントしました🌸



全員が活躍した、とても充実した会となりました。見に来てくださった方からも自然に笑みがこぼれていました。

このように、新型コロナウイルスの影響で活動に制限がある中でも、みんなで工夫し協力しながらいろいろなことに挑戦し、それぞれのペースでお互いを高め合ってきました。

自分自身を振り返り、仲間のことを聞いて知っていく中で、様々な充足感を味わいました。この経験を活かしながら、障害のある人もない人もともに学び支え合う地域社会の実現を目指していきます。

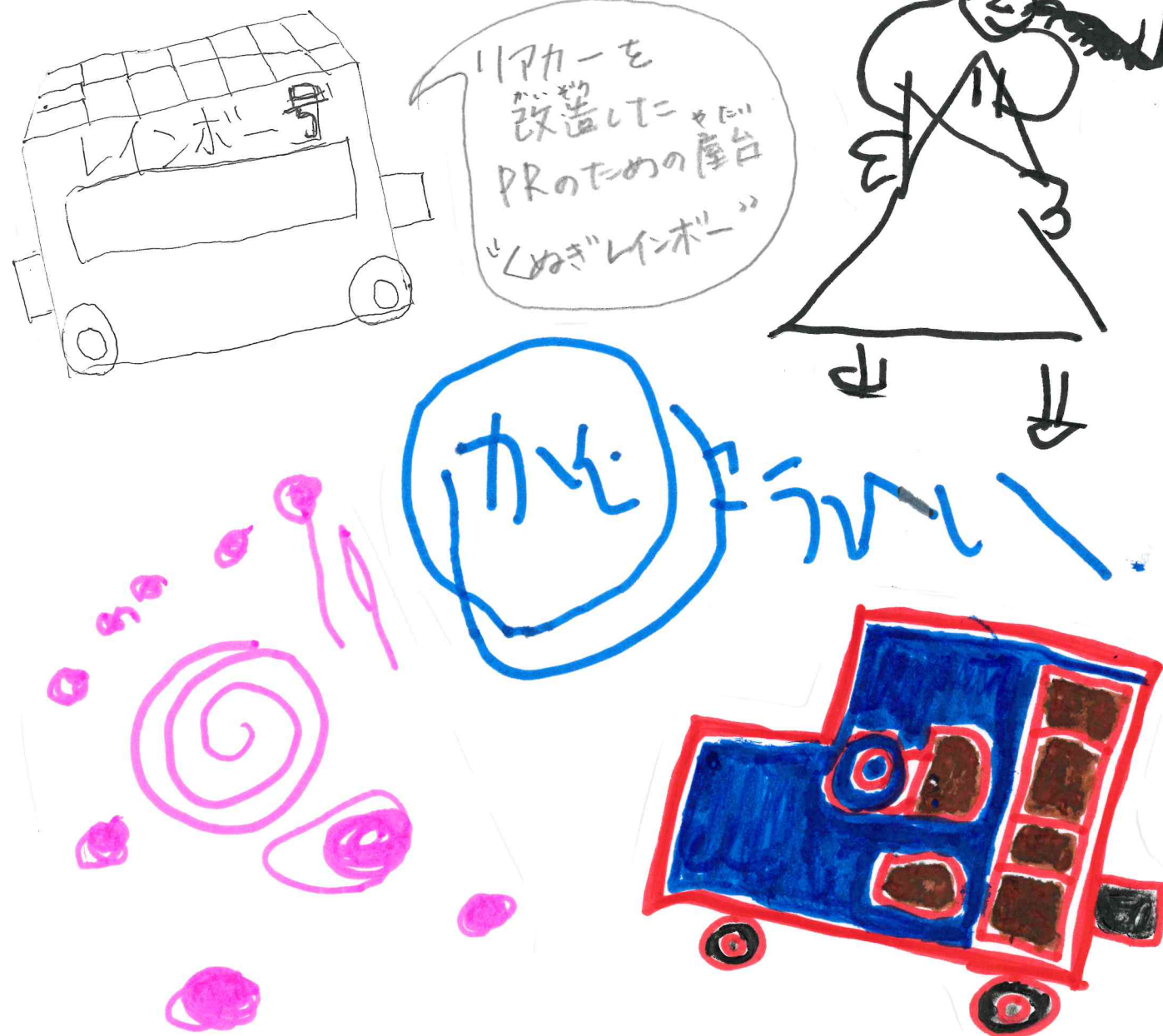


くぬぎ青空ジャーナル

【くぬぎカレッジ 前半の活動記録】

6月13日	コロナ対策のため集まらず、各自自己紹介ワークシートを作成
7月11日	みんなの大会議「会議の進め方を学び、自分の意見を発表する」
8月22日	自分のトリセツを作る～自分をしり、自分のことを伝える方法を学ぶ～
9月12日	くぬぎレインボーパワーアップ大作戦Part1 ～コットンボール制作～
10月10日	くぬぎレインボーパワーアップ大作戦Part2 ～レインボー看板制作～

*毎回、オリジナルダンス「コロナ禍」の練習 & みんなの会議



編集・発行 くぬぎ青空ジャーナル編集部(恋ヶ窪公民館)

〒185-0013 国分寺市西恋ヶ窪4-12-8

電話:042-324-1926 FAX:042-327-9100

E-mail:koigakubo-kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp



vol. 1

～令和3年12月12日発行～

令和3年度文部科学省

「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業

知りたい・学びたいから始まる

「くぬぎカレッジ」



障害のある人もない人もともに学び、支え合
う新しい学びの場です。「もっと知りたい、もっ
と学びたい」という気持ちを大切に、コミュニ
ケーションスキルを学んだり、ダンスや造形な
どをしています。カレッジでの活動や普段感じ
ていることを自ら発信するのがこの「くぬぎ
青空ジャーナル」です。

眼鏡が素敵と
ほめられました。
石倉キヨキさんの指導が
ていねいだとおもしろい。

くぬぎで
ダンスが
楽しかった。

ダンスが
楽しかった

1ヶ月に1回
みんなに会える
楽しみです！

ダンスしたり。
レインボーをパワ-
アップしたり。
みんなで作って
楽しかった。

今日の1日を
振り返って私は、
ダンスの練習をすっかり
勉強になりました。

カリジニでは
レインボー作りをして色々な
指導をして頂き楽しかったです。
ダンスも楽しく出来ました。

くぬぎ
カリジニで
色々な事を
学ぶことが
できた。

おはよう
ちゃんとしたいよ
ちよきさんの表現ワークショップ
身体をつかって色々なことをみ
る身体で音やリズムをつくるこ
んなに楽しかった人とのつながり
なんてステキなこと

がんばり
ました

みんな
お祭り
踊ったのが
楽しかった。

ポイントタイムや
屋台づくり、お祭りや
果物のトリセツの学習など、又
みんなの会議での意見交換での
学びなど新しい体験が沢山でき
ました。

家で Youtube や
Netflix で 動画や
ドラマや映画を観る
ことが大好きです！

いろんな人
にであって、コミュ
ニケーションをとること
ができる。

みんなと
いっしょだから
楽しいよ

【くぬぎカレッジ 後半の活動記録】

11月14日	わたしとみんな～気持ちの良いコミュニケーションについて考える～
12月12日	わたしのミライ・みんなのミライ vol.1～この先の自分に目を向けよう～
1月16日	わたしのミライ・みんなのミライ vol.2～未来をみんなで考える～
1月30日	成果報告会

*毎回、パントマイム・オリジナルダンスの練習 & みんなの会議

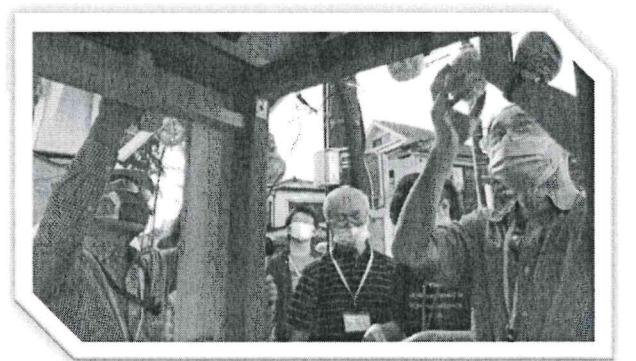


編集・発行 くぬぎ青空ジャーナル編集部 (恋ヶ窪公民館)
〒185-0013 国分寺市西恋ヶ窪4-12-8
電話: 042-324-1926 FAX: 042-327-9100
E-mail: koigakubo-kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp



vol.2
～令和4年1月16日発行～

令和3年度文部科学省
「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業
「知りたい・学びたいから始まる
「くぬぎカレッジ」



障害のある人もない人もともに学び、支え合
う新しい学びの場です。「もっと知りたい、も
っと学びたい」という気持ちを大切に、コミュニ
ケーションスキルを学んだり、ダンスや造形な
どをしています。カレッジでの活動や普段感じ
ていることを自ら発信するのがこの「くぬぎ
青空ジャーナル」です。

手紙が来る

るんせんびき
はったりするのがたのしかった
れいおひさたりみたりする
のがたのしかった
はなをきくのもいいな
いますおまりがしてよ
またやりたいです
うれしいです

くぬぎのんち
と会えて
うれしいです

くぬぎカレッジ

みなさんとダンスをしたりと
楽しい時間を過ごしました！
ありがとうございました。

みんな
ちがって
おもしろい
♥★◆♣✿

カレッジで
楽しく学んで
います

12月に入社
元気でがんばろう

元気くぬぎカレッジ
おめでとうございませう
これからまたのしい
くぬぎにしたいです

私はカレッジを
フジテレビの
ケイ・シー・カレッジで
など色々まわりました
これからも色々したいです

エス・カー
ムカ
おもしろかった

みんなの意見を
大切にして教室
だと思います。

2022年
3月6日(日)
東京マラソンで
フルマラソン(42.195km)
に出場し、完走目指します。

参加者の声

※原文のまま掲載しています

カレッジに参加して、何ができるようになりましたか？

- とてもたのしかった。レインボーの飾り付け楽しかった。
- 1年通してみても、初めはわからなかったし緊張していた。
- みんなで会議を進めていくという印象が残りました。
- 緊張した、仲の良い人がいっぱいできた。
- 活動、会議は楽しかった。
- 普段味わえない雰囲気
- ダンス楽しかった。
- 人とのつながりが増えた。
- いろんなことをいろいろ考えた。
- ダンスや発表を頑張った。
- 1年間とてもおもしろくて楽しかったです。
- 最初は緊張しましたが、徐々になれていって仲良い人も沢山出来ました。
- 一年の中で、いろんなことが（分からなかったのも）できるようになりました。みんなの会議でタイムキーパーを頑張りました。初めてだったので、でも頑張りました。
- いろいろな活動から、個々の良いところなど新たな発見ができた。
- くぬぎカレッジでダンスをおどりました。ダンスにおどっておどってきました。来年は来てください。
- もっと練習をしたかった。ズームでやりたかった。いろいろ言えるようになりました。
- 司会して、話が長かったけど楽しく出来ました。お辞儀とかしましょう！オンラインで話したい。
- 思いやりの心
- さんかしてコロナっかができました。楽しかった。
- コミュニケーションをまなぶことが出来るようになったと思います。
- コロナっかのダンスができるようになりました。
- レインボーのかざりつけを出来るようになりました。

くぬぎカレッジでやったことや、知ったことの中で、これからの生活の役に立ちそうなことは何ですか？

- 青空ジャーナルでかかわって 又絵を書いたりした。
- ダンスや発表を頑張った。
- くぬぎのみんなで本をよみたいです。
- 皆で仲良くワイワイしたいです。来年こそは2月のぼくの誕生会を出来ればやってほしいです。
- けやきフェスターで静かにみんなで過ごす。
- くぬぎ教室にはない、みんなの会議で発信したり、意見を聞いたりすることがあり、自分自身を考える機会をよかったと実感している方が多いので、未来について続きができたらいい
- とても楽しかったです。コロナかダンスをおどりました。とても楽しかったです。
- くぬぎ教室で生活を学びたいです。相手の人におもいやりを使いたい言葉。

- くぬぎで生活をうまくできるようにまなびたい。①きつぷをかうこと。②たいせつなことをなくさないようにする。③おもいをもってあたりたい。④くぬぎとしてのルールを（社会）決めたほうがよい。
- あいさつが出来ますように。
- くぬぎで防災クンレンをやりたい。
- 人とのかかわり方やコミュニケーションなど、色々です。
- わからないです。来年くぬぎきょうしつにはいりたいです。
- これからの生活に役立つ事を成果報告会に果たしました。

以下、聞き取り

- 少し長いのが疲れたけど、がんばった。
- Zoom とかで事前練習したかった。
- 自分の言葉で「開会の言葉」伝えることができたかも。司会者、礼をすればよかった。（自然にできるといい）
- 頑張った。
- 仲良い人がいっぱい来た。
- みんなでなんか楽しいし、自分の未来がいろんな角度から参加者をみられてよかった。
- みんなの会議
- Zoom ができるようになった。
- コロナ禍のダンス、レインボーの絵をかけた。
- レインボーの名前決めの話し合いがよかった。
- 自分の話を話せるようになった。
- ちょっき先生に丁寧に教わった。
- コロナで全員で会うことができなくてさみしい。
- コミュニケーション講座を学んでマナーを身につけたくなり、さらに学びたくなった。
- コロナ禍が楽しかった。
- 2年で終わるのがもったいない。
- 相手に不快感を与えない言葉づかいを学びたい。
- レインボーを撮って市報に載せてもらいたい。
- みんなでワイワイとかじゃなくて静かに過ごしたい。
- ダンスみたいな活動でなくて昼寝や本を読むみたいな活動もしたい。
- 仲良くわいわいしたい。
- 歌をうたいたい。
- 焼き芋がしたい。
- バーベキューとかキャンプをしたい。
- 普段できない非日常感を味わえる活動をしたい
- ビブリオバトルをしたい。

運営スタッフ会議の記録より

第1回スタッフ会議 記録より

日程	令和3年6月2日(水)	出席者	スタッフ11名 職員8名
(発言者 ◎=スタッフ ○=公民館)			
【事業内容について】 ◎参加者は全員昨年度から継続か。 ○昨年度の8割程度は引き続き参加される予定。 ◎昨年度からの課題や改善点を今年度に活かすということ。文科省の事業を2年続けて受けるには、これからの青年学級の在り方のモデルを示すものであると理解している。中身としては、行事中心の活動から学び中心のラボを入れるということ、加えて表現活動としたはず。昨年度からの反省や改善点をどう生かしていくのかと思っていた。みんなの会議が重視されすぎていることは、テーマとして違うのではないかと感じた。本年度取り組むときに、昨年やったことを押さえたうえで発展させる形で取り組むべきと思う。また、「障害当事者による『自分たちのことを理解してもらうための発信』」という言葉はどこからでてきたのか。 ○これまでの課題とスタッフ・参加者・連携協議会委員からの意見を基に今回のプログラムを組んだ。活かしきれていないと感じられたならば足りない部分があったと受け止める。コミュニケーションも表現活動も、自分たちから発信していくこと、地域の人たちに理解を広げていくことが必要。連携協議会からの意見として当事者の声・意見を反映させる仕組みを作っていきたいという提案。それらの構想を総括し、テーマとして記載した。 ◎当事者がかかわらないところで内容が決まってしまう、参加するだけになってしまったのではないか。これまでの恋ヶ窪くぬぎ教室の流れでは、年間計画をみんなで相談しながら作っていくものだったが、公民館が作ったプログラムをただ受けるだけになってしまっていた。運営の在り方として、当事者の意見を取り入れられなかったという反省が課題だったはず。 ◎主体的に活動を作り上げていくという意味では、みんなの会議で何をやるのか。何かの活動への参加の仕方や、みんなで相談して自分たちの活動を作っていけるような話し合いの場を設けるという意味であれば、昨年度の課題は活かされていると感じる。そのような位置づけが必要であると考えます。 ◎くぬぎの活動を自分たちで計画して、役割分担して、自分たちで活動を作り上げていく主体となるような学習の場とすることが今年度の課題であり、取り組むべきことだと思う。表現活動、学びの場、彼らが知りたいことを実際に学ぶ講座をプログラムに実際入れていくことも必要だろう。学び、表現、みんなで考えるという3本柱が必要と思う。その視点から、年間計画には、学び、表現、話し合いが組み込まれている。そういう意味では新しい青年学級のプログラムを作っていくうえでの要素が入っていると感じた。 ◎スタッフ会議の位置づけと内容はこういったものか。振り返りを中心にするのか、次回の検討なのか。 ○スケジュール表の回数は仮のもの。本来は毎回の反省会のように15分でも20分でも話したいと思っている。それとは別にスタッフ会議を設定したい。毎回の「みんなの会議」は参加者と20分くらい。その後にスタッフ会議を短時間で実施したい。 ◎みんなの会議を本人の主体的な学びの場としてやってほしい。本人が学ぼうとする意思を出発点に、学びたいことや課題を自分たちで発見して、自分たちで主体となって取り組み、それをプログラムの中に入れていく。それができれば、きっとこの内容がとてもよいものになると思う。参加者が主体となるよう、参加者の意思、やりたい思いをよく聞いて進めていってほしいと期待している。 ◎昨年の反省を活かしたスケジュールだと思う。賛同する。参加者の意見を取り入れていく姿勢がよいと思う。 ◎連携協議会にみんなの会議の代表者を出していくことはよいと思うが、どう選出して、どういうタイミングで、どういう形で出せるのか。謝金も含めて公民館の想定を教えてください。 ○代表者はみんなの会議の中で、毎回出していきたい。連携協議会は平日昼間に開催が多いが、仕事をしてい			

る参加者が出席しやすい方法を検討したい。

○もし会議に出られない時にどのように伝えていくかも学びとなるだろう。

◎その会議の場に立つこと、そしてどういう反応を受けるのかなど経験することも大切。

◎年間計画案を作ってきた。この案も含めて年間スケジュールについての確認をする機会を作してほしい。

【コロナ対策について】

○一か所に集まってる事業が不可となった場合、中断するのではなく、どうしたら継続していけるかを検討したい。オンライン活用、映像活用などを一例とし、コロナ禍において機会を保ちつつ豊かに暮らしていけるかを考えていきたい。

◎昨年度1年間参加してみてよかったことは「スタッフと参加者が近い」こと。ボランティアが「してあげている」のではなく「知らぬ間に一緒にやっていた」となるのがよい。

【スタッフのかかわり方と役割について】

○6月13日のみんなの会議についての講座は来月へ延期とし、13日は書面開催。みんなの会議は原則全員参加で、カレッジ開催を午後3時半までとしたい。

○参加申込状況については、参加者は20名定員満員。3人新規。それを超える応募はあった。愛の手帳の度数に関しては集計中。昨年度は参加して今年度不参加の人数は5～6人。スタッフは現在のところ18人。それと社会教育実習の大学生が秋以降2～3人入ってくる予定。

◎ほぼマンツーマンで参加者につくことができる。

【第1回の学び「みんなの大会議」について】

(スタッフが講師を担当／スタッフの質問に講師として発言)

◎「面白い場」という言葉の意図は？興味深い・魅力ある・楽しいという意味ですか？

講師：その通りです。

◎やったことがないから、問題があるかないか、わからない。不安でもあり楽しみでもある。

講師：参加者に「カッコいい」「面白い」と思ってもらいたい。

しーんとした難しい会議ではなく、自分の気持ちを自分で考えてほしい。

成人すると自分の考えを発表する場がない。難しくなく、体で流れをつかめるように。

ノリがいい会議にしたい。そのため自分も含めスタッフのキャラクターが重要。

【くぬぎカレッジ前半の運営および係分担について】

○スタッフからもっとかかわりたいという意見があった。月ごとの実行委員会を決めて当日運営をする、または、係分担を決める等、カレッジにどのようにかかわっていきたいか。

◎前年度のように、コース担当を決めてそのコース担当職員とともにというのはどうか。

◎分担といっても、年間計画のイメージがない中で発想がわからない。講師を呼ぶ回では、講師が内容を決めるからスタッフとして何ができるかわからない。年間計画を固めるのが先ではないか。

○前回1回目にした計画で、前半についてはおおまかに決めた。後半はご意見をもとに柔軟に決めたい。

◎配布されたスケジュール案は検討しないということか。

○市報掲載と講師依頼の関係で、前半はスタッフや参加者の意見を基に職員で組んだ。11月以降の事業で検討したい。

◎事前準備をすることで次のイメージが湧く。2～3人ずつでも月割にして、事前に準備からかかるとよいだろう。

◎カレッジは参加者のためのもの。スタッフは最初1対1でしっかりかかわるのはよいが、スタッフの心構えとして、最終的に参加者のものになっていく、スタッフがいないでも(活動が)できるようになれば最高。

◎参加者とともにスタッフも学んで理解することが大事。事前準備含めてサポートしていきたい。何かあれば途中で軌道修正をしたらよい。

【くぬぎカレッジ後半の内容について】

○11月以降について、どのように決定していくのがよいかも含め、話し合いたい。

◎昨年度発表する場がなかったから、新しいことをやりつつ、ダンスやレインボーを発表する場があるのはとてもよい。最後にも発表ができるようなものになったらよい。

◎スタッフからのスケジュール案の説明もお願いしたい。

◎昨年度の表現・造形活動、生活する上で避けては通れない問題を学ぶといった取り組みを経て、今年度の活動に向かうものと思う。昨年度は自分たちのことを自分たちで決めて活動することが欠けていた。その反省から「みんなの会議」がある。行事を作り上げていく過程としての話し合いと、それを活動に活かすことが大切。主体性を引き出す活動が必要。くぬぎ教室とカレッジは別ではなく、直接かかわるカレッジであってほしい。

◎みんなの会議では、本多公民館まつりにどう参加するかを話し合い、そのステップでクリスマス会へとつないでどうか。具体的に6月の分を7月にしたらその先も組み直すのか。

○6月分を7月に持っていくが、7月8月の2回のコミュニケーション講座を1回にして9月以降の変更はしないつもりである。

◎昨年度はダンス発表の機会がなかったので、もう一回ちゃんと発表の場をつくるべき。来年3月19日に予定している障害者団体のイベントに参加してダンスなりを発表する。屋台を持ち込むこともよいだろう。発表の目標があってこそその表現活動。

○本多公民館のおまつりで発表する機会はある。ステージ発表だけではなく、くぬぎレインボー周辺でのジャンナル配布などのアピールもできればよい。

◎まだイメージが湧かない。やってみて柔軟に変えていけばよい。

○スタッフのみなさんの意見、みんなの会議での意見を集約して決めていきたい。

【その他】

○6月書面開催となった場合のワークを職員が作成。今回は公民館職員の自己紹介と写真を載せ、その下に参加者自身の自己紹介を入れる。それぞれコースの紹介も簡単にして「カレッジで何をしたいか？」を記入する。

◎活動場所は、できるだけわかりやすく書かれていた方がよい。

○具体的に記載する。全体としてあまり盛り込みすぎても混乱してしまうかもしれないから、まずはこのくらいにする。緊急事態宣言期間中で集まらないため郵送する。6月は対面での事業実施はしない。

第2回スタッフ会議 記録より

日程	令和3年7月14日(水)	出席者	スタッフ10名 職員8名
(発言者 ◎=スタッフ ○=公民館)			
【「みんなの大学校」について】 ○一般社団法人として活動し、主にオンラインで障害者の学びの場をつくっている。本年度、国分寺市教育委員会として「みんなの大学校」をブロック別コンファレンスの実施団体として推薦している。 ○年間通してのプログラムのうち、9月25日と11月3日はオープンキャンパスを開催すること。くぬぎ関係者にも参加してもらいたい。参加者の介助は主催者側でスタッフを配置する。 ○9月25日には、くぬぎ教室でやっている歌など発表してもらいたいと打診があり、昨年度のくぬぎカレッジで取り組んだオリジナルダンス「コロナっ禍」を発表することを検討したい。次回カレッジのみんなの会議で参加者に発表したいかを諮ってから決めたい。 ◎みんなの大学校の活動自体がわからない、市内で障害者対象の事業をしていくのでは、くぬぎと「どちらかを選ぶ」ようになってしまわないか。 ○たまたま近所(国分寺市内)に本部が引越してきたが、全国的にオンラインで学習機会をつくっている団体なので、市内に特化はしていない。 ◎くぬぎカレッジとくぬぎ教室の参加者だけに呼びかけなのか、広く参加者募集するのか。 ○くぬぎカレッジとくぬぎ教室の参加者&スタッフに優先的に声掛けし、余裕のある範囲で主催者が告知範囲を広げる予定とのこと。 ◎この事業における公民館とみんなの大学校の関係を教えてほしい。 ○あくまでも先方が主催。オープンキャンパスについては、国分寺市教育委員会と公民館は「協力」で、会場提供、広報の役割。 【9月26日支援者研修「障害を理解するための講座①」について】 ○大枠としては、昨年度の「障害を理解する講座」1回目と同内容で、障害者センター職員が講師を務める。 【7月11日くぬぎカレッジについての感想・意見】 ◎愛の手帳2度の二人がみんなの会議にどう参加できるのか、工夫が必要。たとえば「Yes・No うちわ」などを使用し、意思表示をしやすいように。 ◎参加者にどう対応したらいいか、打合せが必要だった。参加者さんのことをよくわかってないと支援の仕方も難しかったりするだろう。その要素も含んだ当日のスタッフ打合せの時間をどう作るかも検討課題。 ◎広い部屋で活動ができたことは一体感があり、またくぬぎカレッジのことをみんなで話し合っ決めて、場面設定ができたことは、みんなの会議の性質上、とてもよかった。それぞれが自分の考えを書くなり、それを読んで発表するなり、自分の意見を発信するという大事なことを第一回目に経験し、次からは、違った意見がでたときにどう話し合っていくか等、お膳立てをしてみんなの話し合いが進むようにしてほしい。 ◎職員が決めたものを示すのではなく、みんなが意見を話し合っているように。例えば、移動式屋台「くぬぎレインボー」の活用について出た意見をいくつかのカテゴリー分けして、売るなら何が可能か、どういう条件が必要か、その議論ができる事前準備を職員でやってほしい。どういう意見が出たのかを整理してほしい。 ○非現実的なもの等の精査はしていくが、職員が決めることや、だめと判断することは極力減らし、みんなの会議で話し合いたい。 ○次回以降のみんなの会議の進め方について意見が欲しい。			

- ◎何をどう売るかとか、どういう形で使うかを次回みんなの会議で決めるというつもりで進めないと、改修にもつながらない。多数決なのか、ルールを決めたうえで使い道を決めながら進めていくのがよいだろう。
- 次回のみんなの会議で決めていくためには、現状案の整理をして絞っておく。
- ◎議長、タイムキーパー、書記は設けていくのでよいか。→そのようにする。
- ◎意見の集約の仕方、紙に書くというのでよかったか。
- ◎なぜこれがよいか、理由をいえるように、それを聞いてほかの人も考えられるように。その理由をいうためには発表できる人は限られてくるだろう。
- ◎議長たちを補佐するスタッフを置くべきか、決め方はどうするか。
- ◎7月の活動がうまくいったのは、講師がしっかり準備して段取りして臨んでくれたから。本人のキャラクターもある。あれだけの人数の中で仕切っていくには時間がかかるだろう。少なくともレインボーのことを決める間、しばらくはお願いするのもよいだろう。
- ◎議題の整理や着地点のイメージなどストーリーを決めてあれば誰がやってもそこまで大変じゃないかもしれない。

【支援者研修第2回以降の研修内容について】

- ◎昨年度も支援者研修をやったが、毎年国分寺市公民館が実施している「ボランティア養成講座」はなかった。これまでの養成講座のようにボランティア登録の契機となるように活用できるよう位置付けてほしい。スタッフ研修としてだけではなく一般市民が参加できるようにしてほしい。
- 昨年度も市報やチラシで募集した。今年度も広報していく。
- ◎内容の希望としては、講義を聴くだけではなく、くぬぎ教室への参加や体験をプログラムに入れてほしい。機会を設けることが必要。
- 会場の定員なども考慮しつつ検討していきたい。

【10月10日開催予定の本多公民館まつりについて】

- 当初は本多公民館まつり当日にステージ発表するつもりでいたが、衆議院議員選挙予定日と重なってしまったため、舞台発表は事前収録となる可能性が高い。10月9日ならステージ発表を実施する可能性もあるが、まだ確定していない。
- 恋ヶ窪公民館まつりは10月17日に第九小学校体育館でステージ発表含めてやる方向。そちらでの発表とするかもしれない。今後、意見をいただきたい。
- ◎8月22日の活動までに、まつりの方向性が決まっていないと、レインボーのことも話せないだろう。
- いずれにしても今秋の飲食提供は難しい。詳しくは8月9月の担当スタッフと詰める。
- ◎くぬぎジャーナルや電話、メールがあったが、今年は、ジャーナルの取材などは時間の関係で難しいのか、今後どうなるのか。
- 今年度はくぬぎ電話の位置づけはないが、(昨年度設定していた)水曜16時に毎週かかってくる。メールについては、全員へ送るメルマガ的なものは昨年度の最終回以降お休みをしているが、個人的におしゃべりのメールが届くものには対応している。ふらっと公民館に立ち寄ってお話していく参加者もいる。自分のことを話せる場所として大事にしたい。また、8月に「トリセツ」を学ぶことを通して、自分のことを発信することに主眼を置いてジャーナルも動き出したい。
- 次回から毎月活動終了後に20分程度、スタッフと職員で振り返りをしたい。

第3回スタッフ会議 記録より

(第1回スタッフ・コーディネーター交流会 兼 第3回指導者・コーディネーター会議)

日程	令和3年9月6日(月)	出席者	スタッフ8名 小林繁コーディネーター 職員 6 名
----	-------------	-----	---------------------------

(発言者 ☆=コーディネーター ◎=スタッフ ○=公民館)

☆専門は社会教育。全国の取り組みを見てきたのでいろいろと紹介したい。障害のあるなしにかかわらず、生涯にわたっての学習支援をすることは、社会教育の大事な役割。障害者にはそうっていない。文科省も動き出した。国分寺市は国立市・町田市と並んで「先進地域」なので、くぬぎカレッジの活動を全国に広めてほしい。

◎ 各スタッフより自己紹介 参加したきっかけ、カレッジにかかわってみての実感など

☆くぬぎ教室の45年は長い歴史だが、東京都の青年学級は、1964年墨田区から始まり多摩地域へ広がった。23区では60年の歴史がある。養護学校の義務化が始まる前、軽度の子どもは地元の中学校や学校内の障害児クラスなどに通い、卒業すると地元就職できたが、トラブルの発生や離職率が高かった。送り出した側の教師が何とかしようと、同窓会的な取り組みとして始まったのが、青年学級の始まり。養護学校の先生がプログラムを組んでやっていた。当時の先生の熱意はすごい。東京では古くから取り組んでいるが、全国的にはとても少なく、さらに広める必要があるためコンファレンスなどを行っている。岩手県などから問い合わせがあった。現在では、いろいろな形で青年学級は広がってきている。「ひと・もの・かね」を出し社会教育として行っている事業、学校の同窓会でやる形、保護者の有志でやる形、NPO 法人など、多様になっていることはよいことだと思う。

ただ、憲法で「すべて国民は教育を受ける権利を有する」とあるように、学習権の保障の観点で、行政が教育を受ける権利を保障する必要がある。教育基本法にも明記されている。権利を保障するのは行政であるから、まずは行政が取り組むことが大事。プラスアルファとして様々な取り組みがあることがよい。選択肢は様々あった方がよい。「民間がやっているから行政はやらなくてもよい」ということではない。国分寺や三多摩地域での取り組みは評価すべきもの。全国に発信していくことが大事。

現在の教室に課題が多いことに悩みもあるだろうが、事業として成立している一定レベルの上での課題や悩みであると認識してほしい。高齢化、障害の多様化と重度化は共通の課題。かつてのように「自力で来られる人だけ」と門戸を閉じることはありえないことになってきた。本人の希望があれば対応していくことではあるが、人的な問題で難しい面もある。高齢化の問題は、若い人と同じプログラムでは難しくなっている。多様なニーズをすべてに応えることは難しい。東京都青年学級が抱える課題である。「卒業」という言葉は相応しくないかもしれないが、「アフター青年学級」=青年学級の次のステップをどうするか。

町田市は自主グループを作っている。これはオーソドックスな形。公民館では講座の後に自主グループを作っていると思うが、それと同じ流れ。国立市は曖昧模糊としているが、青年たち同士で、「わいがや」などを活かしながら青年学級プラスアルファの取り組みをしている。国分寺市のくぬぎカレッジは、プログラムを組み、支援体制を整えて活動を展開し、新しい試みとしてチャレンジしている。同じような前例はない。自分たちで作っていくしかない。この大変さは「産みの苦しみ」。ぜひ知恵を出し合いながらつくっていただきたい。西東京市の場合はNPO法人を作って学習支援を行っていった。

大学との連携した「オープンカレッジ」などもある。多様な流れの中で「学習権の保障」という幹の部分さえいえば、行政が「ひと、もの、かね」を使って事業を展開していくことは必要だろう。カレッジにかかわった人からの感想や疑問、意見を聞きたい。

◎町田市の自主グループの位置づけを聞いて、くぬぎカレッジを3館の教室と並列で継続していく可能性を感じたが、現実的には文科省からの委託事業として2年間限定の事業としてやっているから、継続的な位置づけにはなっていないと思う。現状、将来的に発展させていくという可能性は考えにくい。各所で実施している事例と同じようにくぬぎカレッジを事例とすることは現実的にはない。

☆文科省が実践研究事業として選定した時には、2年で終わればよいというわけではなく、ステップアップ、次につなげること、継続を期待されていたのではないかな。

◎町田市から引き継いだときは、期待されたとは思いう。

◎カリキュラムの実験的な取り組み、プログラムの中身として今後活かせることがないかという取り組みだろう。全国にも参考になり反映させていくための位置づけと思っている。

○カレッジで作ってきたカリキュラムを教室にどう活かしていくかが重要。プログラム内容を教室に盛り込んでいきたいという思いがある。

◎2年やって、参加者もこれからどうなっていくのか、わくわくしている。参加者には継続性が必要。文科省からの委託事業が2年で終わりだから終了ではなく、国分寺市としてこれからどうするのか、職員、スタッフ、参加者の意見も聞きながらできたらよいと思う。

☆こういう思いのある人たちが集まって、検討委員会のようなものを立ち上げてどうするか考えていくきっかけにできればよいのではないかな。

◎参加者にマッチした内容になっているか、疑問もある。2度～4度が一緒に学ぶというのには、参加者に合わせた内容、カリキュラムを2パターン用意することなど必要。

◎その課題については検討しなければならないと思う。重度の参加者には合っていなかったが、多数の参加者には必要なことだった。ここでやったことをそのまま教室へ活かすことにはならないかもしれないが、これからの課題として、どういう形であれば可能かを検討するべき。

☆障害の度合いやニーズに対応して作っていくこと。クラス分けのようなものもあり得るが。

◎かつてくぬぎ教室でもコース分けをしたこともある。ニーズ、希望にあうようにコース分けした。

◎障害の度合いで、あえてクラス分けしてしまうのは差別にはあたらないのか。インクルーシブな考え方というところなのか。できる範囲のその差を埋めるためにスタッフがっているのではないかな。教室に参加していて、できるのかな？と悩んだことはあるのだが。

◎特別支援学校ではクラスはみんな一緒。作業班や教科学習はそれぞれのニーズに合わせて分かれる。本人の希望で、自分に合った課題で学べるように。生活集団としては一緒。希望による選択肢がある。それと同じような形で、くぬぎもコース分けができないかというイメージ。

◎「できるできないではなく、本人の希望に沿ってサポートできることを」、ということであればわかる。達成感、満足感、喜びを感じることを支えるのがボランティアスタッフと考える。

◎重度の方が参加できるプログラムもあった。その人が生きられる場を保障する配慮が必要なのではないかな。

☆お出かけのプログラムを組んだある青年学級では、本人が行きたいかどうかを選択できたことがよいと保護者が話していたことが印象的。参加しないという選択肢もありうるし、参加したい場合には周りがサポートする。インクルージョンの考え方は、なんでも一緒にすることではなく、それぞれの障害に対応して配慮ができること。北欧で、印象的だったのは、自閉症の子と一緒に勉強しているクラスで、一人になりたいときにはカーテンで仕切ることができた。大げさに壁を作ることはない。「一緒に」と「分ける」を障害の程度によって対応している。

◎自分は成年後見制度で市民後見人をやっている。本人の意思をギリギリのところまで大事にするようにしている。できないんだからではなく、自己決定ができる場をいかにつくるかを大事にしている。ワクチン接種を希望するかどうか、親が決める人も、自分で決められる人もいるし、全く決められない人もいる。その人に対して、ま

わりがどう支えるか学んでいる。スタッフとしてのかわりも大事だけれど、「みんなの会議」で参加者同士意見をぶつけていく、方向性を見つけていくことに期待する。参加者が主体となって、自分たちで答えを出して、もし間違えたりしても自分たちの結論だから受け入れられる。そんなことを学べるカレッジになると嬉しい。

◎自治体が主体の青年学級は、多いのかそれとも珍しいのか。

☆東京都では八王子市以外は、自治体の主催事業でやっている。三多摩は当初から公民館でやっている。その他関東では、埼玉県が多く11市、千葉市、川崎市（全市民館）で実施している。全国でみると、名古屋市はグループの取り組みに補助金を出している。和歌山県での教員の取り組みのように、全国的には、同窓会活動という養護学校（特別支援学校）が主体というところが多い。行政が責任を持って実施しているのは、東京都が突出している。

◎他の自治体も職員とスタッフとで一緒に実施している形が多いのか。

☆職員がかかわっているところもあるが、ほとんどはスタッフが活動の中心。職員は場所の確保程度。

◎スタッフが中心の方が成功しているのか。

☆スタッフが固定化しすぎると、せっかく参加した学生がすぐに辞めてしまうこともある。養護学校の先生時代から、退職後もずっとスタッフとしている人には、職員は何もいえなくなってしまうこともある。職員からも相談を受けたりした。ただ、学校の先生だからプログラム作りは上手、できてしまう。職員からは、プログラムを組んでくれて楽だという場合と、これでよいのかという場合がある。東京都では、ボランティアがいて成り立っている。

◎基本的にはボランティアがいて成り立つもの。これからの課題としては、どうボランティアを育てるかということ。若い人たちに広げていくことも。そのために何が必要か。具体的に試してみる必要がある。今、学生が参加していることはチャンスである。ボランティア養成講座がきっかけで参加したスタッフも多にいる。そのことからボランティア養成講座は続けていくべき。

第4回スタッフ会議 記録より

日程	令和3年10月27日(水)	出席者	スタッフ9名 職員5名
(発言者 ◎=スタッフ ○=公民館)			
【スタッフ・コーディネーター交流会の感想および意見交換】 ◎『スタッフ中心によるところが大きい、スタッフで固まってしまってもうまいかない』との意見が心に残った。スタッフの高齢化も進む中、『頑張っていかなければ』と思った。 ◎『憲法にある学習権の保障である』との明示をいただいたことが大きい。これから先の「くぬぎ教室」の在り方を検討するにあたっては、「検討会」を立ち上げて考えていけばよいので。4月以降の「くぬぎ教室」にどう繋げていくか。 ◎参加者とどうかかわっていけばよいのか、考えるきっかけになった。「学び」をどう考えるのか、結論はすぐに出ないが、一緒に考えていけたらよいと感じた。 ◎前は自己紹介に時間を費やしたので、今回は会議時間を増やすか自己紹介の時間を短縮して会議時間を多くとりたい。 ◎成果報告会に小林先生の助言を活かすなら、早期に交流会を開く必要があるが、間に合わないのであれば、成果報告会の後でよいのではないか。 ○スタッフの考えとして、コーディネーターと交流会は今後も行いたい。この結論を、公民館から小林先生へ伝える。交流会の時期は、2月ごろ中心に小林先生のご都合を伺い調整する。 【成果報告会(以下「報告会」)の内容について】 ◎「コロナ禍(オリジナルダンス)」「くぬぎレインボー展示」「みんなの会議」の報告などだろうか。 ◎報告会は、誰に向けたものと考えればよいか。 ○市民へものと考えているが、参加者がやってきたことを見てもらいたい。 ◎報告会は委託事業の一環として位置づけられている。昨年度は、基調講演と4つの分科会を設け、「くぬぎカレッジ」と関連させたものを企画したが、今回はおこなったことの発表となるのか。 ○昨年度、午前は「成果報告会」、午後は「支援者研修『障害を理解するための講座④』」とし、同日の午前午後で企画したが、位置づけとしては別のものという認識。「成果報告会」はおこなってきたことの発表となる。今回の「報告会」は市民に向けたものとする方向でおこなう。 【カレッジ参加者との接し方について】 ◎過剰なスキンシップをしてくる人もそうだが、発言が少ない人に対しても工夫は必要。かかわり方について、情報が共有できないか。 ◎各個人の特性などを記録して、それを閲覧するようにできないか。 ○個人情報の保護の観点から難しい。 ◎朝のスタッフ会議に、口頭で伝えてはどうか。 ◎新しいスタッフは、参加者と面識なく始まるので、他のスタッフの見よう見まねで何とかやっている。 ◎社会生活でダメなものは、教室でもダメだと伝えたい。学生さんも上手にかわしている姿を見ることはある。相手に不快感を与える態度を、だめだとしっかりいってあげることが大切。 ◎サポートが必要な人は一人ではない。初めての参加者については情報がないが、本多、並木公民館のくぬぎ教室に参加している人については慣れたスタッフに担当してもらおうなどの措置も大切なのではないか。 ◎初めての人に先入観なしで接することも勉強になる。			

◎講座で「決めつけない」ことの大切さも学んだ。

◎午前中は「くぬぎ教室」午後は「カレッジ」と正直バタバタしている。スケジュールをこなすことに終始して、目的と手段が逆転している気がする。「カレッジ」の時間は2時間と決まっているのか。「みんなの会議」でも決まったことをこなすだけに見える。もう少し余裕が持てないのか。

○「教室」とは別の日に「カレッジ」を設定することが難しかった。また、参加者の中には「15時に帰る」というリズムの人もいて、終了時間を延ばすことも難しい。

○コロナ対策として、2時間以上の事業を行うことが難しい。

◎「みんなの会議」の時間は短い。

○スタッフ向けの朝の会で議題を共有してはどうか。

第5回スタッフ会議 記録より

日程	令和4年1月19日(水)	出席者	スタッフ7名 職員4名
(発言者 ◎=スタッフ ○=公民館)			
【共に学び、生きる共生社会コンファレンス(関東甲信越ブロック)について】 ○昨年度予定していたが、中止せざるを得なかった内容をベースに引き継いで企画したもの。青年学級、支援者、喫茶、特別支援学校での取り組み、青年学級卒業生の活動の場の紹介をする。国分寺市の障害者自主グループである「まつりバンド」がバンド演奏をする。			
【スタッフと指導者・コーディネーターの交流会とスタッフ会議について】 ○2月19日(土)18:30~20:30開催予定。コロナ禍で交流会の時間が制限されているため、少しでも話がスムーズに行われるよう、「話し合いたいこと」のアンケートを事前に提出してほしい。 ○障害を理解するための講座④「差別のない未来をつくる」の感想を共有したい。			
【成果報告会について】 ◎指導者・コーディネーター小林さんのひとことの時間が短いのではないかと。スライド説明の時間も短い。レインボー中継が長い。修了証を作してほしい。 ○小林先生にはこの時間で了承をいただいた。参加者の報告会なのでこの時間設定としたい。成果報告会としての3つの柱「スライドによる活動報告」「くぬぎレインボー中継」「オリジナルダンスの発表」はそれぞれ20分ずつ時間を取るようにする。修了証は作成し、報告会で渡す。			
【スタッフより コミュニケーションルームの提案】 ◎「わたしのミライ・みんなのミライ」では、せっかく参加者の気持ちが出てきたのに未消化で終わった部分がある。やりたいことは出たが、どう実現するか、困ったことを解決していくかまでは話ができなかった。これからの社会は多様化していくし、本人も家族も高齢化する。判断が難しくなることもあるだろう。未消化ではあったが、大事なテーマに触れることができた。これを踏まえて「スタッフとして何ができるだろう」と考えた。スタッフが受け皿となって、必要があれば専門家につなぐこと。スタッフ皆、人生経験や体験・知識を持っている。いろんな立場の人がいて、ちょっとでしゃばりなくらいに参加者のことを考えている。いま既にやっていることだろうけれど、カレッジからの形あるものとして、「コミュニケーションルーム」の開設を提案する。悩み相談だけではなく、うれしいことの報告や自慢話も語りたいもの。共有できる話はジャーナルに載せていくこともできる。まずは、来年度くぬぎ教室開催日の昼休みや教室終了後に有志で残って時間を持つなど、やれることからやれる範囲でやりたい。参加者が話したいことをスタッフに伝える。スタッフは自分の経験から答えられること、相談窓口を紹介すること、今後の活動に反映させていくことにつなげる。やれることをやろう。これからでてくる「少し重い問題」も含めて聴き、受け止められるようにしたい。くぬぎ教室の仲間として、カレッジで学んだ仲間として、一緒に考えていきたい。今後に繋げていきたい。 ◎この2年間やってきたことを丁寧に振り返り、素晴らしい提案をつくってくれて感激している。「公民館としてカレッジの経験を各館に反映させていく」こととの関連性は？ ◎すでに個別に相談したりする関係性はある。カレッジ事業としてメールや電話はやってきたはず。 ◎カレッジの中にメニューとして組まれていたことだったかもしれないが、その機能を今後も残したい。一部の人のだけでなく複数で担い手となることで、経験を積み、スタッフの向上にもなる。関係性が繋がっていく。せっかく			

お金かけてやってきたカレッジを、我々がお金をもらわなくても繋いでいけるようにしたい。

◎よりよく地域で生きるための周りの支えは豊かであるに越したことはない。それを全部公民館が背負って公民館事業としてやると動きづらさがあるだろう。であれば自主グループとして相談に乗ったり、窓口への相談へ同伴したり、公的支援につなげること、つなげるための聞き役を担う。人間関係、信頼関係、仲間意識がベースにないと相談しづらい。関係を構築してきたスタッフが組織的に相談体制を組めていると、きっかけづくりとして、コミュニケーションルームの考えは「一歩先へ進む」条件的に繋がると思う。全部を背負うのではなく、橋渡しの役割。一番身近に接しているからこそ支えられることがある。昨年度のカレッジで始めた電話やメールもひとつのきっかけだっただろうが、公民館事業としてやっていくことの限界がある。

◎スタッフと参加者での自主的な動きへと移行していく必要がある。

◎提案は自主グループ化ということか。

◎そこはどちらでもよい。自主グループとして柔軟に動けることと、職員のかかわりも必要でもある。

◎必要性はすぐわかる。スタッフとしてどこまで自分が力を入れられるかが不安。気持ちはあってもどこまで協力できるか…。賛成だが自分がどこまでできるかがわからない。申し訳ない。

◎それぞれのスタッフが自分の問題として2年間やってみた。自分は何ができるかを考えることが大事。

◎恋ヶ窪公民館のくぬぎ教室では以前は15時以降もコーヒー飲んでおしゃべりする時間をとっていたが、コロナでできなくなっている。本人たちがどこまで望んでいるかにもよる。気軽に話せる場を復活させるところから改めて考えたらどうか。きちっと決めてしまうと、スタッフを続けることに負担を感じてしまうかもしれない。

◎参加者を対象にした研修は今までなかった。市障害福祉課係長やスタッフを講師にして、3回目の総論的な「わたしのミライ・みんなのミライ」をやりたい。恋愛・結婚についての話や「これだったら面白いから、自分のことだから参加したい!」となるのではないかな。2回やったからこそ、未来のことを考えることができるかもしれない。中途半端だったことが心残り。

○公民館課としてどんな形ならできるのかを検討したい。

◎「検討」の中身として、講師料の発生しない情報交換会・勉強会があってもよい。話し合う場と情報提供する場。「学びの場は講師を呼ぶと謝礼が発生するものだから年1回しかできない」とかではなく、いろんな形があってもよい。いまとても大事な時期。来年度の計画を立てるときに、学びの枠を1回取ろうとか、枠組みには方針が必要。みんなの意見を聴く前に前提・想定する指針を考えておく必要がある。「貴重な意見をいただいた、職員で検討します」ではなくて、一緒に考えていくべきだろう。具体的に話していった方がいいのではないかな。

○各教室のスタッフ会議で一緒に決めていきたい。

◎カレッジ同窓会のように集まるとよい。

◎ちょっとしたお話ができるとか、顔が見えることがとても大切。お金をかけなくても、場所さえつくれば。

◎「同窓会」よいですね。採用しましょう!

第 2 回スタッフ・コーディネーター交流会
(兼 第 6 回指導者・コーディネーター会議／第 6 回スタッフ会議) 記録より

日程	令和4年2月19日(土)	出席者	スタッフ8名 小林繁コーディネーター 職員 6 名
----	--------------	-----	---------------------------

(発言者 ☆コーディネーター ◎=スタッフ ○=公民館)

☆成果報告会に参加した。2 年間の取り組みを振り返る良い機会となった。文科省のモデル事業なので、このまま継続するのは難しい。これはチャレンジであり、尽力してやったと思う。プログラムとしてアイディアはいっぱい出てきたと思う。どのように教室に反映させていくのかが今後の取り組みとなる。この 2 年間でどうだったか、というより、どう生かすかが総括になる。教室の活動などにつなぐことができたとき、はじめて生かせたといえる。今後も生かしながら取り組みを続けてほしい。スタッフ研修会、新たなスタッフをどう獲得していくのか。スタッフ養成についても全国に発信できるような新たな展開を期待している。ホップステップジャンプとなるようがんばっていただきたい。

○各スタッフから、質問や意見・コメントを交換してほしい。

☆単なる質疑ではなく、交流会として気兼ねなく話したい。

◎カレッジの成果を教室で反映するというのが、「学ぶ」ということについて、重度の方、得意ではない人にどういう特別な配慮が必要となるかを考えている。2 年間の活動の中でも、工夫と手助けが必要だということだったので、どういう手助けが必要なのか考えてきた。恋ヶ窪教室と本多・並木は違う。並木では勉強する学びは馴染まないと思う。楽しいことをしながら、結果として学びがあればよいと思う。並木ではそうしたい。カレッジのやり方は、少し違うと感じる。このことは並木スタッフで話し合いたいと思うが、学んだことを反映させたいとは思っているので、どうすればよいか伺いたい。

☆問題提起ととらえる。「学び」のイメージが、学校、座学というイメージに引きずられてしまう。社会教育では学びを広くとらえる。レクリエーションも含む。そのようにとらえることがひとつ。ただ、系統立てて知識などを習得することが必要な時もある。

23 区の取り組みでは、重度の方の学びの展開に対する蓄積がない。それは、軽度の方を中心に青年学級が始まった経緯があるため。重度の学習支援をどうするかは、蓄積がないが、非常に重要、大事なこと。重度の方の取り組みを実施したことをぜひ発信してほしい。

軽度の方への取り組みが充実している自治体ほど、重度の方の話が出てこないという現状もある。カレッジの3つの取り組みは、重度にも十分対応していると考ええる。例えば、「コミュニケーション」は障害児にとって難しい問題。合理的配慮としては、①文章を1文 1 文、分けて話す。②簡単に答えられるような質問をし、その答えに対してやりとりをするような工夫をしてほしい。カレッジではやってきたと思う。

「自分を知る」ことは、とても難しいことだが、カレッジでは挑戦した。ワークでは、自分のことを考える仕掛けをしていた。精神障害では、当事者研究という分野がある。医師からこういう病気です病状ですと聞くというのに対して、自分で自分の状態をどうやって説明するかということ。「トリセツ作り」の取り組みはまさに当事者研究。自分をどう説明するのか、ということに、この取り組みはとても似ていると思う。自己表現活動につながっている。

みなさん、取り組んできたのだから、スタッフで議論して共有すること多いのでは。

重度の方の取り組みを国分寺市が先頭に立って発信してほしい。

◎カレッジでは様々な活動をした。重度の方は身体表現、造形は優れている方も多い。活動の中には参加がむずかしいと感じるものもある。一緒に活動するのであれば、スタッフがマンツーマンで関わるなどを考えればいいのか。表現活動など、自分を表せることを通じて参加者の意図をくみ取れるようにしたい。教室を分けるとよ

いのか、介助も必要になってくる、軽度の方に合わせるとむずかしい、重度の方のためには相当の工夫、配慮が必要だと考えている。

◎3館のスタッフ同士がどこかでつながることが必要なのではないかと。館ごとの特徴は大事にしつつ、全体で情報共有しないと不安。どこかの館でスタッフ少ないとなると、その館だけの問題ではないと思う。3館で交流会などできたらよいと思うし、そういうことが大事になってくるのかと思う。参加者にも得意不得意があり、なんとなくわかっていて。年間通して、誰もがひとつ得意なことが盛り込まれているといいのかと思う。カレッジはとても良い経験だった。課題はこれからいろいろあると思う。

☆一緒にやることと、個別対応が必要となることは出てくる。全体とのかかわり、活動をうまくつなげていくとよい。話し合いの時に、重度の方がいても、わからないだけではなく、何かを感じている。時間と空間を共有することにも意味がある。無理だと決めつけず、その人の可能性を信じながら活動に参加するのがよいのでは。一緒に学び、必要な支援はするということ。

◎マンツーマンでの対応が「見張り」になってしまうことがあると考える。席を立ってしまう人のことは、教室では遠くから全体をふわっとみるようにしている。カレッジでは、見張っているように感じるがあった。カレッジには、いろいろな方がいるけど、2年間でなんとなく馴染んできた。難しい話し合いはできないけど、一所懸命話を聞いていると嬉しそう。話し合いのテーマを簡単にしてもよいと思う。発言に対して同意することでも話し合いの意味がある。教室でもそのような話し合いならできるのではと思ったのでやってみたい。

☆話し合いは、手段ではなく、目的。話し合うこと自体が目的で、学習となる。何かを決めるための話し合いだと、できない人が排除されてしまうのではないかと。決まらなくてもよい、プロセス過程が大事。

◎発表する時間になると途端につまらなくなった。成果を求められることがわかると急に面白くなるのは、そういうことなのかと思った。また、話し合いがうまくいったのは、スタッフが多いこと、特に若いスタッフが多いことによる。学生がいてよかった。

◎カレッジでは、とにかく時間がなかった。これから盛り上がるところで時間になった。最後のほうで少し時間に余裕をもって取り組めたのはよかった。カレッジに参加することで他館のスタッフ、参加者に会えたことがよかった。各館での取り組みや、スタッフの工夫とか、情報共有できたらいい。スタッフ3館での交流機会がほしい。このよい機会を無駄にせず、各館に戻って学んだことを反映させて、職員とスタッフ一緒に話し合っていきたい。今後には生かさなければ無駄になってしまう。

◎「学ぶ」ということが参加者にとってどうだったのか、2年間で少し理解できてきた。カレッジに関わっていないスタッフを含め各館スタッフ全員と情報共有して取り組んでいかなければいけない。伝わらなければ、うまく反映できないと思う。職員とともに方法を考えたい。本多では、重度の方の担当はずっと隣で支援するという形をとっている。活動に参加できるように促してはいるけれど、その時々で対応は難しいと感じている。今後の本多の課題でもある。

◎担当ではないスタッフも一緒に見守ればよいと思う。スタッフ同士が仲良くなる、信頼関係があることが一番大事。

◎スタッフによって支援の方法はそれぞれで、一致させることは難しい。スタッフ期間が長い方、短い方では違ってくる。スタッフ同士で話せばよいのだが、なかなかできない。

◎重度の方の見守りがうまくいっているのは、「ファミリー」となっているからだと思う。スタッフと参加者との信頼関係がある。重度の方は、自分が認められると生き生きする。回数を重ねればうまくいくのではないかと。信頼関係を育むには、カレッジでは時間が足りなかった。

◎スタッフにより対応が違う場合、スタッフ同士でそれぞれの対応について聞いたり、確認したりすることができるようになった。その結果、みんなでみていることができるようになったと感じる。

☆福祉や医療の分野で言う「ケース会議」が必要なかもしれない。重度に対しては、ひとりひとりのことを全員で話しあい、情報共有して対応することが大切かもしれない。

◎高齢者施設でもスタッフの会議を頻繁にやっている。スタッフとして活動するときも、自分から楽しむことが大切。スタッフ同士が声を掛け合ったり、仲間意識を持つことが一番良いと思う。

◎これまで注意の仕方に悩んだことはあまりなかったが、今年カレッジで悩んだことがある。自分の存在に気づいてほしいのか、わざと嫌なことをしてくる方がいたので、かなりきつく注意してしまった。本を読むと「注意するときは優しく」と書いてあるので、自分の対応はどうだったのか。青年として対応したつもりではある。

☆そのような悩みなどを出し合い、話し合うことが大事だと思う。

◎厳しい態度のスタッフには嫌なことをしない場合がある。相手の態度をよくみているし、それにより自分の態度も変えている。人をみて態度を変えるのはみな同じ、正直な反応だと思う。

☆私たちと同じ反応だと思う。

☆教室参加者による「地域におけるボランティア活動」「市民への発表活動」は、とても大事な問題提起。とてもよいアイデアだと思う。

◎スタッフミーティングでの提案書（参加者とスタッフが相談したり、おしゃべりしたりする「(仮称)コミュニケーションルーム」を開設したいという提案）に関する提案だと思った。グループ活動という形になるのか。各館教室で実施するのは難しいと感じる。カレッジや教室のスタッフという立場を超えて、実現できることを考えていこうというのはいいことだと思う。

☆高齢者施設で知的障害者が関わる事例がある。認知症の人が何度も繰り返す同じ話を障害者は聞いていられる。とても評判が良い。ボランティアとして活動できたらおもしろい。地域の団体と一緒に取り組めば、発展できるのではないかなと思う。

◎スタッフとして多くのジレンマがあった。3館の文化の違いを感じたが、カレッジで横串が刺さった分、来年度以降の活動への期待に繋がる。ベテランスタッフの市民力・強みがあったからこそ、1年目を経て、2年目も実施できた。コロナ対応で当初の企画ができなかった時でも、工夫して道を探し「くぬぎらしい」活動になったと思う。参加者にとって、苦手なこともあるが、学習することで、共に語り合うことで乗り越えていくというのが大切。参加者のポテンシャルの高さもあった。カレッジでの経験というプラスアルファが、今後のそれぞれの館の活動の「ジャンプ」につながり、国分寺らしさが見えてくると思う。

◎他館スタッフと交流して学ぶことが多くあった。同窓会として交流したい。

☆今後この成果をどう生かせるか、だと思う。頑張るって！

○3館交流、スタッフ同士、スタッフと職員、参加者との交流も大切であると再確認された。各館の今後については各館スタッフ会議でしっかりと議論していきたい。教室を今後さらに発展していくためには、スタッフの力が必要だとあらためて感じた。

最後に、小林コーディネーターに2年間関わっていただき深く感謝する。今後ともご助言いただきたい。

運営スタッフ振り返り記録

7月11日 振り返り記録(文部科学省視察あり)

【文部科学省より】

- ◎大人数でもスムーズに進んでいた。
- ◎今後、効果・変化がわかるとよい。
- ◎カレッジの雰囲気がよい。みなさん親しい。参加者同士の関係もよく、スタッフを含め、地域のつながりができているようでとてもよかった。
- ◎安定感を感じた。スタッフ、職員も充実している。

【スタッフ感想】

- ◎楽しかった。会議のイメージがいたら嬉しい。
- ◎進行が上手だったので会議ができたと思う。今後はみんなで試行錯誤しながらやりたい。
- ◎スタッフとしても、聞くことも大事だが、みんなが発言できるようにしたい。
- ◎意見をもって「話す」ことができた。今後「まとめる」ことは課題。
- ◎昨年とだいぶ変わったように感じた。Kさんには難しく、落ち着きがなかった。
- ◎Uさん「(レインボーに関することではなくても)何を書いてもいいんですね?」と確認していた。こちらの伝えたことを理解していた。
- ◎意見を紙に書いて発表したけど、書いても発表しないことがあった。自分で選択して、いいたくないことはいわなかった。
- ◎昨年実施した「恋バナ」「新聞づくり」が活きていて、続いていることを感じた。自信をもって話している様子がみえた。
- ◎自分の思いを文章にするのが難しそうだったが、いろいろな質問をして整理をしやすいようにした。
- ◎昨年は公民館がお膳立てしているように感じたけど、今年は参加者の主体性を感じることができた。
- ◎ちょっとした促しが、行動につながっている。
- ◎会議での発言については、いいたくない人もいると思うので、そういう点を考えていきたい。
- ◎特別支援学校と卒業後の地域での学びの場とのつながりがなく途切れてしまう。そのフォローを文科省にも考えてもらいたい。

【文部科学省からの質疑応答】

Q くぬぎ教室のスタッフに加えて、なぜカレッジのスタッフにも参加しようと思ったのか?

A スタッフ同士、参加者も、仲間がいるから。

新しい事業だから興味があった。

くぬぎ教室の企画も長年続けているとマンネリ化を感じたので、新しいことを見つけたかった。

8月22日 振り返り記録(「自分のトリセツを作ってみよう」講師参加)

【講師の感想】

- ◎ワークの内容が参加者によって難しい人もいるかと思ったけど、皆さんスムーズにワークに取り組めていたと思う。また「自分がやられて嫌なこと」みたいなマイナス要素を含む内容もあったので、書きたくない人

もいるのではないかと思ったが、書きづらそうなことも皆さん概ね素直に書けていたので、そういうところをまわりの人に伝えられるようになると思う。自分のことを知ると、能力を活かすことができるという考えが皆さんに少しでも理解してもらえたらよいと思う。

【担当スタッフ感想】

◎司会に慣れておらず、みんなの会議のときにスタッフの皆さんが参加者の意見を引き出して、まとめてくれるだろうと思い、各グループの話し合いをスタッフに任せっきりになってしまったのは自分としての反省。会議そのものはみんなが協力してくれたおかげで、大変楽しいものになった。

【スタッフ感想】

◎楽しく参加できた。一緒のグループになった参加者とちゃんと話したのは初めてだったが、参加者がいろいろなことを考えていることがわかってよかった。トリセツを書いていく過程で、それぞれお互いのことを話すので、それはよい機会だったと思った。みんなの会議でレインボーの今後について、「飾る、見せる」という方向性が決まったので、次回のパワーアップ大作戦が楽しみになってきた。

◎この課題で自分自身を見つめることで、これから自己表現というのが始まるのではないかと思う。そういう機会が持てたのはとてもよかった。一人ひとり弱みを持っていて、それを自覚して、そういう自分もいることをある意味表現した場だったのではないかと思う。「人の話を理解する力が弱いから、時間をかけてわかるように説得してもらいたい」とか、自分自身の力を見つめる目、認識する視点というのを参加者が持てる場ができたのはよかった。次に自分自身が何かを表現していく活動に結びついていくのではないかと思う。

◎トリセツって何?という参加者は結構いたのではないかと思う。トリセツについてまず説明して、自分自身が客観的にどう扱ってもらうのがいいかわかってもらうために、自分の説明書を作る活動だという表現があったら、参加者の取り組みへのアプローチももう少し違ったものになったかと思う。

◎他の参加者と距離を取りたい参加者の担当だったので、会場の外にすることが多かった。講座の内容は難しいというか、すごいことをやっているという印象を受けた。一つ気になることは、自分のことを言語で表現できない参加者は、どういう参加の仕方ができるかを考えていく必要があると思った。

◎参加者の共通意見として、「無視しないでほしい」「丁寧に」「わかりやすく」「大きな声は出さないで」「圧をかけないで」などと書かれている人が多かった。今後、私たちが参加者と接していくなかで、一番大事なのは、話をきちんと聞いてあげて、私たちの考えもきっちりと彼らに伝えていくことであり、その大切さを改めて感じた。今後の活動に活かしていきたい。

◎「自分がどういうときに楽しい」「悲しい」などひとつひとつ段階を踏んでワークをしていったので、最後の自分への接し方についてもイメージしながら書けたのではないかと思う。もっとみんな書けないでいるかと思ったが、スラスラと書いていてそちらの方がビックリした。そして自分自身も自分の振り返りになってよかった。発表した内容を頭に入れて、参加者の人と接していきたいと思う。

◎私のグループの参加者は最初、具体的にイメージがつかめていなかったようだった。しかし別の参加者が「僕、こういう風を書けたから真似してみてください」と働きかけてくれたことで、参加者が楽に考えることができるようになったのか、素直な言葉で自分自身のことを振り返りながら書いてくれたのはよかった。しかし、もう一人いた参加者はそれで逆に書きづらくなってしまったようで、私が「お仕事でなにかイヤなこととかないの？」などと質問しても「そういうことには触れたくないんだ」といわれ、「楽器とか上手ですよ？」という、「優れている風には見せたくないんだ」と発言され、逆にどう接したらいいか少し悩んだ。でも、それぞれ皆さん個性があるんだなあと思った。

◎今年度から関わるようになり、まだ参加者一人ひとりの性格などを知らないのも、グループで一緒になった参加者だけだが、ひとりひとりの特徴なり、思っていることを知ることができて、これから活動していく中ですごく勉強になった。参加者はワークに最初躊躇していたが、お互いに会話していく中で裏も表も感じなく、素直に言葉にすることができていたと思う。こういう場を持てたのはすごくよかった。皆さんいろいろなことがあって話しかけてほしいけれど一歩踏み出せずにいて、寄り添ってほしいと感じるところがあった。彼らに話しかけるのにも言い回しなどすごく大事だと感じ、自分自身もとても勉強になった。

◎私自身が自分のトリセツを書くことにすごく悩んだ。これが書けているのはすごいことだと思う。しかし参加者は何をいいたいのかがうまく伝わるようには書けていないように感じた。一文字、二文字の中にすごく思いがあって、その言葉だけではトリセツとしてみんなに理解してもらうのはとても難しいと思う。なので、同じグループの参加者が書いた内容についてとても悩み、どういう意味なのか、参加者と話し合いながら作ったが、私が言葉を足してよかったのか、そのまま発表した方がよかったのかがわからなくなってしまった。しかし彼と話すことで彼の思いがわかったような気がする。客観的な言葉で自分たちのことを伝えるのは、私たちでも難しい。

◎みんなの会議で意見を聞いた上で、自分の考えを変えてもよいというのはとてもよかったと思う。もっと皆さん意見を変えたりするかと思ったが、一人しか動かなかったのは意外だった。これからも一度決めたことに対して心変わりして違う意見にいつでもよいというのは、みんなの会議であってもよいと思う。

◎一緒にグループの参加者にスタッフが丁寧に内容について聞いていたが、そういうやり取りはすごく大事だと思う。参加者は「はい」や「いいえ」などでしか答えないが、一生懸命スタッフの質問に悩みながらワークシートを作成していた。ほかの参加者にもスタッフが一生懸命に聞いていて、参加者の人はとても満足していたと思う。よい顔をして「ここに来られてよかった」といっていた。私たちはわからなくても、ただ参加者の話を一生懸命聞く機会があったことがとてもよかったと思う。スタッフはみんな悩んでいて、スタッフも「自分が注目して欲しい」「叱られたり無視されたりするのは悲しいよね」などと参加者と話しているうちに、自分も納得する雰囲気になり、みんな一緒なのだなって気が付くことができた。

◎トリセツの意味がわからず、ワークシートを見たときに意外と自分のことがわからないことに気が付いた。第三者に指摘してもらったほうが、自分のことがわかるような気がした。グループで少人数での活動でいろいろな人と話せたことがよかったので、今後の活動の中でもたまには10分程度でいいので、みんな分かれていろいろ話を聞けたら楽しいと思った。

【くぬぎレインボーについて】

◎レインボーを「売る」という項目で活用する場合、レインボーの構造的に台かカウンター的なものがないと、レインボーの縁だけじゃ機能的に無理なような気がする。将来的に何かを置くカウンター的なものを作成できればよいと思った。

◎レインボーを活用するならば、そこに活動が伴っていないとならないと思う。月に1回の活動の中にレインボーを活用する活動を組み込んでいくのか、それ以外の日に有志という形で活動となるのか考えなければならないと思う。「売る」グループでは、作業所と連携して、作業所で作った商品を月に1回、市役所の前で売ったりするのもよいのではないかという意見も出た。年間を通した活動を伴った計画や活用方法を今後考えていかなければならないのではないかと思う。せっかく作り上げたので、来年度や再来年度にも何らかの形で活かしていけるよう今後話し合う必要があると感じた。

9月12日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎コットンボール（くぬぎレインボーのための飾り）を作る時間では、黙々と集中してできていた。
- ◎みんなの会議では、書く時間と話す時間が分かれていなかったのも、書くことだけで終わってしまった。みんなの会議は「話し合う」ことがよいところだと思う。
- ◎連携協議会で、参加者の意見を発表することについて、平日だと仕事があって参加できない人が多い。参加者の感想を反映させる道筋は大切にしたい。
- ◎ある参加者さんのボディタッチについて、「だめなことはだめ」と繰り返し伝えていくことが大事だと思う。

10月10日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎（担当スタッフとして活動した実習中の学生より）全体の司会や活動内での進行など担当した。言葉の選び方など考えることがあり学ぶことができた。緊張しながらも担当することができてよかった。
- ◎活動時間 2 時間半に対して、内容が盛りだくさんで時間がないと感じる。
- ◎終わってからもバタバタと帰る感じで、もう少し参加者と余韻を楽しむような時間があるとよい。
- ◎9月にも話したボディタッチの件、実習生も多い中、どのように話したらよいのかをきちんと学生に伝えていくことが大切。

11月14日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎細分化されてしまった世の中、できないことばかり目に付くが、認める・認め合うことが今必要なこと。
- ◎何をされると楽しいか、嬉しいかを参加者が語れた。発表以上に話し合いがおもしろかった。

- ◎担当が決めていた流れを進めていくことができた。8月からの繋がりでいい内容だった。カレッジの学び合いが今回で終わらないように。
- ◎たったの50分の中でどうしたらグループ参加者から引き出せるか不安だったが、話し合いで盛り上がる事ができた。
- ◎みなさんが積極的に話し、自分だったらこういわれると嬉しいなど出し合うことができた。自然体でお互いのことを話せる時間だった。
- ◎ダンスでは特別支援学校の授業で使えるような要素があった。話し合いでは難しいテーマだったが、それなりに言葉が出てきて、話し合いはできるものなのだったと思った。
- ◎参加者が楽しそうにしているのがよかった。楽しんでできる活動を学校の授業で組み立てたいと考えた。
- ◎グループ協議は難しいものだから、参加者ができるだけ多く話せるようにする配慮が大切。
- ◎グループ討議で困ったことは、同じグループの参加者に関わったことがなく、その人自身もほとんど話さない人だったので情報がなくてほめようがなかった。よく知っている人が同じ班にいればそれなりに話の展開ができたのかもしれない。
- ◎グループ編成するときに配慮事項がわかる人をペアにするなど考慮したほうがいい。
- ◎このテーマは大事な課題で、特に人を理解するとき、教員は子どものよさを発見することが大きな仕事のひとつ。特性を理解すること、その人のよさを発見し、そのことに自分自身が感動すること。よさを発見し、共有していくこと。
- ◎けんかばかりして関係がうまくいかないという人がいたときも、もう一度その人のよいところを見つけて、それを承認するという活動は日常生活の中で非常に大事なことで改めて感じた。
- ◎「特定の参加者ばかり発言していてつまらない」と参加者から意見あった。
- ◎困った時も相談できる仲間がいると思ってもらいたい。

12月12日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎「わたしのミライ・みんなのミライ」では、話し合いに時間をかけることができたのはよかった。貴重な時間が過ごせたと思う。
- ◎「わたしのミライ・みんなのミライ」の場を設けることは必要なことでよかったと思う。教室プログラムにはないもの。あくまできっかけであって、来年度の教室プログラムに取り入れたい。
- ◎普段あまり考えたことのない「未来」について、動機づけになればよい。夢のある話へもっていきたい。スタッフに相談、報告できる窓口を作りたい。
- ◎近い未来を考えることについてよいきっかけになったと思う。
- ◎他の人の意見をきいて、あらためて考えることができた。
- ◎自分の未来について書きだすことができ、考えることができた。来月ディスカッションしたい。
- ◎数か月参加できて、認識が変わった。
- ◎支えることを考えていたが、一緒に楽しむ、関わることが大切とわかった。
- ◎他の人の意見や考えを見て、自分はどうか考えることや他の人の意見を参考にする機会が必要である。
- ◎Bさんは、きょうは自宅ではなくグループホームに帰るので不安定だった。

- ◎Hさんは、自分の貯金がわからないとのこと。後見人が対応している？Eさんは、「投資」ということばを初めて聞いたとのことと、興味を持った様子だった。
- ◎「〇〇が食べたい」「〇〇をしたい」など、身近なことや、ほんのすぐの未来のことを書く人が目立った。話だけでは理解すること、イメージすることが難しい様子も見られた。
- ◎Aさんは、ダンスは楽しそうに参加することができた。「わたしのミライ・みんなのミライ」は、身近なことから参加した。

1月16日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎前回、思っても出せていなかった部分があり、その突破口を探りたかったが、もうちょっと時間が欲しかった。ただ羅列するだけでなく、それはどうして？とか話し込めることが大切だと思う。
- ◎書くだけではなく、そこから話ができるとうよかった。席を立てしまう参加者から話を聞くのも大事だった。
- ◎前回たくさん意見がでたため、深めることを中心にした。投資に関心のある参加者もいたからお金の話も大切だった。
- ◎(コロナの)状況が心配な中、実施できるようにという公民館職員のことを感じた。
- ◎こうして話せる場となったことが重要。普段はそうに見えない人も深く考えていること話し合えることがわかった。
- ◎未来を考える時、どうしていけば叶えられるのか、そこまで話せるとよい。
- ◎「～したい」までではなく、その先の話を深めたかった。“結婚”というテーマに「好き同士がするもの」ということ以外に、自分で考えている話もあった。思っていたよりもよく考えてそれを話してもらえた。

- ◎時間がなかったため「～したい」ということしか出せなかったが、もっと時間をかけて「これからは～します」「～しなければならない」と自分の問題と捉えることができたなら、困りごとや悩みごとがでてくるのではないかな。2回の「わたしのミライ・みんなのミライ」を経て、スタッフもこれから考えること、やれることがあると思えた。

- ◎テーマの設定自体は、かなり彼らの生活を見直し、これからを考える意味で重要だった。もうひとつ必要だったかなと思うのは、「～したい」という欲望・欲求の段階から、「自分はこうする」「10年後までに自分は自立する」などの決意や見通しにできるような深め方ができたとうよかったということ。意外だったのは、まとめ方がお金の話になってしまったこと。これでいいのか？と思ってしまった。むしろ後半の、実現するためにはどういう支援制度があるのかなどの市障害福祉課係長の話と、それと結びついていく方向性をもっと必要だった。これからの課題として、こういうことをやったという経験が、次に何かしようとする時の出発点になればと思う。

- ◎自分の班では希望はあまりでなかったが、前回出し合ったところから深める話ができた。一人暮らしの人から話を聞き、どうしているか話し込むことができた。どんな家事が必要かなど、具体的な話ができた。実際に経験している人が班にいたから話せたこと。貴重な体験だった。

- ◎お金の話も大事だけれど、市障害福祉課係長からもっと具体的に支援制度などを知れたらよかった。市役所だけでなく、NPOなど含めて、彼らに選択肢として示せたらよかった。参加者へのスタッフからの声かけが本人の心の支えになっていると、その人の支援者からお手紙をもらった。
- ◎スタッフも落としどころがわからなかった部分がある。見たものに対して深く討議していくことが難しいメンバーだったため、挙げられたことを集めて分類することしかできなかった。市障害福祉課係長の話に丁寧に時間をとってほしかった。
- ◎お金の話や恋愛の話などの話をする前に、「人間として大事なこと」を話す機会があるとよかった。コミュニケーションの悩みを相談する、話し合う機会がほしかっただろう。先のステップの話の前に、身近なこと、大切なことを話すのがいいだろう。
- ◎みんなにとってはどうだったのかと思う。実際の悩みがあって、こんなときどうしたらいい？という話のほうが発現的に役に立つプログラムになったかなと思う。カレッジは終わっても、今後もみんなでこのように話し合える場があるとよい。困ったら市障害福祉課に聞こうと思えるような話になればよかった。
- ◎結婚の話は年代によって当事者意識が異なる。どこで誰が「彼らが自分らしく生きられるような条件整備」をしていけるのか。くぬぎ教室が、その場になるのではないかな。55歳の参加者が「自分もできれば結婚したい」という気持ちを持ち続けていることを聞いた。ほっとした気持ちもある。なにか支援ができないかなと思う。長崎では60歳で式を挙げ、グループホームで暮らしている例もある。将来のビジョンを考え、共有する場として意味がある。

1月30日 振り返り記録

【スタッフ感想】

- ◎ダンスがとてもよかった。
- ◎(ホール内に展示した写真について)プロカメラマンの写真は表情がうまく出ていて素晴らしい。
- ◎参加者それぞれ頑張っていた。
- ◎Mさんに個別にサポートをつけた方がよいのではないかな。文科省の方に失礼にあたる態度だったように思う。
- ◎楽しくやれば、喜んでもらえれば、という遊び心。
- ◎健常者・障害者の境界線なくできた。
- ◎Kさんが「司会の時にもお辞儀をしたほうがいいよ」と話していた。
- ◎ダンスがとても生き生きしていた。客観的に見てこんな表情で踊っていたんだなあなどと感じたり、全体の雰囲気を見られた。とてもまとまっていた、楽しそうだった。
- ◎明るくて楽しかった。
- ◎参加者は晴れの舞台をわきまえていた。
- ◎Oさん、準備から張り切っていて、総合司会ということもあって緊張疲れしていた。
- ◎Mさんは自信につながっていたように思う。

- ◎達成感があった。
- ◎Mさんは椅子のまま移動していたり、落ち着かない様子だった。下ネタをいったりして、興奮気味だった。
- ◎「報告会」という緊張感の中、一人ひとり自分の役割に責任をもって取り組んでいて、楽しそうにできていた。主体的、自主的にできた。
- ◎Mさんについては、個別にサポートをした方がよいといった意見もあったが、管理されないことがよいように思える。
- ◎報告会の役割は、思った以上に果たしていた。最後に自由に感想を話してもらう場で発言があったので、台本にも活かされればよかった。
- ◎それぞれが頑張っていたから、もっと話してもらえる機会があったらよかった。
- ◎成果報告会に出て、ようやく全体像がわかった。もう一度振り返ったことで丁寧に読み取ることができた。
- ◎カレッジの活動全体を振り返って、「みんなで考える」という場がよかった。話し合いが多く、生活や考えがわかる。これからのことは、今度考えていかなくてはいけない。
- ◎半日の活動だが準備時間がかかった。
- ◎暖かい雰囲気会の会だった。
- ◎くぬぎレインボーの中継がとてもよかった。
- ◎コロナ禍でも成果報告会ができてよかった。楽しめた。
- ◎Fさんが楽しめていたこともとてもよかった。
- ◎くぬぎレインボー中継班で台本を作成した。自分に自信が出るものがあってよかった。
- ◎スタッフは主体的に関わりたい。でも計画段階から関わると会議だらけになる。どうすると一番よいのか。
- ◎今後、くぬぎ教室ではスタッフと職員とが力を合わせていきたい。
- ◎離れてしまったスタッフもいるので、もう少し声掛けをしてもよかったのではないかと。職員はいろいろな人を呼び込んでほしい。
- ◎報告会に他市の関係者がいないのは残念だったが、2年間の活動の共有の場としては、有意義な場となった。
- ◎くぬぎカレッジ全体として、意図したものはできたのではないと思う。
- ◎成果報告会に関して、意見を求められたことがなく、この成果報告会には部分的にしか協力できなかったことが残念だった。担当スタッフ以外のスタッフももう少し踏み込みやすい形を取ってほしかった。
- ◎くぬぎ教室とカレッジは違う。くぬぎ教室はスタッフが頑張るもの、カレッジは職員が頑張るものと思っていた。来年度以降はカレッジがなくなり、その要素がくぬぎ教室に吸収されるのであれば、今度はスタッフが中心でできる。職員は頑張ってくれていた。
- ◎来客者が気になった。誰に何を伝える会だったのか。全く知らない人がいなかった。ということは内輪の会。全国に広めるための文科省受託事業であったのなら、もっと告知をすべきだった。ここは今後強化できる部分としてやっていきたい。

運営スタッフの声

今年度くぬぎカレッジの活動全般について・成果や課題点について

- ◎色々な思いが多すぎて、急ぎ足で一年が過ぎてしまったような気がした。話し合いのテーマも一つにして、一年かけて話し合うでもよかったかなあ、恋愛だけでもよかった。
- ◎お一人おひとりの参加者の皆さんの意欲や頑張る気持ち、自分のできることを精一杯取り組む姿勢など、本当に立派で、毎回驚かされるカレッジだった。

【成果】

- ◎2年間かけて「くぬぎレインボー」が完成。大勢でつくる喜びを得ることができた。「くぬぎレインボー」の今後の活用を検討していきたい。
- ◎ダンスはチョッキ先生と一緒にできてスタッフも参加者もよい時間になったようだった。今後もチョッキ先生とやりたい。
- ◎青年学級は、これからどうしていくことが望ましいのか、今後どのような展開が可能なのか、小林先生からいただいたご指摘やアドバイスによって、これまでとは異なる視座を持てた。
- ◎移動式屋台「くぬぎレインボー」により先々公民館行事や市内のイベントにでかけ、創作ダンス・歌のコンサート・くぬぎジャーナルの配布などをして地域みなさんに発信していく道が開けたように思う。
- ◎互いに意見を出し合い、まとめていく「みんなの会議」は充分ではなかったが、会議の進め方・まとめ方など、今後の活動に向け、成果も多かった。
- ◎創作ダンスやみんなの会議の発表など参加者の自己表現が活発に行われ、参加者1人1人が主役となって活動し、成長したと思う。だんだんと回が進むにつれ、参加者がカレッジの活動を楽しんでいたことがよかった。
- ◎ラボ(学習)も十分ではなかったが、地域でよりよく暮らしていくために必要なスキルや自分を見つめ他人との関係を考えるテーマなど、一度どこかでしっかり考えなければならぬテーマを取り上げ、参加者の今後の生き方を考えるために役立った。
- ◎多くの市民や関係者の皆様のご理解とご協力があって、大きな事故やトラブルもなく年度末の総括・成果報告まで迎えられた。昨年度に続く、2か年目のくぬぎカレッジの活動、関係者のみなさま、本当にお疲れ様でした。改めて、これまで多くの学びと感動をいただきましたこと、この場にて感謝いたします。
- ◎皆さんがやってみたいことや、将来こうありたいということを知ることができたので、やってみたいことは今後のくぬぎ教室へ活かしていく。(声を出すことや、字を書くことが難しい参加者が本多くぬぎ教室には多いので、知ることができてよかった)

- ◎カレッジの参加者は恋ヶ窪教室のメンバーが多かったが、本多・並木の参加者・スタッフも参加した。また、職員は5館参加した。結果、他の教室のメンバーと活動を通じ交流ができたことで、将来の五館構想の実現や3館の合同発表会に向けた流れができたように思う。
- ◎明治大学小林先生のご助言やご指導に支えられての事業だったと感謝している。全国的な取り組みやくぬぎカレッジの位置づけといった、国分寺市のみならず障害のある市民の学習支援の在り方について、専門家である先生からの広い視野を持てたことは大きな助け・糧であった。
- ◎参加者、スタッフの皆さんと広く交流できたことは、くぬぎ教室のスタッフをやっているそれぞれの館の情報共有など出来たためになった。コロナ禍の状況が続く、かつ時間も限られている中で目標としていたことが、どれだけでできたかについては、各々に差はあったと思うが、おおむね一通りをこの1~2年で挑戦してみることはできた。みんなの会議、将来を考えるラボなど時間が足りず、学びを深めることは難しかったが、参加者が、どんな些細なことであれ自分のやってみたいことを紙に書いて、発表するのは自己表現という意義があった。

【課題】

- ◎正直、くぬぎレインボーは移動式屋台としては重すぎるように思う。今後の地域の皆さんへの発信活動を考えると、軽量の屋台か代替品が必要に思う。
- ◎カレッジの目的の1つに地域の皆さんと考え、地域の皆さんに発信していくことがあったかと思いますが、コロナ禍で十分できなかった。地域のみなさんにカレッジ終わっても、できなかった点をどうしたら、どんな機会に発信できるかを考える必要がありそう。
- ◎連携協議会は教育や福祉の関係者が一堂に集まる会議で、1年目の当初は傍聴可能な公開にするのかの議論があったと記憶している。もう少しオープンな場や議論があったら、スタッフとしても連携したり課題を共有できたりとわかりやすかったかと思う。
- ◎くぬぎカレッジは常に過密な状況の中で開催されたことは、既往症などをお持ちの参加者の体調や病状・障害の特性を踏まえると、もう少しきめ細やかなコロナ対策（分散対応やオンライン対応、メールや書面での情報共有、市内感染者状況など）があって然るべきだったと思う。
- ◎将来こうありたいということについては、参加者それぞれを個別に周りの人がサポートしていくことも大事だが、別の機会を設けて「独り暮らし教室」「グループホーム教室」「恋愛教室」というように、「講座」というかたちではなくてもいいので皆で話会えたらよいと思った。
- ◎みんなの会議は大事な場・機会とは思いますが、いまいち実感がつかめない。私がしっかりかかわっていないからかもしれないが。現役の講師や職員が一生懸命やってくれているが、どこかお膳立てされていて、支援側が欲しいと思うゴールまで導かれている気がした。本人たちの意見を大切にしたいという意図はわかる

が、1時間程度のワークの時間では、問われてもなかなか出てくるものでもない。もっとじっくり時間をかけて、本人たちが導き出した答えにたどり着ける工夫がほしかった。

- ◎自分たちの意見を学びづくりに反映させるために互いに意見を出し合いまとめる「みんなの会議」。参加者が自分の意見を述べることは若干できたかもしれないが、時間が少なく、十分相手の意見を聞き、メンバー同士でまとめる部分にはスタッフがかかわらないとできないこともあった。さらに愛の手帳2度の人、または表現が苦手な参加者をどのように会議に組み入れるかを考える必要がある。

2年間取り組んできたものを、今後どのように活かすか・何が活かせるか

- ◎参加者がやりたいこと・興味のあることを一緒に探り、活動する。好きなことに対してはいい表情をしている。
- ◎関心のあることを出し合う場の設定。
- ◎国分寺らしさ・くぬぎらしさ・みんならしさをどう地域に発信して、コロナ禍でもできる「くぬぎレインボー」を活用した取り組みやコロナが徐々に落ち着いた後の事業の工夫・展開にとっても期待している。
- ◎3館で「ものづくり」の時間を作り、軽量のくぬぎレインボー2号か、現レインボーの代替品を作り、3月の各館の発表会。報告会で披露する。できれば3館合同発表会の場で。
- ◎カレッジでやり残したこと、継続した取り組みのために、カレッジ卒業生の同窓会をつくってはどうかと思う。また恋ヶ窪教室卒業生の恋ヶ窪アミーゴとドッキングして自主活動グループとして活動してはどうか。
- ◎参加者の得意なものを、その人の指導のもとに他の人にやってみる機会の設定。
- ◎ご家族やグループホームの皆さんの思いなども反映できるような仕組みが考えられるように思う。
- ◎教室で行っているダンス活動がマンネリ化しているという声があったので、チョッキ先生のパントマイムや、操り人形のようなダンス、エア食事など新しくいいと思う。
- ◎昨年の新聞を切り抜きながらつくる新聞。これはもう少し工夫をする必要があると思うが、楽しくできる気がする。
- ◎参加者との話し合いの時間、これも継続してやっていけば、何かが生まれる気がする。テーマを好きな食べ物とか、みんなの见たいテレビ番組、ドラマとか遊びのエッセンスを取り入れたらどうだろうか。
- ◎皆さんが会議などで自分の意見を発表する姿を見て、その内容がどうであれ自分の言葉で何かを伝えることの練習になっていると感じた。教室で工作をしても単に作って終わるだけだったので、これからはより

参加者さんの工夫次第で自由度の高い工作やモノづくりをして、それぞれにどんなところを頑張ったか、見てほしいかを発表する機会のようなものがあったらいいと思った。

◎これからは、個々人のやる気に加えて、さらに年齢や興味、関心事項を丁寧に聞き取りながら、公民館の職員主導からスタッフに任せた事業実施・運営にもう少しシフトチェンジ、バトンタッチしてくれたら、更なる地域活性化へと連動するのではないか。くぬぎ教室の45年の歴史と蓄積を経て、くぬぎカレッジを経験したことで、古くからのくぬぎのメンバーにとっても、新しい仲間である市民の皆さんにとっても、さらなる自立支援や学習支援の可能性のタネがたくさん芽生えてくると思う。

◎地域への発信として、まずは各公民館まつりで、さらに地域のおまつりなど公民館以外の場所でも、自分たちがやってきた造形活動（レインボーを中心とした活動）・表現活動（コロナ禍ダンスなど）をアピールする機会を作る。

◎3館での交流活動に向け、合同発表会を目指し、3館共通の目標を作る。「ものづくり」に加え、表現活動もいいと思うので、歌・ダンスを各教室で行い発表する。また、各公民館での活動や楽しさを伝える「くぬぎ青空ジャーナル」を3館のコミュニケーションツールとして継続し、活動報告だけでなく、自分たちが気になる話題や自慢したい話などを取材し、記事にして、光公民館・もとまち公民館にも使ってもらおう。

◎ラボ(学習)は、2～4度のどのレベルの参加者も一緒にして取り組むことは簡単ではない。特に2度の人で表現の苦手な参加者は楽しく活動し、結果学べたことが大事だと思う。「特別な配慮」は必要で、工夫と手助けをして活動することも必要と思う。

◎来年度は恋ヶ窪教室に2度の人参加、また地域性がなくなり、誰でもどの教室でも選べることとなるのだろうか。段々と恋ヶ窪教室のステップアップ教室としての要素は薄れていくかもしれないが、当面本多・並木では2度の人割合が恋ヶ窪よりは多いと思われる。カレッジでラボ(学習)・表現・造形活動を主にやったが、特に学習は本多・並木では慎重に検討し、無理をしない方がよいと思う。表現・造形活動で十分楽しみながら、楽しんだ結果として学んだこともあったといったことでよいと思う。

連携協議会 会議の記録より

第1回 連携協議会 記録より

日程

令和3年6月 29 日(火)

出席者

委員 10名 職員 7名

(発言者 ◎=委員 ○=公民館)

【令和3年度くぬぎカレッジについて】

○昨年度の内容に加えて、参加者の声を聞く、意見を引き出し反映させる活動にすることに重点をおいている。「みんなの会議」から連携協議会にも参加して発言、発信したり、委員のみなさんと意見交換をする機会をつくる。具体的にどのようにして参加者の意見を引き出していか、委員の皆さんお諮りしながら進めていきたい。

◎自分の気持ちを発言したり、人前で話す経験が乏しいため、意見をもっていい、発言していいと思える機会にしてほしい。自己肯定感が低い人も多いため、発言する前段階としてこのような取り組みは大切である。

育成会では「知る見るプログラム」(自分のことを知る・他のメンバーのことを知る)というものがあり、実践経験がある。

◎スタッフ・支援者にとっても気持ちや意識が変わる機会になると思う。とても大切なこと。この取り組みを楽しみに感じている。

◎我々の接し方を知るためにも、その「知る見るプログラム」の内容も事前に知っておきたい。

◎昨年の実践を踏まえて、それを発展させる形でのカレッジの中身になっていると期待している。昨年度は、具体的には「ラボ」での学び、「テアトロ」「アトリエ」での表現活動、「カフェ」などに取り組んだ。自分たちで話し合い準備して、自分たちでつくり上げていく活動が理想。「みんなの会議」の場がそれに活かせるといい。知る見る、自分の意見を発表する、自己肯定感といった成長発達における課題など、彼らがこれから社会で生きていくために必要な力を身につけるのものとしての「みんなの会議」の位置づけと、自分たちでつくっていく流れの“噛み合わせ”を考えていく必要がある。

◎「コロナ禍」のダンスも含め、創作してきたもの、一つの柱として、みんなでつくり上げたものを発表する機会、それが評価される機会が必要。昨年度はアトリエでつくったレインボー(屋台)を活用して、コーヒーサービスやジャーナルの配布など、街中に出かけていき、くぬぎカレッジや自分たちのことを市民にアピールすることができなかった。今年度活用できるような中身を考えて皆で活かし、実現していくことが大切。

◎毎回設ける「みんなの会議」は、皆で話し合って何かを決めたり、皆の前で自分の意見を発表する体験をして成長や発達を促す活動として位置づけることができる。学びの場としての「ラボ」で、昨年は“恋バナ”として、性教育にもつながる必要な学びとなった。発展形としてグループホームについても含めて、生活上必要とされている課題を取り上げていくことも重要。今回のプログラムにはそれが盛り込まれていると解釈している。自分たちがそれをどう支えていくのかということだと思う。

連携協議会の役割として、委員自身が学んだり共通理解を持つことも大事だが、連携協議会として話し合って提言ができるなど、連携協議会として一定の力を及ぼすことができるようになればいい。

◎文科省からの委託でなくなったとしても、これはこれからのくぬぎ教室の発展に必要な取り組みであると考えている。委託期間が終わった後も、連携協議会の役割が継続されることを願う。

【コロナ禍におけるカレッジの進め方、工夫について】

○今年度はコロナ対策、代替案はどうするかについて、皆さんの経験などからもご意見をいただきたい。

初回からオンラインは避けて書面開催としたが、今後も対面を控える事態となった場合、どのように学びの機会を保障していくか。このような状況の中で、障害者とかかわり、社会参画においてどのような工夫をしているか、ご紹介いただきたい。

◎恋ヶ窪くぬぎ教室では、2～3人だけ公民館から、ネット環境がある人は自宅から Zoom で話し合いができた経験はある。皆で一緒に話し合っているという感覚、空間を持つことができた。今後は中止にせず、オンラインにも、どの程度可能か挑戦してみたい。

- 当事者はオンラインへのアクセス環境はどうか。ハードルが高いものなのか、身近に使えるようになっているのか。
- ◎特別支援学校の高等部になると、スマートフォンを持っている生徒が多い。YouTube、LINE は使っている。Zoom で面接をおこなう企業が増えており、面接の練習・指導で Zoom を活用することもある。小中学部は一人一端末という方向になってきており、来年度には校内に無線 LAN が入る予定。通信環境は各家庭によって異なる。現在は保護者への連絡もオンライン中心になっているため、家庭のネット環境は充実していく方向と考えられる。画面越しの“読み取り”が難しい重度の方にはサポートが必要なのではないかと思うが、障害のある方にも必要なツールになってくると思っている。機器の操作について一定のスキルを身につける学習機会があるとよいのではないか。
- ◎中高生は今後も IT 機器を使う機会が増えていくと思われるが、大人はどうか。
- ◎障害の程度によって大きく異なる。ほとんど使わない・使えない人も一定数いる。重度の方で、機器を使っている人は少ない。
- ◎スマホを持っても通話アプリは使えない人もいる。始める際には、丁寧なレクチャーが必要。
- オンライン以外の開催の仕方は何かあるか。
- ◎視覚的な支援は有効。書面は読み取ることが難しい人もいる。YouTube チャンネルの活用で一方向だとしても視覚的に情報を伝えることができるだろう。
- ◎市地域共生推進課では福祉センターを所管している。グループが活動するにあたって、各業界のガイドラインを参考にしている。コロナ禍であっても必ずしも対面は全面禁止なのではない。対策を十分におこなった上で対面でできる活動を考えていくことも必要。
- ◎画面越しに見たときに、直接会うのと同じようにコミュニケーションを取ることは難しいと感じる。直接会っての活動の重要性はある。宣言期間中も通所施設は開いていた。公民館が閉まっているときは仕方ないが、できるだけ対面でやれることを考えたい。
- Zoom での会議は、何人もの音声を同時に拾えないという性質から、相手の話を最後まで聞くというコミュニケーションの一つの練習になっている側面もあると感じている。
- ◎参加者が一堂に集まることは物理的に避けたほうがいいだろう。昨年のように2グループが同時進行でやる というのも選択肢としてあるのではないだろうか。話し合い活動も含めて分かれてやるというのはどうか。
- 会場は広い部屋を確保した。2年目ということでカレッジ全体の一体感がほしいという意見もあり、1コースのみの計画を立てた。
- ◎一体感と感染対策を両立できるような方法があればいいと思う。ちなみに大学の授業では、対面とオンラインを併用している。対面とオンラインを半々に分けて、隔週で対面になるようになど、工夫をしている。その方法である程度のチームワークができ一体感は生まれていると感じている。

第2回 連携協議会 記録より

日程

令和3年8月 27 日(金)

出席者

委員 6名 職員 8名

(発言者 ◎=委員 ○=公民館)

【7月・8月の活動に参加した委員より感想】

- ◎話し合いは、始まるまでは心配だったが、参加者がスタッフと一緒に「話したい」という意欲も湧いて話すことができた。みんなの話をよく聞くという姿勢はこれまで不足していた部分だったと認識することもできた。
- ◎恋ヶ窪くぬぎ教室では話し合って決める場面が今までもあったが、今回は議長選出から始め、会議の進め方自体を丁寧に話し合えた。みんなで決める基本姿勢が芽生えたと思う。レインボーをどういう形で活かしていくかは、身近なテーマで自分の意見・希望を出し合い、聞きあうことができた。話し合いの場面では、普段は不規則に発言する話し合いだと声の大きい人ばかりになりがちだが、挙手して指名されて制限時間内に話すというのは、全員が話す機会を保障でき、いい取り組みだった。8月の会議では、「決める」という体験をした。多数決ではあるが、話し合いを経て意見を変える時間もあり、優先順位として決定させるという流れはよかった。

【軽度と重度の方がともに学ぶための工夫について】

- ◎恋ヶ窪公民館にステップアップ教室ができたときに本多公民館から軽度の方が移り、残った者でどのように工夫すべきか悩んだこともあった。少しでも本人が楽しめることがあればと思う。全体の程度を下げるのではなく、それぞれが楽しく感じられる場面があればよい。
- ◎それぞれが参加する場面をつくるのは大切。
- ◎自分の“トリセツ”(取扱説明書)をつくるワークがあったが、そもそもトリセツとは何か、何のためにあるか説明したほうがよかった。これはひとつの例だが、私たちの日常会話でわかっていることでも、説明や噛み砕くことが必要な場合もある。この言葉で伝わっているかなと常に意識する必要がある。文字があまり読めない場合、イラストなどを活用するなど、重度の方がいることを意識するべき。
- ◎並木くぬぎ教室で陶芸指導をしたことがある。自分が説明しても伝わらなかったことがスタッフがいったら伝わったこともある。
- ◎話し合い自体未経験だった。1回目は来ても全然参加できない人もいた。どうしたらいいかと悩んだが、パリンピックを見て、障害の程度にあわせたツールもいいのではと思った。説明のプリントやワークシートも数種類作成するもありえる。軽度の方は話し合いに積極的で「ちゃんと扱われている」感覚を持っていた。凛々しかった。もうちょっとサポートがあればもっと参加できるようになるだろう。重度の方が取り残されない「配慮」を今年度のカレッジで見つけていくのもあり。どうしたってできないこともあるから、方法を考え、焦らずみんなで考えていくこと。話し合いはつまらないものではない。楽しくやれるやり方があるだろう。カレッジはスタッフ数が充実している。スタッフ側に余裕があると周りをよく見ることもでき、考えさせられた。
- ◎参加しやすい工夫を既に行っていると思うが、絵や写真でわかりやすくとか、書かれている内容や選択肢を少し絞るとか、重度と軽度がともに学ぶ場はとても重要。重度だからといって自分をよく理解している人がマンツーマンでずっとついていてくれるわけではない。それが幸せではない。地域で生きていくにはいろんな人がいる。本人の主体性など、力を育むことができる。

【障害者とともに学び活動する市民を増やしていくためには】

- スタッフも多く参加いただいて充実したカレッジになっているが、国分寺市立公民館3館で実施しているくぬぎ教室では十分でないところもある。さまざまな市民にスタッフに入ってもらい、今後さらなる充実を図りたい。スタッフを増やしていくこと方法などについてアイデア・意見をいただきたい。
- ◎障害のある方たちにかかわろうとしたきっかけを知りたい。
- ◎阪神淡路大震災の後、友達と作業所で陶芸を毎週一緒にした。はじめは、障害のある方たちの行動の意義がよくわからなかったが、一緒にいる中で、良し悪しではなく特性と捉えられるようになり、「近所のおばちゃん

ん」としてごく普通に会話ができるようになった。みんなが障害者と普通につきあうことができればいいのにも思えた。かかわることがなかっただろう人にも接点をもたてほしい。話を聞くことで彼らのストレス発散になるなど、自分にも役に立てることがあるとわかった。何かきっかけが必要。そのきっかけづくりとして、公民館利用グループに来てもらっている。「一緒に何かしよう」ではなく「教えてほしい」と声をかけると乗ってきてくれやすい。当事者と何かする機会があることが一番と思う。

◎音楽関係の公民館活動をしていた時に職員に声をかけられてかかわった。時間の流れがゆるやかと感じた。それが15年くらい前。当時、娘や息子も連れて行った。息子はその後もスタッフとして続け、障害者センター、グループホームで働いている。普段から見学してもらえるようにし、さらにグループに参加していただくなど、かかわる機会を設け、いろんな形で参加してもらえることが大事。

◎かつて学校が週5日になったとき、土曜日の活動が増えたが、実際に支えているのは地域の皆さん。養成講座をやって、午後には実際に地域活動に参加体験することをセットで全国に広げていったことがある。地域活動を支えることと養成講座は両輪。行政的な支援として、講座の中身に実習を含めること、実際に参加するのがセットのプログラムを考えることが必要。話を聞いて終わるのではなく、レクチャーを受けた人たちが実際に教室に参加することが必要。講座参加者をスタッフとして吸収していくルートが必要。30年以上してきた“貸切列車ひまわり号”を走らせる活動では、一緒に楽しむ経験をして、それを通して理解が進んだ。

◎日頃かかわりのない人に広く来てほしいが、いきなり募集しても、飛び込むのはハードルが高い。すでにあるグループや場合によっては団体・企業とコラボするとか、たとえばダンスのサークルと一緒に踊るとか。若い人にかかわってもらうには、大学のゼミとか、学生とコラボできるようなことも必要ではないか。学生は代替わりしていくが、続けたい人は社会人になってもかかわり続けられる。裾野を広げることになる。コラボの幅を広げていくことが必要。

◎勉強になったことが多い。公民館利用グループが教室に入っていくこと、反対にグループの活動に来てもらうこと、どうやっていったらいいか考える必要がある。具体的に何をしてほしいか、明確であれば入りやすいのではないかな。

◎活動に参加した後、スタッフが嫌だったことや違和感、ミスマッチなどもスタッフ同士互いにしっかり話し合っていく場があると、辞めてしまうことも減るのではないだろうか。

第3回 連携協議会 記録より

日程	令和3年 10 月 11 日(月)	出席者	委員 9名 くぬぎカレッジ参加者 1名 職員 5名
----	-------------------	-----	---------------------------

(発言者 ◎=委員 ○=公民館)

【くぬぎカレッジ参加者からの報告】

参加者Kさん…参加者感想・意見など書面代読

【参加者の多様な意見を活動へ還元させていくためには】

<Kさんからの発表を受けて>

◎仕事の場と暮らしの場の往復だけでなく「第3の場」が必要。現在国分寺市公民館3館で実施しているくぬぎ教室が月1回あることは価値がある。しかし、ボーリングやダンス、お出かけなどやりたいことは人それぞれであり、くぬぎ教室だけではすべてのニーズに応えられない。余暇活動の充実のため、趣味、特技などができる場所をくぬぎ教室以外につくる必要がある。現在、市では余暇活動の活動支援はないため、今後の施策として行政的に支援する取り組みが必要と考える。

◎知的障害者の太鼓の団体があると思うが、そこにくぬぎ教室の関係のようなものはあるのか。

○希望があれば、例えばくぬぎカレッジをグループ化するという事も可能。

◎並木くぬぎ教室で、陶芸でマグカップをつくった。参加者の母より「月1回陶芸をやらせたい」という声があり、当事者2人、母2人、支援スタッフ1人で自主グループ化した。「何でもやってみたい」という声も聞かれる。現在活動している既存のグループに障害者が入れないということはないと思うので、やりたい内容のグループに気軽に入ることができればと思う。

◎障害のある方たちにも情報提供が重要と考える。

◎「余暇活動支援事業」に対し、都が半分程度負担する制度があり、国分寺市もこの補助金を受け、くぬぎ教室の予算の一部に充てられている。しかしそれだけでなく、地域でより豊かに生活するため、条件を満たした自主グループ活動にも予算が配分されるようにしてほしい。

◎余暇活動支援として、市障害福祉課では国分寺障害者団体連絡協議会のバスハイクや運動会を実施している。

余暇活動支援を今後どうしていくか、予算の都合もある。市でないとできないこと、市が協力しないとできないことにどういうものがあるのかを教えてほしい。

○来年度も「余暇活動支援事業」の予算は例年通り計上する予定で、現在調整中。

◎Kさんへの質問:仕事はどの程度しているのか。仕事から帰ってきてからはどのような生活をしているか。

→仕事は月曜日から金曜日までしている。仕事で疲れてしまうため、帰宅後はテレビを見て、お風呂、食事、歯磨きをするぐらい。土日であれば余暇活動はできると思う。

◎自分がかかわっているグループホームでは、平日の夜に体育館を借りたり、土曜の夜にはコロナ禍においては Zoom を使いながらまつりバンド(当事者の自主グループ)の練習をおこなうなど、普段の生活にプラスアルファの充実感、達成感を感じられる取り組みをこれまでやってきている。これに金銭的な支援、手助けが欲しい。今は“持ち出し”。市は「検討します」で終わってしまうので、この連携協議会でまとめて行政に要求していきたいと思っている。

◎予算編成にかかわることは、この場だけでは決定できない。

◎“余暇活動”についての教育が、特別支援学校として不足していることを実感した。職場以外の人との関係、くぬぎカレッジなどで決まったメンバーが集まるメリットを感じる。そこに来ることが、次に仕事に行く糧になる。月1回の学びの重視、それを核にしながら生活に潤いが生まれてくる。オンラインなどのネット環境でのつながりは、学校教育でも力を入れているところである。

○社会参加をどう広げていかれるか。その可能性についてご意見があればお願いしたい。

◎支援者の層を厚くしていくことが大切と考える。昨日くぬぎカレッジを見学したが、スタッフをどう集めているの

か。学生もいたようだが、くぬぎカレッジはすでにくぬぎ教室のスタッフをしている人がかかわっているのか。普段障害者にかかわっていない人もスタッフに入っているのか。

○今年度(現在)は、社会教育実習生2人と地域貢献のボランティア学生4人が参加。学生は障害者とのかかわりは少ないか、ほとんどないと思われる。他は、各館のくぬぎ教室のスタッフ。くぬぎカレッジ実施のこの2年間は、カレッジの取り組みの中で「支援者研修」をおこなっており、それまでここ数年実施していた「ボランティア養成講座」はお休みをしているが、来年度から実施を再開する予定。過去にそこからボランティアスタッフに登録され現在も活躍してくださっている人は複数いる。

◎ボランティア養成講座で、くぬぎ教室だけでなく他の活動にも参加してもらい仕組みができればよいと思う。

◎ボランティアスタッフがいて初めて教室が成り立つ。ボランティアスタッフ募集は不可欠。辞めてしまった場合など、先を見越して行動すべき。ボランティア養成講座を継続してほしい。国分寺市だけの問題ではないが、このようなことを市で予算を組んで実施しているのは、近隣では国分寺市ぐらいである。単にレクチャーのみでなく、活動に実際に参加する経験も必要。そこから人間関係が生まれ、かかわるようになっていく。このような講座の実施を切に願う。

◎これまでのボランティア養成講座で、くぬぎ教室を実際に見に来てもらっているとは思いますが、学生などが継続的に参加できる仕組みがあればよいと思う。

○できるだけボランティア養成講座に参加してもらうことが大切だと考えている。“底辺”を広げていくことが大切。自主的に参加してもらっているので、途中で来なくなってしまった人を“追跡”することはできない。

◎担当している学生より「参加者からのボディタッチが多くて困る」という声があった。昨年度、座間キャラバン隊の回の支援者研修に参加し『「その行動はやめてほしい」旨を短い言葉で伝えろ」といって』『その“人”は否定しない』と聞き、学生にもそう伝えた。他市の公民館講座で、ざっくばらんに話し、交流する講座があり、好んで参加している学生もいる。継続性がある様子。交通費程度の支給があるとのこと。

【カレッジの実践研究について、くぬぎ教室をはじめとする障害者の学びの場にどのように還元し、活かしていくのか】

◎将来のくぬぎ教室について、先日公民館運営審議会を傍聴したが、くぬぎ教室の話を提言できる組織にはなっておらず、公民館5館の代表が集まっている中ではそれを求められても困るだろうと感じた。ではどこで考えていくのか、と考えた時に、いろんな分野の代表が集まっているこの連携協議会の場がふさわしいと思った。今後のことについての提言をおこなうために、来年度以降もこの連携協議会を継続することを望む。この場で来年度一年かけて将来的なくぬぎ教室の展望を示したい。くぬぎカレッジで取り組みんだ「3館のくぬぎ教室」での活かし方も考える必要がある。やりっぱなしでは意味がない。「くぬぎ教室のあり方の将来的なこと」「くぬぎカレッジを今後どう活かすか」の方向付けをしたい。

◎まず、話し合うべきこととして、障害者の学びの場のもっと全般的なことなのか、「くぬぎ教室」というその中の一つなのか、その両方なのか、ここを考えたい。

第4回 連携協議会 記録より

日程	令和4年1月15日(土)	出席者	委員 7名 くぬぎカレッジ参加者 3名 職員 6名
----	--------------	-----	---------------------------

(発言者 ◎=委員 ○=公民館)

【事業視察感想】

- ◎皆さんの表情がとても豊か。表現もそれぞれ。理解する時間・褒める時間を一緒に過ごし、たくさん学びがあった。私自身が自分の殻に入っていたことを知った。おかげで別事業での知的障害の方とのかかわり方が変わり、自然と接することができた。
- ◎パントマイムなど、とても上手で個性的。できる範囲でのびのびしていたのが印象的だった。それぞれ自分の意見が話せるのはとてもよかった。
- ◎自分の未来を知るワークで、いつまでも学びたい・知りたい、新しい知識も得たいがあることを知った。自分の意見がいえるようになったのは、カレッジの成果。グループの仲間意識も増えた。グループホームや一人暮らしなど、専門家の話も必要だが、仲間からの話はとても参考になっているようだった。
- ◎スタッフとしても参加している。最初は話し合いができるの?とっていて、準備万端にしないでと気負いがあったが、そこまでする必要がなかった。こちらの聞く態度さえあれば、話す気満々でいてくれる。堂々と話してくれる。遊ぶだけでなくても楽しい。新しい知識を得るのも楽しいと知った。

【くぬぎジャーナルの発行について(くぬぎカレッジ参加者からの報告)】

○さん:文字と絵をかきました。楽しかったです。

Kさん:楽しかったです。

Fさん:車の絵をかいて、上手にできました。ありがとうございます。

【成果報告書の作成について】

- 昨年度の内容と同様でよいかどうか。個々のアップの写真の掲載は難しい。
- ◎来年度への課題と解決策はどうか?
- ◎個人の感想・意見よりも、協議会として話された内容・意見をまとめたものを掲載するのはどうか。
- ◎プラン・位置づけを明確にし、2年間で見えた課題と改善点に取り組んだ結果がどうだったか。
- ◎前年度コーディネーター・指導者の小林先生のコメントについてどう解決したか。
- ◎企画提案書に記載した「成果等の普及」「事業実施により得られることが見込まれる成果・効果」についてその実績。
- ◎カレッジスタッフ会議の記録。
- 報告書のたたきは、次回2月14日の協議会までにまとめて確認いただける状態にする。

【参加者への質問】

- ◎休憩などの時間ではみんなとどんな話をしますか?
 - きょうの予定のこととか話します。みんないい人で楽しいです。
- ◎いろんなことをしてきましたが、どういうことが楽しかったですか?
 - ジャーナルづくり。文字や絵を描くことが楽しいです。
 - ウォーキングや散歩が楽しいです。
 - 絵や文字、名前を書くのが楽しいです。
- ◎お仕事とか通っている以外にどう過ごしていますか?
 - 図書館・プール・公園に行っています。スクワットやマラソンをしています。
 - お稽古に行ったり、テレビを見たりしています。掃除したり、洗濯したり、自転車で散歩も行きます。
- ◎友達は増えましたか?
 - カレッジに参加して友達が増えました。

◎みんなの会議で数回議長をしていたが、どうでしたか？

—しっかりした気持ちになりました。ぎっしり、きっちりした気持ち。またしてみたいです。

【連携協議会委員感想】

◎話し合いの時間が意外と面白いと気がついたようだった。しゃべるのが苦手な参加者は退屈しないか、内容がわからないのではないかとこのころは解決に至らなかったが、話し合いに参加できるようにスタッフが働きかけて案外とうまくいった気がする。支援する人が増えれば何でもできる。度数別ではなく、うまく交ざり合った中で、まとまってよかった。

◎教える人と教わる人という上下関係の中ではなく、一緒に学ぶことが全体で実現できた。毎回違ったことに取り組み、楽しかったのではないだろうか。スタッフと参加者の関係性を今後活かしていきたい。「楽しかった」という感想は、ひとつの成果となる。2年間を通しての反省は、今年度は恋ヶ窪くぬぎ教室と午前午後の同日開催でバタバタしたところ。気ぜわしかった。みんながよかったと思ってくれたことが成果。同日に2つの事業を実施することは難しかった。

◎今まで障害者と接点がなかった。障害者に関するベースそのものがなかった。2年間の活動の中で“突破したもの”があった。

◎メールと電話でつながることはなくなったのか。カレッジとしては終わりで、教室として活かす時、話し合いを取り入れてとなると大変なのではないか。どこを取り出すのかよく考えないと、教室では取り組めない。

○そのままではダメなので、工夫していく。学びから見る成果・状況に合うものを取り入れていく。

◎障害度数の区別がなかった。重度の方もどこまで理解してくれているかはわからないが、会場の外には出ずにいられるということは楽しい。みんなできていることがよい。

◎一般市民がかかわるきっかけになった。身近になった。

◎全体を通してよさを感じたのは、既存のくぬぎ教室とカレッジの在り方の違い。学びの場やみんなの会議でもグループ討議で自分に問われることが多くなった。それぞれが自分で自分のことを考えて色々発表することがよかった。行事だけでなく、自分自身をみつめ、向き合って答えを出す営みの時間が持てた。将来について考えたことのなかった人が考えるきっかけとする場面設定があり、それぞれ主体的にかかわれた。

◎教育委員会・福祉部局と連携してほしい。

◎学びの講座の、生き方そのものを学ぶ場としての位置づけ、表現講座の一つのものをつくり上げて表現することの位置づけはよい。あとは、発表の場が重要視されていないように思う。年に数回しっかりと確立することが大事。

○スタッフの方々の助言で成り立っている事業。今後、ボランティア養成講座などで新規スタッフも増やしていきたい。

第5回 連携協議会 記録より

日程

令和4年2月14日(月)

出席者

委員 9名 職員 8名

(発言者 ◎=委員 ○=公民館)

【成果報告書の作成について(内容確認・その他)】

- ◎「事業を通して見えてきたもの」には、職員からの内容は分析結果が載るのか？各職員の感想なのか。かなり重要な部分だと思う。連携協議会・スタッフからの意見もうまき取り込んでほしい。
- 今回は職員としてまとめて一つの分析結果を書かせていただく。
- ◎「参加者の声」は、少ししか掲載されていないが、今後どのような感じになるのか？
- 作成途中。もう少しボリュームは増える。
- ◎「連携協議会委員の声」は意見シートそのままが掲載されるのか？
- 今回この場で出されたご意見・議論を文章化して反映。そのほかを事前配付したご意見シートで補う。
- ◎支援者養成講座として実施した「障害を理解するための講座」の報告は載せないのか。
- 参加者アンケートは資料として掲載する。概要は報告スライドに含む。

《今年度を振り返って》

- ◎残念だったことは、昨年度と今年度続けてアトリエ活動として移動式屋台くぬぎレインボーをつくってきたが、それを使っの販売活動やジャーナルを配って知ってもらうなどの最初の目的がどこかにいってしまって、成果報告会で見てもらうことに留まった。2年間やったことが尻切れトンボに終わった感がある。できれば次年度のくぬぎ教室の年間計画に引き継いで盛り込んでほしい。
- ◎社会教育実習の学生が、卒論テーマにカレッジの参与観察をまとめた。カレッジの活動に参加者が見出している意義について、分析した。参加者やスタッフにもアンケートの協力をしてもらった。
「①非日常を感じる喜び」と「②仲間と活動する喜び」の2点。①については、外へ出ること、余暇活動の楽しみ、ということ。コロナ禍で、くぬぎ教室ではバスハイクなどのイベントやレクリエーション活動ができなかったことは残念という意見があったが、支援者の工夫によってコロナ禍においても実行できたことは意味があった。②については、参加者の日頃の仕事は個人作業が主たる業務だったり、ひとりで黙々とする作業が多いため、交流や自己表現の場を求めているのだろうということ。職場・家庭以外の自己表現、自己の解放としての意味があり、支援者と交流しあうことも大きな意義とを感じる。
このような内容の卒論を書いた学生がいることを紹介させていただいた。
- ◎スタッフとしても2年間かかわったため、スタッフとしての感想になるが、いろいろな講師を呼んでの活動は、スタッフの自分たちも学びや刺激になった。2年目の今年は話し合いをしてみようと「みんなの会議」に取り組んだ。やる前は不安が大きかったが、やってみたら違った。これまでははたして彼らから意見を聞こうというスタンスになっていたか、我々がいい話をしよう、リードしようとなっていなかったか。トリセツの取り組みでは、あまり自分のことを話さない参加者もしっかり書いていて、これをつくることで彼らの話をしっかり聞いてあげられたように思う。いままで聞けていなかったが、こんなにしゃべりたいこと、考えていることがあったということに気づくことができた。話し合いグループは参加者2～3人に対し、スタッフと学生がそれ以上の人数だったが、決して参加者が入っていなかったわけではなく、皆で話し合ったという感覚があり、フラットな関係でみんなで話げできたと思う。残念なことは、いつも時間に追われていたこと。きょうやったことをまとめなければいけない、発表しなければならない、という気持ちとリミットがあってバタバタしてしまった。もっと話し合いに割きたかったスタッフも多かっただろう。あれほど盛り上がると思っていなかった。話し合いの1時間はしんどいだろうと思っていたが、やってみたら足りなかった。もっと話したいのにすぐにまとめの時間が来てしまうというのが毎回のストレスだっただろう。2年間の経験は、参加者はもちろんだが、スタッフ側の経験としての意味が強かったのかもしれない。終わってみて、不満や「もっとこうしかった」のような気持ちが出ることは、次につながることであり、よいことだと思う。

- ◎スタッフが多かったことでうまくいった点は多い。相互の関係性が大切。
- ◎公民館での交流の場づくり、地域の中での発展性を捉えることができたのではないかな。
- ◎カレッジのスタッフに学生がかかわったというのは、授業の一環なのか。
- ◎いくつかの大学から受け入れていたと思うが、有志の学生が単発で参加した例と社会教育実習として入った例とがある。
- ◎東京学芸大学以外の学生も地域貢献をする授業としての参加、実習としての参加があった。
- ◎本多くぬぎ教室でも、学生が来た時は雰囲気も変わり楽しくなる。しかし、学生は次年度に続かないことがほとんど。学生の参加の継続という課題もある。
- ◎学生スタッフとの恒常的な関係づくりは課題。コロナ禍で学生ボランティアサークルなど活動できていない例も多い。
- ◎学生に来てもらうには、例えば学芸大であれば柴田会長を通して呼びかけることは可能なのかな。
- ◎学生支援課の事務を通してボランティアを募集することもできる。特定のサークルに情報を伝え、かかわりを深めていくこともできるかと思う。学生自身が参加して楽しいと思えば継続した参加になる。国分寺市のくぬぎ教室は上の世代の参加者が多いが、学生は年代の近い市民とのかかわりを求めているケースが多い。子どもの学習支援事業などは恒常的に参加がある。20代30代の参加者が少ないことの原因はわかっているのか。
- ◎若い人は行先の選択肢が多いからかもしれない。市報での募集には18歳以上としている。
- ◎特別支援学校の高校卒業者に情報がいくようにしているか。
- ◎稗田委員にも相談し、学校で周知できるよう考えている。
- ◎くぬぎ教室は年齢層が高いというイメージがあり参加しようと思わない若者（障害者）もいる。スタッフから勧められて来てみたら楽しかったという感想もあった。
- ◎活動を振り返る中では、来年度以降につながるような総括としてはいい。今年の活動は意味があったと確認する必要がある。カレッジとしての取り組みに「ラボ」を組み込み、自分自身の生き方と直接つながるような課題でみんなと学び合った。その手法としてグループ討議を基本として、自分自身と向き合い小さな紙に自分の思いを書いていく、その時間が貴重だった。普段のくぬぎ教室活動ではつくれなかった時間で、ぜひ来年度のくぬぎ教室に活かしてほしい。オリジナルダンス「コロナっ禍」の練習も続けてきたが、恋ヶ窪公民館祭で会場の子どもたちも一緒に踊りながら発表できたこと、ひとつのものをつくり上げて発表して拍手を浴びることは非常にいい経験となった。取り組むことには発表の場の設定まで含めて全体計画を立てるべき。発表という目標をもって年間通して取り組んでいく必要がある。ジャーナルについては、つくるだけでなく配布して自分たちのことを発信していく、自分たちの中だけでおさめるのではなく、社会に発信すること、レインボーを活用して、ジャーナルを配って、社会に参加していく。社会との接点をつくっていくことが大切。
- ◎くぬぎ教室での作品や活動成果が並木公民館で展示されるが、いい作品がたくさんある。展示して終わりだともったいない。どこか他の場所や自治会掲示板への展示など、外にアピールしたらどうか。館内だけではもったいない。どんどん外に出してほしい。
- ◎外に出していく際には、公民館と他部署との連携が必要になる。市福祉センターでは地域の交流として指定管理者と十小での連携で作品展示をすることがある。連携は可能かと思われる。
- ◎来年度以降は、これまでのような予算はないはずなので、くぬぎ教室活動への反映には工夫が必要。
- ◎予算成立前だが、来年度、カレッジの要素を取り入れ実施するための予算計上はしている。これまでの取り組みを活かしたいと考えている。
- ◎通年は無理でも「夏期講習」のように集中して数日間、年2回くらい3館合同でできたら楽しいのではないかな。例えばダンス&パントマイムを3日間連続や、講師を呼んでラボなど。
- ◎職員だけで考えるのではなく、みなさんの意見を活かしながら考えていきたい。
- ◎難しいことは重々承知しているが、多少の自己負担で事業をやることは考える余地はないのか。参加費を負担したり、寄付を募るなど。いいものであればお金をかけてでも参加したいと思ってもらえるのではないかな。

- ◎寄付を募ること、クラウドファンディングなども今はある。障害者が描いた絵をお菓子商品のラベルなどにしたり、作品を集めて商品化するということで資金集めなど、実際にNPOではある。
- ◎NPOとの連携で、立川市では作品展示会のようなことを市主催でやっているらしい。
- ◎カレッジを見学して印象的だったのは、小グループに分かれて意見を出し合う時間。受け身の学びではなく、みんなで話し、聞き、学ぶことを繰り返したことで、今年のアンケートよりも本人たちの意見がしっかりと書かれている。当事者が自分の考えを外に出すことは難しいため、「出していいんだ」と思えたことはとても重要だった。今後も外に発信していく機会をつくってほしい。障害を理解するための講座は、シリーズがとてもよかった。ただ参加者が少なく非常にもったいなかった。障害者週間の取り組みでも毎年内容に悩んでいる。既存の福祉のグループと連携しておこなえたら市全体としていいものになるだろう。様々な立場の人が、障害のある人の生涯学習を考えるこの連携協議会は、当事者の親としてもとてもありがたい。このようなものは今後もぜひ続けてほしいという思いがある。
- ◎参加者の固定化、少ないことは広報の問題なのか。どのように関心を持つ人を増やすか。
- ◎福祉の団体との連携についてだが、障害者施設のお仕事ネットワークと連携し、移動式屋台くぬぎレインボーで商品売って、売上げ金を活用するということではできないか。連携を広くすることで参加者層も含めた可能性が広がっていくと思う。
- ◎行政として取り組む事業に参加者をどう募るか悩むところ。ネット配信と会場参加のハイブリッドでの開催は最近多い。個人情報など問題ない内容なら、アーカイブとして残せば、当日参加できなくても情報に触れる機会をつくれるのではないかな。より多くの人に届くことにつながると思う。
- ◎「障害を理解するための講座」はこのくぬぎカレッジの中身の一つとして計画され、2年間にわたり実施されたが、これまで国分寺市公民館で長く実施してきた「ボランティア養成講座」がその間開催されていない。この2年間の「障害を理解するための講座」はそれに代わるものとのことだが、そこに参加した顔ぶれは新たにくぬぎ教室に参加するという人は見られず、新規開拓にはつながらなかった。新たに、若い人も含めてボランティアスタッフとしてかかわろうという人を取り込む機会を一つの柱として推進してほしい。

【令和3年度くぬぎカレッジの総括について】

- ◎残念だったことは、午前中が恋ヶ窪くぬぎ教室で、昼にお弁当を慌てて食べて午後カレッジというスケジュールで、精神的にも物理的にも慌ただしい活動であったということ。教室とカレッジを違う週にするなど日程調整が必要だったと振り返って思う。価値ある活動を2年間やってきたから、それを何らかの形で並木公民館も本多公民館も活かしてプログラムに入れてほしい。ラボは年1、2回やるとか、発表の場はどうするかなど、計画を立てる段階でみんなで協議して決めていくことが大事。
- ◎2年間いい内容がたくさんあった。可能な限り教室で活かしてほしい。人的な部分と金銭面が課題かと思う。学生だけでなく、新規の人をいかに取り込んでいくか。福祉関係団体はもちろん、公民館活動グループを巻き込んでいくことも考えられる。文科省からの委託金がなくなる分、販売や自己負担などの資金集めについても考えたらいいいのではないかな。
- ◎慌ただしかったというのは同感。もっとゆとりをもって“優雅に”やりたかった。ジャーナルについては、1年目は写真担当や取材担当がいたものの定着しなかったように感じたが、2年目は同様の時間がとれなかったことも残念に思う。くぬぎ教室でもこれは取り組めるのではないかな。カレッジ全体としてはとても有意義な時間だった。
- ◎「障害を理解するための講座」では新たな発見や気づきもあり、よい内容だった。一般の人が参加していける工夫があるとっとよくなるだろう。
- ◎今年度1年間の参加で事業内容を把握するのに精一杯だったが、普段の活動よりも踏み込んだ深いところをやっているという印象。話し合いや自己表現など普段できないことができ、いつもは見えないところが見えてきた。今回の学びを今後どう活用するかを考え、くぬぎ教室に持ち帰ってほしい。いろいろなグループをつくって少しずつでも活動を続けていくなどができればよいと思う。

- ◎くぬぎ教室についてわからないところからスタートしたが、今年度は自主的に捉えられるようになった。カレッジでの経験をくぬぎ教室に活かしてほしい。
- ◎今年度は連携協議会にカレッジ参加者の参加もあり、立場を超えて話し合えてよかった。スタッフ、予算、時間などひとつひとつクリアして次に活かしてほしい。
- ◎コロナ禍により、当事者同士のつながりが薄れてきている。イベントもなくなり、ヘルパーさんも入れないような中で、いろいろな点に神経を使いながらも、このような場を設け、つながりを続けられたことはとても大きかった。コロナ禍でなければもっと大きな成果があったかもしれないが、コロナだからこそ得られた成果もあるだろう。若い当事者の参加については、若い人たちは参加できる活動が多いわけではなく、日々の生活や仕事などが安定しない、ライフステージが変わっていく時期は余暇まで考えられない。安定してきた頃に参加してみようというゆとりができるのではないかと思う。ただ、若いうちからこのような活動にかかわってほしい。学校などとの連携が必要である。障害者への理解とかかわる市民をいかにして増やしていくか。地域で共生していくこと・学びの場を公民館でつくっていくこと・進めていくことのいちばんは“人”である。
- ◎カレッジが参加者はもちろん、多くのスタッフ、多くの職員がかかわり一緒につくっていったこと、しっかり振り返って考えていたことに意味がある。今回の連携協議会も含め、挙げられた意見をいかに活かしていくかが大切である。自分自身はジャーナルの活動に関心がある。当事者が取材して発信するのも大事だが、日ごろ発信する場のない、自身のことや社会への意見なども発信していくツールは大切と考える。

連携協議会 委員の声

くぬぎカレッジの活動を振り返って

◎昨年度の取り組みから見えてきた課題に基づき、講師からの話を聞くだけでなく、小グループに分かれて話し合いをしたり、本人たちからの発表があったり、様々な工夫が見られた。自分の意見をいえなくても、他人の話をよく聞いている様子が印象的だった。今までくぬぎ教室に参加していなかった人の参加もあったようでよかった。

◎活動で印象的だったのは、学びの場や「みんなの会議」で見られた小グループに分かれて意見を出し合う時間。受け身の学びではなく、みんなで話し、聞き、学ぶことを繰り返したことで、終了後のアンケートには本人たちの意見がちゃんと書かれていた。障害当事者が自分の考えを外に出すことは難しいため、「出しているんだ」と思えたことはとても重要だった。

◎午前中くぬぎ教室で、午後くぬぎカレッジという時間的に厳しい条件下で慌ただしい印象は拭えなかった。また活動の中で作成した「くぬぎレインボー」を活用した活動ができず、当初の目的が果たされなかったのは残念だった。学びの場の「私のトリセツ（取り扱い説明書）」や「私のミライ、みんなのミライ」で自分自身の生き方と直接つながるような課題で、自分自身と向き合い、グループで話し合い、自分の意見を発表できたことは貴重な体験となったと思う。恋ヶ窪公民館まつりでダンスの「コロナ禍」を子どもたちと一緒に踊りながら発表できたのがよかった。ジャーナルについては、作るだけでなく配布して自分たちのことを発信していくことが大事だ。レインボーを活用して、ジャーナルを配って、社会との接点を作っていければよい。しかし全体としては、実践が中途半端に終わってしまった感があるので、できればくぬぎ教室の方に内容を引き継いで盛り込んで欲しい。

◎昨年より内容が整理されていた。講師のチョッキさんの指導はとても楽しく、皆さん自分のできる範囲でそれぞれに楽しんでいる様子がわかった。コロナからなかなか抜け出せなかったのは残念。

◎学びの場の「自分のトリセツを作ってみよう」の取り組みでは、あまり自分のことを話さない参加者もしっかり書いていて、これを作ることで彼らの話をしっかり聞くことができたと思う。今までできていなかったが、こんなにしゃべりたいこと、考えていることがあったということに気づくことができた。話し合いのグループは参加者2～3人に対し、スタッフと学生がそれ以上の人数だったが、決して参加者が話し合いに入れていなかったわけではなく、皆で話し合ったという感覚があり、フラットな関係でみんなで話ができたとと思う。

◎コロナ禍により、障害当事者同士の繋がりが薄れてきている現状がある。そのような中で、このような場を設け、繋がりを続けられたことはとても大きかった。コロナ禍でなければもっと大きな成果があったかもしれないが、コロナだからこそ得られた成果もあったと思う。

◎楽しむだけの活動ではなく、参加者が社会を学ぶ場にするための様々な取り組み方を一緒に考えることができて、参加者にとっては、確実に社会参加のための力がついてきていると感じた。

◎くぬぎカレッジは、余暇活動の中でも、社会参加のための学習的な色合いが濃く、参加者が自己紹介とか会議などに、どのように参加できるか不安な面もあったが、スタッフの多さやプログラムの工夫などで、皆さんが生き生きと参加されていたので驚いた。だが、期間が限られていて、その中で成果を問うのは難しいと思う。

◎様々な講師を呼んでの活動は、スタッフにも学びや刺激になった。今年は話し合いをしてみようという「みんなの会議」に取り組んだ。やる前は不安が大きかったが、やってみたら彼らの意見が聞けてすごくよかった。これまでは彼らから意見を聞こうというスタンスより、我々がリードしようという面が強かったかもしれない。やってみて感じたことは、毎回、意見をまとめることや発表することに追われていたように思う。発表の時間より参加者からいろいろと話を引き出す時間がもっとあってもよかったように思う。しかしなかなかコミュニケーションの難しい参加者もいたので、そのあたりをどうすればよかったかは課題が残った。

◎くぬぎカレッジをテーマに卒論を執筆した学生がおり、参加者がくぬぎカレッジの活動に見出している意義について分析をおこなった。大きく2つの意義があり、一つは、外へ出ることや余暇活動的な意味としての「非日常を感じる喜び」。もう一つは「仲間と活動する喜び」の2点だ。参加者の仕事の多くが個人作業を主たるものとしているものが多いため、交流や自己表現の場を求めているのだろう。そういう意味でもカレッジは職場や家庭以外の自己表現、自己の解放としての意味があった。また交流しあうことも大きな意義といえる。バスハイクなどのイベントができなかったのは残念という意見もあったが、支援者の工夫によってコロナ禍においてもできるイベントをおこなったことに意味があったと思う。

◎キャバラン隊による家庭での実生活の話を聞いたことは、実り多い時間だった。また講座の一つに参加した時、講師が“両手を組み合わせ右か左のどちらかの親指が上になるかは人によって違う”という話をされた。人は皆それぞれ違う。机の上での話とは違いとてもよかった。私たちも一緒に学ぶことが大切。お互いに解かることも解らないことも、楽しいことも面白いことも共感できることが大切だと思う。

連携協議会について

◎立場は違うが、出席者はそれぞれ同じように障害者の人生を豊かになることを願っていた。障害者の人生に楽しみや生きがいを生み出す時間が余暇活動の中にあると再認識した。

◎様々な立場の委員の皆さんが、知的障害を持った方々の社会参加のための取り組みに対し、立場を超えて意見を交わすことで、より魅力的な活動になった。

◎参加者の話を伺えたことはよかったが、当事者の感想だけでなく、くぬぎカレッジ参加者の意見をまとめ、代表として発信してもらえると、方向性などが検討できるのでは。

◎連携協議会の目的として、現状と課題の分析、今後の提言などが唱えられている。会では、活動報告で発表された課題を、もっと掘り下げないのかなと思う。以前、小グループに分かれ話し合いを設けてはどうか、という提案があったかと思う（聞き間違いかもしれませんが）。

◎様々な立場の人が、障害のある人の生涯学習を考えるこの連携協議会は、当事者の親としてもとてもありがたい。このようなものは今後もぜひ続けてほしいという思いがある。

◎連携協議会は障害のある人の生涯教育について、教育委員会だけでなく、市の福祉部や学識経験者、ボランティア、市民など様々な立場の人が話し合う、初めての場であったのではないかと思います。また障害のある参加者の意見を聞く機会もあり、本人たちが緊張しながらも自分の意見を発表したことは、とても貴重な場になった。また参加者から直接活動の様子や普段の余暇の使い方なども伺う事ができてよかった。このような協議会が終了してしまうのはとても残念なことなので、是非続けていただきたい。

◎学校や作業所や保護者などの様々な立場の人たちの視点から社会教育としてのくぬぎカレッジ（くぬぎ教室を含む）を見直すことができた。

障害を理解するための講座

◎既存の福祉のグループと連携しておこなえたら市全体としていいものになるだろう。

◎新たな発見や気づきもあり充実した内容だったが、広報を工夫してもっと多くの市民の方々に聞いていただきたかったと思った。そのためには、オンラインツールなどの活用も考えてはよかったのではないかな。ネット配信と会場参加のハイブリッドでの開催は最近多い。個人情報など問題のない内容なら、アーカイブとして動画を見られるようにすれば、当日参加できなくても情報に触れる機会を作れるのではないかな。より多くの人に届くことにつながると思う。

◎新たにくぬぎカレッジの運営ボランティアに参加するという人は見られず、新規開拓にはつながらなかった。若い人も含めてボランティアスタッフとしてかかわろうという人を取り込む機会を一つの柱として推進してほしい。

カレッジの実践研究の成果をどのように活かしていくのか

- ◎学びたい、知りたい、交流したい気持ちは障害の重い人も同じ。この実践を是非くぬぎ教室につなげ、内容の充実に取り組んでいただけたらと思う。またボランティアの育成などの課題も含めて、公民館職員だけでなく福祉関係者、学識経験者、市民も含めた協議会で話し合いを続けていてほしい。
- ◎カレッジの実践から、障害があっても学びたい、知りたい、いろいろな人と交流したいという気持ちがあることがわかった。この実践を続けていけば、自分の意見をいうことができる知的障害の方が増えてくると思う。本人たちの思いは十分聞いてもらえず、支援者や家族の意向で大事なことが決められてきたことが多かったので、本人たちにとってはとても大きい力となる。
- ◎今回のような学びの場を、最低2回はくぬぎ教室の年間計画に組み込み、自分自身と向き合う機会を持つようにしたい。また年間を通してダンスなどの表現活動をおこない、発表の機会を設けられればと思う。そしてくぬぎ青空ジャーナルを計画的に発行し、レインボーを活用して恋ヶ窪駅前でコーヒースービスをしながらジャーナルを配りたい。それ以外にも、みんなの会議を日常のおこなえる仕組みを作りたい。
- ◎今回実施したプログラムをそれぞれ評価して、今後くぬぎ教室の中でどれだけ活用していけるかが大切。講師、その他の予算、スタッフ不足などいろいろ考えなければならない課題もあるが、ひとつひとつをクリアして、くぬぎ教室が充実して長く続けられるような体制をつくるのも大事だ。
- ◎今回のくぬぎカレッジの内容や目的を、普段のくぬぎ教室の活動の中にそのまま組み込むことは難しいと思う。しかし部分的には取り入れてもよさそうなものはある。例えば「会議をする」「自分のことを伝える」などの学習的なプログラムをくぬぎ教室の中で、希望する人のグループを作って取り組むことができたらいいのでは。
- ◎カレッジの取り組みについて、参加者はもちろん、多くのスタッフ、多くの職員がかかわり一緒に作っていったこと、しっかり振り返って考えていたことに意味がある。今回の連携協議会も含め、挙げられた意見をいかに活かしていくかが大切である。自分自身はジャーナルの活動に関心がある。当事者が取材して発信するのも大事だが、日ごろ発信する場のない、自身のことや社会への意見なども発信していくツールは大切と考える。
- ◎通年は無理でも「夏期講習」のように集中して数日間、年2回くらい、くぬぎ教室を実施している3館合同でできたら楽しいのではないか。例えばダンス&パントマイムを3日間連続や、講師を呼んでの学びの場など。

◎障害者の重度・軽度は関係なく一緒に行動をとるのがよいと思います。軽度の方は重度の方を助け、これと同様、健常者は障害者を応援する。縦の線引きは、同時にいろんな人間関係にかかわることができると思います。単発で終わらないで関心のあることは、それに集中して学ぶ方向にもって行こうと感じます。最近言われているSDGsの目標に少しでも寄与できればと思います。

実践成果を活かしていくための課題

◎くぬぎ教室で同じように実行するのではなく、それぞれの障害に合わせる工夫が必要だと思う。話し合いの時間もコミュニケーションの難しい人にとっても必要なことだと思う。あきらめずに少しの時間でも繰り返し参加者の話を聞く、意見を私たちから求める態度を示していくことが大切だと思った。

◎スタッフや市職員も多く参加していたので、負担を軽減しないと継続的に実施することは難しいのではないかと感じた。市は会場だけを提供し、スタッフのみで運営することが理想であると考え。参加するスタッフを増やすために、障害者支援またはボランティアに興味がある人が気軽に参加できるような仕組みを作り、裾野を広げられるとよい。どのような人でも気軽にスタッフとして参加できる内容や雰囲気であると思うので、一度参加してもらえれば、今後も空いている時間で参加してもらえるようになるのではないかと。また補助金を活用することが難しいのであれば、多少の自己負担で事業をやることは考える余地はあるのではないかと。参加費を負担してもらったり、クラウドファンディングなどで寄付を募るなど、いいものであればお金をかけてでも参加したいと思ってもらえるのではないかと。またNPOなどで取り組みがある障害者が描いた絵を商品のラベルなどに使ってもらい、作品を商品化することで資金集めなどする方法もあると思う。どのくらいの費用であれば参加するのかアンケートを取ってみてもよいのではないかと。どのようにすれば持続的また発展的に開催していけるか連携協議会のような場で検討できればと思う。

◎カレッジはスタッフが多かったことでうまくいった点が多い。運営スタッフの確保は大きな課題だ。その中でも学生スタッフとの恒常的な関係づくりは大切だ。例えば、大学の学生支援課を通してボランティアを募集することもできる。また特定のサークルに情報を伝え、かわりをもち深めていくこともできるかと思う。学生自身が参加して楽しいと思えれば、継続した参加になると思う。

◎継続的に取り組みをおこなっていくためには、若い当事者の参加が増えるようにする必要がある。若い人たちは余暇活動の選択肢が多いわけではなく、日々の生活や仕事などが安定しないため、余暇活動まで考えられないのが現状だと思う。若いうちからこのような活動にかかわってほしいと思うが、そのためには学校などとの連携が必要。また障害者への理解、かかわる市民をいかにして増やしていくか。地域で共生していくこと、学びの場を公民館で作っていくこと、進めていくこと、いちばんは「人」を作っていくことが大切である。

指導者・コーディネーター会議の記録より

第1回指導者・コーディネーター会議

日程

令和3年5月28日（金）

（発言者 ◎＝指導者 ○＝公民館）

【スタッフのカレッジへのかかわり方について】

- ご寄稿いただいたものにもスタッフのかかわりが確立された方がよいとあったが、充実感をもって活動に参加してもらうにはどうしたらいいか？
- ◎みんなの会議がポイント 当事者の意見・要望を聞く。
- ◎ハンディキャップへの理解と、社会教育は必要。
- ◎福祉はサポート側だが、教育は互いに学び合うこと。支援することではなくて、学び合いがないと意味がない。
- ◎障害者ということへの構えが大きい。それが全てではないはず。その人自身の、区別される性格を含めて知り合う。そのことでベクトルは両方に向くはず。
- ◎みんなの会議を重点的にやってみたら？プロセスを大切にすることが大事。発言をしながらも相手の話を聞く。否定しない、意見はしても批判はしない、大声は出さない、一回は発言する、などルールを作るのもよいかもしれない。最終的には互いにいいたいことがいえるように、スタッフの意見に偏らないように。
- ◎やる気を引き出したり、翻訳するのは公民館主事の手腕。背景の生活、仕事、家族構成などフォローしながら。
- ◎試しに事業中の音声を記録してベタ起こしするのをみんなでやってみるのはどうか？

【開催の代替え案について】

- オンライン以外で何かかわりがあるのか？ またオンラインでできることはどんなことか？ 他自治体ではどのようなことをしているのか？
- ◎国立市ではFM ラジオで放送局をやったことがあるよう。
- ◎電話のやり取り・手紙のやり取り。
- ◎参加意欲をそぐことのないようなプログラムを考えていきたい。個人でできることをのちほど集めて、一つのものになるような活動もしてみたい。パズル的な。

【その他】

- コーディネーター会議は一人のアドバイスをもらうだけなのか？
企画書にもある通り、指導者・コーディネーターはお一人であること、スタッフ・連携協議委員はそれぞれの会議の中でご意見をいただいている。コーディネーターとスタッフとは年2～3回の交流会を開催することで相乗効果を狙いたい。
- 2つにわかれての活動は難しかったのかどうか？ 本年度後半の活動を2つにわけてやるのはどうか？興味があることに集中できるというメリットがある一方、相手方の活動が見えない・職員のマンパワーが足りないなどのデメリットがある。一つのほうが全員でできて楽しいのか？ みんなのことが知りたかったなという意見があった。アトリエもダンスもやりたかった。2時間だけという制限の中、プログラムの組み方についてご意見いただきたい。
- ◎基本的に自分たちがやりたいことを考え、そのために何が必要か？
- 多様な意見の合意集約は難しい
- ◎いろんな経験をしてもらいたいけれど、人の意見を聞いて自分の意見が変わることもある。
- ◎道ができていないわけではない。長い目でプロセスを大事に。
- みんなの会議を大切にするとほかのプログラムが中途半端になってしまうので、バランスを考えながら実施したい。来年度への継続性を考えて、回数や時間を月1回にした。
- 障害を理解するための講座は理解促進のため。こういった切り口がよいのか？
- ◎当事者に語ってもらったらいいいのではないか。精神障害では当事者研究として報告があるが、知的障害の人

にも応用できないかと話が出ている。が、自分自身のことを理解することがなかなか難しく、研究は進みにくい状況。

○スタッフの中には、くぬぎ教室でコミュニケーションが取れると思ったら、排泄介助、食事介助のみで終わってしまったと思う人もいるように思う。

◎排泄、食介を含めての人格。その人の一部として理解し、その人を思えるような講座を。

○スタッフからの意見「もっと積極的にかかわりたい」「責任をもってかかわりたい」と思った時に、介助に自信がない場合の職員からのフォローは？

◎ベテランの実践、体験談を聞くのもよい。ハードルを越えた人。

◎自助グループの経験者の話などもよい。

○2度の方。会話のキャッチボールができない。みんなの会議などの難しい場ではどのように支えるのか？

◎支え方をみんなの会議などで考えればよい。

◎読み書き等、学んだことは失われないように。チャンスがなければ書けなくなる。

◎学びの営みは違う。変化があれば大丈夫。家族以外との話やかかわりが大事。

第2回指導者・コーディネーター会議

日程

令和3年8月3日（金）

（発言者 ◎=指導者 ○=公民館）

【6～7月実施のくぬぎカレッジについて】

○今年度は全員一緒に活動するかたちになっているが、一体感が出て盛り上がっていた。特に混乱もなく、一緒に活動できてよかったという声も出ていた。

○くぬぎレインボーをこれからどうしていくか、活用法も含めて8月の活動で意見を取りまとめ、進めていく予定。

◎会議や話し合いは“目的を達成するための手段”と考えるが、障害者は話し合いそのものが「目的」。話し合いそのものが「学習プログラム」。そのためスムーズにいくことがよいわけではない。

参加できない人（重度の方）がいる、という話だったが、そのような人が参加できるようにするにはどうしたらよいかをみんなで考え、話し合えばよいのでは。

「みんなの会議」は7月に引き続き8月も和泉澤先生の協力を得るとのことだが、8月は傍観していただくかたちでよいと思う。話し合うことによって“考える”。これが大切。

実際、首を縦に振るか横に振るかでは話は進んでしまう。日常の関係ができていれば話も進めやすいが、月1回の短い時間しか共にしていないのであれば、難しい部分もあるだろう。

【今後の支援者養成講座について】

○昨年度の支援者研修で好評だった内容をベースに、昨年度とは異なる講師に依頼した。

○全4回を予定しているが、第3回・第4回で適した内容はあるか。

◎障害当事者に自らの経験を語ってもらうことはよいと思う。また、映像でくぬぎ教室やカレッジの様子を見てもらうのもよいと思う。

◎ターゲットは誰なのか。新規の申込者？ 既存のスタッフ？ そこでも変わってくるだろう。

◎差別や偏見にかかわる問題とは（障害者差別解消法）。知的障害の合理的配慮とは何なのか。そのようなことに正面から向き合う必要も感じている。知的障害者や精神障害者が置かれている状況を知ってほしい。毎日新聞の記者でこのことを取材している人がいる。そのような人の話を聞くのも有意義だと思う。

◎オリンピック・パラリンピックをなぜわかるのか。パラリンピックになぜ知的障害者は参加できないのか。問題はいろいろある。

○以前事件があった「やまゆり園」に入所していて、現在は親族の方々の理解を得て一人暮らしをしている人が

いるという話をテレビで目にした。その人の日常生活を助けているボランティアの方に話を聞くこともよいと思った。

◎軽度知的障害者の「触法問題」がある。スタッフの H 氏が詳しい。講師ができる方を紹介してもらってもよいのではないかな。

◎重度の方とのコミュニケーションについて、月刊社会教育2月号に記事が掲載されているので確認を。

【9月6日(月)開催予定のコーディネーター交流会の内容について】

○スタッフから直接話を聞くことで、スタッフやカレッジの様子が見えてくる部分もあると思われる。スタッフとして参加している中で抱えている課題などについて小林先生からアドバイスをいただく。

事前にスタッフから小林先生への質問を聞いておき、小林先生にそのまとめを送付。当日はそれを呼び水に話を展開していく方法もある。

◎書籍「障害をもつ人の生涯学習支援」があると、話がしやすい部分もある。事前に人数分恋ヶ窪公民館に送付する。

【軽度(3・4度)と重度の方(2度)がともに学ぶための工夫について】

◎重度の方が前向きに参加できるようにするには、というテーマでみんなの会議をする方法もある。

◎その場にいることで“学び”はあるのではないかな。時間を共有することそのものに意味がある。本人の意思を確認することは可能か。本人の気持ち、本人のニーズ、選択肢を用意して尋ねるなど工夫して確認できるとよいが。親御さんに聞いてみてもよい。親がいないところで話を聞くと、本音が聞けてよいところもある。「親こそ最大の抑圧者」ともいう。(⇒「重度の方とのコミュニケーションについて」月刊社会教育2月号参照)

◎最初から“障害”として見るのではなく、“個性”として見る。“障害”を見るのではなく、まず“人”として見ること。障害という枠では捉えきれない。障害から見ってしまうと、大事なことが見えなくなってしまう。

【大学生の活動への主体的なかかわりを引き出すためには】

◎社会教育主事の資格取得の規定が一昨年変更になり、実習が必修になった(これまでは選択必修だった)。そのため、以前より実習生が増えたと思う。

○社会教育実習の学生と、地域貢献で参加の学生がおり、正直意識や姿勢の違いを感じる。

◎基本的に、事業に関する事前指導は必須と考える。話を聞いて参加できるか確認をし、実際にふさわしくないと感じたら参加をお断りすることもありなのでは。

※第3回指導者・コーディネーター会議は「第1回スタッフ・コーディネーター交流会」として開催。記録はスタッフ会議記録のページに掲載。

第4回指導者・コーディネーター会議

日程	令和3年11月12日(金)
----	---------------

(発言者 ◎=指導者 ○=公民館)

【9月開催スタッフ・コーディネーター交流会の意見交換について】

○自己紹介でかなりの時間を使った。スタッフの立場や経験はさまざま。来年度以降どう各館のくぬぎ教室に活かしていくか、スタッフとして聞きたい、もう1回小林先生との交流会をしたいとの意見あり。

◎前は総論を話したが、次回おこなうとしたら、具体的なテーマや話したいことを挙げてもらい、皆で議論する

ようなかたちが望ましい。そこに自分(小林先生)がコメントをする。角度をつけた話し合いができるようにしたい。

○次回スタッフ・コーディネーター交流会は2月に実施することとし日程調整をする。

【カレッジ参加者とスタッフの接し方について】

○いろいろな参加者がいる。異性とのスキンシップ等で異性に“近すぎる人”、なかなか思いを口にしない物静かな人など。それらの対応の仕方について、スタッフからも対応に苦慮したり、どうすればいいのかと悩むという声が出ている。

◎同世代がいる中で、異性に興味を持ち、異性とコンタクトをとりたいなどと思うことは当然であり、自然なこと。これを目的にこうした集まりに来ることもある。そういう意味でも、このような場は必要ともいえる。しかし、気軽に電話番号を教えてしまったため、たびたび電話が来るようになってしまい困った、という事例もあった。

◎「学級の決まり」をつくるような対応はどうか。“個人の情報提供は一切禁止”としているところもあるが、これはよいとは思わない。基本的に“一般常識”で対応をすること。好きな人にいきなり電話は普通はしない。そのような常識。スタッフ会議に挙げ、皆でどう対応するかを考えるようにする。

◎本格的にスタッフで研修会をしたらどうか。平井先生(明星大学)が障害当事者の結婚や恋愛のサポートについて九州で研修を行った。スタッフ間で問題を共有し、同じ対応をとることが大切。この確認をする必要がある。

◎当事者が人との距離感を学ぶような場があるかどうかということについては、町田市の「とびたつ会」はそのようなことをやっているのではないだろうか。

◎ボランティアの「〇〇してあげたい」という気持ちを必要以上に許容してしまったり、それを我慢してしまったりすることにつながることもある。毅然とした態度で接することも必要。

○スタッフは参加者の情報をどの程度知っておくべきか。

◎国分寺市のルールに則る。これについては職員間で検討することである。どれだけ情報を開示するかについては、大学でも問題になっている。悩ましいところである。事故やトラブルが想定される物事は、ある程度障害当事者に伴う性質や特性を知っておくべき。気持ちをどう発散するのか、特徴的な動作等、ある程度の共有は必要。書類だけでなく、保護者に直接話を聞くことも必要。預かる立場として必要な情報は提供してもらう。(そのためには保護者との信頼関係を構築する必要もある。)

◎親によっては、知りたくない、聞きたくない、大人として見られない、18歳以上になるといろいろなサポートがなくなることから、まだ子どもでいてほしいという人も多く、特に異性との問題には耳をふさぎたくなる親御さんもいる。

◎スタッフと保護者が話す(顔を合わせる)場があってもよいのではないか。重度の人は家の人が送迎されその時に話ができるが、軽度の人はなかなか機会がない。

【くぬぎカレッジの取組成果を来年度以降の事業へ還元するために】

○来年度カレッジは存続しない。活動内容をくぬぎ教室に還元していく。

本 多:ラボの実践をそのまま行うことは難しく、スタッフからも本多の参加者には難しいという声が多く挙がっている。テアトロとアトリエの要素は生かせると思っている。

並 木:スタッフが、カレッジでの学びを取り入れて活かそうと考えてくれている。

恋ヶ窪:もっと“ゆったり”でよいのでは、というスタッフの意見がある。恋ヶ窪は参加者が活動内容を決めるので、参加者・スタッフ・職員の三者で話し合いながら考えていきたい。恋ヶ窪のスタッフからは、難しすぎるというような意見はない。

○連携協議会については、何らかのかたちで残したいと考えている。横のつながりがよかった。

◎カレッジの要素を各館でできるだけ還元してほしい。例えばイラストを用いたりなど、重度の方が参加できる工夫ややり方はあるが、その準備に時間と労力がかかけられるかということがある。「自主グループ」の考え方はどうか。皆どの程度知っているのか。自主グループは最大限当事者主体で、企画運営を当事者ができる限りおこない、そこに世話人のような立場でスタッフ(プラス職員)がかかわるかたち。町田市の「とびたつ会」は

全くの自主グループ。社会教育関係団体と認定されると、公的なサポートが受けられる(補助金・優先的な活動部屋の確保等)。

- このカレッジを活かし、今後ステップアップできる場所があればと思っている。公民館事業としてこれからやるとしたら、国分寺市が初めてだと思われる。還元する部分と新しく作っていく部分があればよいと思う。市民からの支援としては、NPO等の可能性を探ってみるのもよいのではないかな。また、福祉系の大学や学部があるところにターゲットを絞ってスタッフ募集をしてみたらどうか。

第5回指導者・コーディネーター会議

日程 令和4年1月17日(月)

(発言者 ◎=指導者 ○=公民館)

【11・12・1月実施のくぬぎカレッジについて】

- ◎「ミライ」というテーマは重要なテーマ。自分の将来を考えることは、障害者にとって大きなハンディキャップとなっている。どこまで成果としてあらわれるのか期待する。可能であれば、参加者の保護者に感想など話を聞けるとよい。総括しながら次につなげることが大事。継続したテーマにするとよい。

【1月30日 成果報告会について】

- 準備・会場設営・飾りつけ等全員でやる。活動内容はパワポで報告、参加者とスタッフが説明。その後、小林先生に5分程度で言葉をいただきたい。レインボーの紹介は中継で行う。最後にダンスを全員で踊る。リモート開催は考えていない(リモートでは参加できない人もいるので)。成果報告会への参加募集は、通常の講座同様、広く一般市民に向けて広報した。
- ◎公民館で実施したという一つのモデルとしてアピールするとよい。リモートでは実施しないとのことなので、換気と距離を保つなど対策をとり、またスタッフの意見を聞きながら、できることを実施するのがよいと思う。

【スタッフ・コーディネーター交流会の内容について】

- ◎交流会の内容としては、1月23日に実施する「障害を理解するための講座④」の田丸さんの講座内容を題材にしてはどうか。
- 再度、スタッフにも参加するように声をかける。また、前回同様事前アンケートを取り、それをもとに意見交換したい。

【今年度のカレッジの振り返り】

- 恋ヶ窪くぬぎ教室とカレッジを同日に実施したことについて、参加者はほぼ恋ヶ窪くぬぎ教室参加者だったこと、またスタッフも教室スタッフとの兼任が多かったため他の週に設定することはかえって負担になると考えたため。
- ◎いろいろなプログラムを用意して、参加者が自ら選択して参加することも大事な学習となる。全員が参加できることを考えるのは大変。
- 文科省に報告することを考えると、年間当初プログラムからの変更がしにくいと感じた。
- 文科省からの受託事業として、単年度の2年間となった。忙しく、フィードバックがなかなかできなかった。
- ◎2つのこと(教室がある中でプラスカレッジがあること)を同じ担当がやることは難しい。「くぬぎ教室」という長い時間をかけて蓄積したものを再構成したという位置づけでよいのではないかな。公民館の講座は基本1回完結なので、くぬぎカレッジも一緒と考えてよいのではないかな。でも、つながっていることは意識する必要がある。

- くぬぎ教室は、余暇活動要素が強いと考えていた。学ぶとはどういうことなのか。受け取るというより気づくこと。カレッジを実施することで「学びも楽しい」と気づくことができた。
- 参加者はくぬぎ教室の参加者がほとんど。新しい参加者に参加してもらうにはどうアプローチするのか、「学びのニーズ」をどうやって把握すればよいのか難しいと感じた。公民館は、地域とのつながりが大事。でも公民館が目指す学びの場をつくるのは難しい。
- ◎余暇と学びのバランスについては、難しい課題。実施したからこそ出てきた課題でもある。国分寺市が複数館でくぬぎ教室を実施している難しさでもある。町田市のとびたつ会や国立市の青年室のようなものがある。国分寺市で新しい何かができるか。参加者だけではできないこと、支援者が必要。

【来年度以降の事業へ還元するために】

- 今年度短い時間の中でも静と動があってよかった。「みんなの会議」など話し合いの場が提供できたことはよかった。
- 軽度の方が多いカレッジの活動を重度の方も多くいるくぬぎ教室で活かす方法がすぐには思いつかない。
- ◎障害の程度によりプログラムがそれぞれであるのは当然のこと。スタッフの人ともよく話し合ってみるとよい。
- ◎カレッジというと、いわゆるオープンカレッジや専攻科のように大学のようなものも増えている。一方で、仲間づくりや楽しみであることも必要。公民館はどの部分を引き受けるのか、役割分担はしてよいと思う。くぬぎカレッジの実施で、ある程度「学習」ができることがわかったのだからいろいろと実施してもよいが、すべての側面を含むことは現実的には難しいのではないか。
- スタッフから相談窓口をつくりたいという話もある。また、専門大学などに声掛けしてスタッフを増やしたい。
- ◎成果報告書を作成すると思うので、社会教育士を出している大学やコンファレンスに参加している自治体などに送付するとよいのではないか。
- 今登録しているスタッフにも元気でがんばってもらいたい。そのためにも交流会をぜひ！

※第6回指導者・コーディネーター会議は「スタッフ・コーディネーター交流会」として開催。記録はスタッフ会議記録のページに掲載。

事業を通して見えてきたもの

事業を通して見えてきたもの - 職員から見た成果と課題 -

前年度の文部科学省受託事業に対する反省として、職員や運営スタッフから『障害者を取り巻く環境、周囲の人々への働きかけを行うことはできたが、当事者たちは、どう感じたのか、どのように接してほしいと望んでいるのかという視点にもっと注目してもよかったのではないか。』という意見があった。今年度はそうした意見を基に「自分の意見や考えを自ら発信する力を養うこと」「コミュニケーション力を養うこと」に主眼を置いた。

その上で活動内容を「学びの場」と「交流・発信の場」「みんなで考える」という3つの体系に整理した。

「学びの場」では、講師から話を聞き、講師指導の下でグループワークを行う形式とした。そこでは、「自分のことを自分自身で見つめなおす」ためのプログラムを中心とした。これは「他の人に自分のことを理解してもらうためには、まず、自分が自分のことを知っておく必要があるのではないか。」との考えによるものである。

「交流・発信の場」では、自分たちの考えや思いを発信するための方法やツールを学ぶ時間とし、ダンスなどの身体表現や自分たちの気持ちや考えをまとめた「くぬぎ青空ジャーナル」の作成をした。また昨年度から作ってきた「くぬぎレインボー」という移動式屋台の飾りつけを行い、情報発信するための場を整備した。

「みんなで考える」では、「みんなの会議」という会議形式の話し合いを行い、コミュニケーションに必要な「相手の意見も聞く」という要素と複数の人たちの意見をまとめ上げる「合意形成」について学ぶ機会とした。会議は、「他の人の意見を最後まできちんと聞く」といった話し合いのルールの確認を行い、議長や書記、タイムキーパーなど役割を抽選で決めて行った。議題は『くぬぎレインボーの活用について』『くぬぎジャーナルについて』などくぬぎカレッジの活動に関わるものの他、自分たちの思いを話し合い、その結果を「くぬぎカレッジ連携協議会」(以下連携協議会)で報告する仲間の選出もした。連携協議会は「カレッジの参加者に効果的な学習を提供するための実施体制に関すること」などを協議する機関で、「障害者団体」や「くぬぎ教室スタッフ」「公民館利用者」、市の障害者施策担当職員といった多様なメンバーで構成されている。令和2年度から設置しており、昨年度の活動のまとめの際に委員たちから「(令和3年度は)参加者から直接意見を聞いてみたい。」という声が上がっていたため、報告の場を設けた。

また、コーディネータから出された今年度の事業への「持続可能な公民館事業としていくための運営体制について」と「継続して事業を展開していくためのスタッフの確保と要請について」の二つの課題については、市内公民館五館全館から職員を集めて作業を分担しながら事業を行うとともに、スタッフにも「実行委員」として毎回の準備や運営に主体的にかかわってもらうこととした。また障害者について知ることによってスタッフとしての活動に関心を持つ人を掘り起こす目的で『障害を理解する講座(全4回)』も開催した。

このように「当事者の自己表現」に注目して行った事業は、職員だけでなく「スタッフ」にとっても障害当事者に対する新たな視点を持つきっかけとなったようで「想像以上にいろいろなことができるということが分かった。」といった感想が聞かれた。

今までは、どちらかというと「プログラムの受け手」として接してきた部分があったが、当事者たちの多くは「自分の気持ちを表現したい。」「自分をもっと知ってほしい。」という強い欲求を持っており、普段はあまり気持ちを表に出さない当事者でも、接し方によっては豊かな表現を発揮することに気がついた。このような「当事者の新しい一面の発見」が今年度の取り組みの一番の成果と言えるのではないだろうか。

今年度の事業を通して見えてきた課題の一つ目は「当事者たちの力を引き出すための時間と効率的な事業運営のバランスのとり方」であろう。当事者たちは、潜在的にいろいろな形の多くの欲求や表現力などを秘めていることが分かったが、それらを引き出すためにはそれなりの時間が必要である。実際に事業の運営について「もっと参加者の意見を反映させて行すべきではなかったか。」という意見も出ている。

課題の二つ目は今後の連携協議会についてである。参加した委員にとっても分野を超えて話し合うことが新鮮であり、多種多様な組織と広く連携することが、障害者の学習機会の確保のために必要なことだとの思いから「今後もこのような場を残してほしい。」という意見が出された。しかし、「カレッジ」は終了するため、これまでの役割とは別の新たな役割や目的を定める必要がある。

こうした課題について今後も検討を重ね整理していくことで国分寺市の「共に学ぶ」場をよりよいものにしていけるのではないかと思う。

資料 I

アンケート結果

障害を理解するための講座① 参加者アンケート集計結果

10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	無回答
0	1	1	1	2	5	3	0	1

《意見・感想・自由記述…原文ママ》

【参加のきっかけを教えてください】

- ◎去年も参加してとても勉強になったので都合があれば参加したいと思っていました。実施日の直前の申し込みでしたが、参加できて良かったです。
- ◎ボランティアスタッフ活動の際に役立つため。
- ◎くぬぎ教室のボランティアスタッフを行っているため。
- ◎くぬぎ教室後の告知で知った。
- ◎以前より関心のあるテーマだった。
- ◎くぬぎ教室・カレッジのスタッフとして色々学びたい為。
- ◎チラシを見てたまたま都合がよかったので学習したいと思いました。
- ◎障害者と接する中でコミュニケーションの取り方が難しいと思っていたので少しでも参考になればと思い参加しました。
- ◎自分の職業への知識を深めるため。
- ◎今少し障害者にかかわるボランティアをしていますが、これから増やしたいと思っているため。
- ◎昨年の講座に参加して学びが沢山あったので。

【本講座の内容はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
11	3	0	0

- ◎普通の社会で暮らしやすいようにと、くぬぎ教室があるんだと知りました。ひとりの人間として接することが大事ということ！ 障害を持っていることで困難をかかえていることにまわりのサポートは必要だとしても本人の意思等大切にしなければならないことは重要と感じました。
- ◎私は支援者としての経験があまりないのでくぬぎカレッジでの障害者の状況（生活、トラブル）などを少し話してもらえたらもう少し具体的にイメージできたかなと思いました。ケースステディのグループでの話し合いは良かったです。
- ◎市の事業や様々な意見など聞けてよかった。
- ◎みんな同じような悩みを持っているんだなと思いました。
- ◎知的障害者への支援など勉強できました。テーブルの人達の話が聞けて良かったです。
- ◎現場に携わっておられる対応策、考えがよく理解できました。
- ◎今年から参加していて無知の状態で始まりました。利用者様を理解する事、同じ人間として一緒なのだと

強く思いました。

◎現場でスタッフとして活動している方とお話ができてよかった。

◎知的障害を持った方がなぜその行動をとるのかを考えることの大切さを理解することができた。今後のくぬぎ教室カレッジでの知的障害を持つ方との接し方の参考になりました。

◎グループワークの各グループの発表はとても参考になる。自分の考えがもしかしたら違う角度から見るとまるで違ったものになる 正解というか これがいい方法とは(どの事柄をとっても深いものがあって)いえない気がする。和田講師の話はとてもわかりやすく知的障害者の理解の根本をお話しされていたと思う。

◎障害に関係なく人間としてかかわる事が大切と再度確認しました。

◎社会に参加しているという自負が持てると自信につながると思います。お互いに幸福な社会生活がおくれる様な活動していけたら嬉しいです。

【開催の日程・時間や回数はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
10	3	0	0	1

◎ケースステディは答えというものはないのかもしれないけれど話し合うことがとても勉強になりました。他者の意見をきく良い機会だったのでその時間がもう少し欲しかったです。

◎土日だとなかなか参加できないこともあるので平日の開催も考えていただけると助かります。

◎もう少しディスカッションを行いたいと思いました。

◎4回の講座の初めにきけてよかったと思う。

◎仕事をしている方からの話を聞くことができたので、とても参考になりました。

◎時間がもう少しあればさらに良かったと思います。

◎もう少し長くやった方がよいと思いました。

【講座の準備や当日の司会・進行などはいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
13	0	0	0	1

◎また参加したいです。

◎とても良かったです。

◎ありがとうございました！

◎内容もわかりやすくとても勉強になりました。

◎全員の自己紹介も聞きたかった。

【今後のご自身の生活や仕事に活かせるようなことはありましたか】

◎くぬぎ教室カレッジに生かしていきたいと思います。

- ◎くぬぎ教室で参加者さんにかかわるときに頭にちゃんと入れておきたいと思う。
- ◎はい、今後の仕事、ボランティア活動にいかして行きたいと思います。
- ◎相手の気持ちを理解する為に周囲の協力も必要であることに気が付くことができました。ご本人が一番幸せな状態、状況を理解することが重要であることをもっと考えて行動していきたいと思いました。
- ◎障害のあるなしに関わらず、人と接する際に必要で最も大切なことを改めて感じました。それを日常の中でも生かしたいです。
- ◎まず大切なことは自分が楽しいという事。いつも明るく接していけたらよいと思います。
- ◎対応の方法など生かせそうです。
- ◎参考になりました。答えは出ないけどより考える機会ができました。

【本日の運営についてお気づきの点などをご記入ください】

- ◎時間がない中、コロナ禍での開催お疲れ様です。
- ◎ケースの話し合う時間をもう少しもてたらよかったです。
- ◎交通の便がちょっと悪いかとも思った。
- ◎良かったです。グループに職員が入って下さってスムーズになったと思います。
- ◎特にありません。

障害を理解するための講座②「疑似体験から学ぼう」参加者アンケート集計結果

10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
0	3	2	1	2	1	5	0

《意見・感想・自由記述…原文ママ》

【参加のきっかけを教えてください】

- ◎くぬぎ教室のスタッフとして学ぶ為
- ◎卒業論文で障害と社会教育との関係性について研究しており、参考にしたいと思ったため。
- ◎支援に対する理解を深めたいと思っているため。
- ◎今後の活動の参考になりそうだったから。
- ◎親の会に入っていて、キャラバン隊に興味があったから
- ◎前回座間の人達キャラバン隊の実体験の話を聞き、その後、障害者の人達の交流する中で、自然に入り込めたことに実感しました
- ◎自分の子が自閉症で、彼が見ている世界がどんな世界なのかを理解する為
- ◎くぬぎ教室のスタッフとして障害を理解したかったです

- ◎いここに自閉症の者がいて、その人自身はどのように社会を見ているのか見え方がわかるなら知りたいと思ったので
- ◎くぬぎ教室のスタッフを行っている為、より障害を理解したいと思い。
- ◎くぬぎカレッジに参加していて
- ◎支援のヒントとなればと思って
- ◎恋ヶ窪公民館の実習生として参加しました。
- ◎話だけでなく、疑似体験をすることで、障害をより理解出来るのではないかと考えて。

【本講座の内容はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
12	2	0	0

- ◎体験をする事によって身近に感じる事が出来ました
- ◎実際にどのように対応したらよいのかという点まで教えていただけて、日常に活かすことができる講座で、とてもためになりました
- ◎シングルフォーカス…気付かないということは本当に気付かないものなんだと驚いた。
- ◎情報量が多い場所で、知的がい者の見ている世界がわかったこと
- ◎いろいろな体験が出来て良かった。見え方が具体的に何となくわかり良かった。
- ◎実体験できたことが非常に良かったです。今までの障害関連の講座の中で一番でした！体験5が一番心に残りました。
- ◎知的発達障害をもつ方には何気なく見たり聞いたりしたことが思った以上に情報過多、感覚刺激になっている事を体験できた。又、障害者以外にも感じることに思えた。
- ◎科学的検証に基いた内容で非常に説得力がありました。
- ◎困った人ではなく困っている人、という言葉。教室に参加していると、きっと何か伝えたいことがあったり、嫌な思いをしている要因があるのだなと思うことがたびたびある。それが何なのか、くみ取ってあげられないもどかしさを感じることもある。伝えたいこと、本人が感じていることをくみ取るためのヒントをたくさん知ることができた。
- ◎障がい理解するにあたって、障がいを持っている本人の気持ちになることが必要だということを、疑似体験で学ぶことができました。また、自分がもし、障がいを持っている方々に会った時の対応方法についても、具体的に知ることができ、満足しました。
- ◎疑似体験により、とても分かりやすく楽しみながら講座を学べたように思う。

【本日の体験の中でどの体験がわかりやすかったですか】

指示待ち体験	シングルフォーカス	動画による再現	言葉を聞いて 絵で描こう体験	音楽を聴いて 曲名をあてよう
10	19	10	9	8

- ◎体験する事がないので、全ての面で勉強になりました
- ◎体験を通して「悩む」ことで、傷害をもつ人たちがどのように困っているかを感じることができました。
- ◎不安な気持ちを実感できた。
- ◎それぞれ特色のある講座でしたが、1つシングルフォーカスで電車の中で回りに迷惑をかけないようにする方向にもっていくと、もし横に座っている人としては“どうしたの”と声をかけるのがいいのでは。いつも障害者をダメよってというのは、気持ちをそらすことはどうなのかなあ。
- ◎音楽を聴き分けている時に説明文が入ってくると、音楽の方がわかりにくかった。シングルフォーカスと似ているような気がした。言葉で聞いて絵に描こうというのは、指し示すものが分かりやすい物体の場合はいいけれど、概念的な言葉の時は人それぞれとらえ方が異なるので難しいと感じた。
- ◎どの体験も悩んだり困る体験ができ良かった。
- ◎親の方々が講師なので、体験、経験されていることが、より具体的に我々に伝えていただけたし、説得力が感じられました。
- ◎本人が見ていること、感じていることを少しだけ理解することができたと思う。
- ◎自分の五感を使って体験することができ、すごく印象に残りました。特に、言葉を聞いて絵で描こう体験では、人によって抽象的表現には差があるということを学びました。また、その人それぞれの感覚があるということがおもしろいと思いました。

【開催の日程・時間や回数はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
10	3	0	0

- ◎貴重な体験をさせて下さいまして、ありがとうございました。また是非、参加させていただきたいです。
- ◎本日のような体験講座をもっと開催していただきたい。
- ◎途中で休暇を取り入れたのが良かった。

【講座の準備や当日の司会・進行などはいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
10	1	0	0

- ◎声に通っていて聞きやすかった。

【今後のご自身の生活や仕事に生かせそうなことはありましたか】

- ◎障害を持つ人の心理状態（特性）を理解でき、思いやりを持って接することが大事と思いました。
- ◎『困った人ではなくて、困っている人』などの理念は、自分の生活を送る中で、周りに伝えられることだなど思ったので、これから周りを巻き込んで、一人の立派な専門家よりもたくさんの理解者が増えるような社会を目指したいなと思いました。
- ◎はい
- ◎「大丈夫ですか」より「何か手伝えることがありますか」という声かけ
- ◎仕事やボランティア活動、その他の生活の場面でも理解して生かしていけそう。
- ◎はい！ プライベートでも仕事でもいかせると思います。
- ◎きっかけとなったところは既に亡くなっているのですが、社会で見かける方達に対して、何かもし手助けとなることが出来たらいいなと思っています。また直接関わらなくても、温かく見守る気持ちやまわりの雰囲気づくりが大事だと感じましたので、そういった面でサポートできればと考えています。
- ◎発達障害の息子がずっとしゃべっているのは、発達障害の特徴だと知った。
- ◎コールセンターの指標「明日」「来週」「翌日」と書いてあったので、日付で書いてほしいと依頼したばかりだったので、具体的な指示の重要性を感じた。
- ◎やさしく見守っている気持ちを、マスク越しでも伝えられるように努力したいと思います。

【本日の運営についてお気づきの点などをご記入ください】

- ◎Winds の皆さんのチームワークがすばらしいなと思いました。
- ◎キャラバン隊との体験以外の話しがとても良かったと思います。
- ◎娘の小学校で座間キャラバン隊が来てくれて、寸劇を見たが、今回の新宿キャラバン隊の方の勉強は体験だったので、参加型で楽しかった。
- ◎新宿キャラバン隊と新宿親の会の現状を知れて良かった。

障害を理解するための講座③「地域でともに暮らすために」参加者アンケート集計結果

10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
0	2	2	0	4	6	2	0

《意見・感想・自由記述…原文ママ》

【参加のきっかけを教えてください】

- ◎障害者のことをもっと知りたい。
- ◎町田市での取り組みを伺いたいと思いました。
- ◎Sさんのグループホーム世話人として、いろいろ知りたかったので。
- ◎障害者と関わるスタッフをしていますのでよりよい関係を持つ事が出来たらと思い参加しました。
- ◎障害をもった方が普段どのような暮らしをしているのか興味があったので参加しました。
- ◎くぬぎカレッジに参加しています。
- ◎障害を理解するため。
- ◎障害者の生活、結婚などについて知りたかった。
- ◎くぬぎカレッジ連携協議会で知りました。ご本人から直接お話を聞く機会であること、当事者活動のことを聞きたかった。
- ◎グループホーム、結婚生活、1人暮らし等障害のある人の生き方に興味があり、何か出来ることがあるか考えたいと思って参加。
- ◎自分の子が発達障害で、今後彼がどのような道を歩むのかを知りたい為。
- ◎くぬぎ教室とともにカレッジでも市の事業として継続していただきたいと思います。(感想ですね。) どんな講座か知りたいと思いました。
- ◎今後の参考に。
- ◎くぬぎ教室の中で紹介されて参加する。
- ◎町田青年学級にかかわっていて知りました。
- ◎くぬぎカレッジ障害を理解するための講座①②に参加していたので。

【この講座を通じて障害のある人とともに暮らすための学びや気づきがありましたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
12	2	0	0	2

- ◎お互い（支援出来る人と障害者）理解し合えればもっと出来る事が多くなる、世界がひろがる。
- ◎言いにくい話もこの場では、素直に発言出来ていたように感じました。
- ◎高齢者とも関わる仕事をしていますが、健常者・障害者関係なく取り組む内容は同様だと思います。1人ではない、仲間存在を大切にしたい。
- ◎私たちと変わらず楽しく過ごしているんだなと思いました。
- ◎結婚をしている障害者の方にはじめて話を聞き周りのサポートや理解がたくさんあって素敵な環境だなと思いました。そんな環境をつくれるひとに私もなりたいと思います。結婚や子育てってこんな感じなんだなと学びにもなりました。
- ◎障害のある方のれんあい、ふつうのくらしもだいじ。
- ◎実家で学んだことが現在の生活に活かされているなど具体的な話が（子育て、育児）聞けて良かったです。
- ◎ご本人がしっかり自分の意見を話していたことに感激した。
- ◎恋愛や家族をもつことについてのお話がとても良かったです。

- ◎グループホームに家族で入っているということ、お話し下さった M さん、S さんは普通に仕事をして生活が自立できるだけのお給料をもらっているんだらうなという良い発見と驚きがありました。障害といってもいろいろなものがあるから何を傷害というのか?と考えてしまいました。
- ◎今日は S さん、M さんにこたえにくい質問などおねがいして恐縮していますが一生懸命自分の心とことばで話していただき感動しました。
- ◎何が必要か、知ることが大事だと思った。(親子関係の大切さ)
- ◎特例子会社の存在、グループホームという施設の存在。

【開催の日程・時間や回数はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
10	5	0	0	1

- ◎良かったです。
- ◎コロナのことがやはり気になりましたが、参加できてよかった。もっと大勢参加しても大丈夫になってほしいです。

【講座の準備や当日の司会・進行などはいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
14	1	0	0	1

- ◎一歩踏み込んで話し合える場が増えたら良いですね。
- ◎明るくにこやかなご対応に感謝しています。ありがとうございます。

【今後のご自身の生活や仕事に生かせそうなことはありましたか】

- ◎障害があるなしは関係ない事を実感できました。生活に関するルールは同じなので差別なく身につくよう指導していきたいと感じました。
- ◎やはりまわりの理解や協力を必要と思いました。働きかけていきたいと思います。
- ◎くぬぎ教室にいるメンバーは 1 人暮らし、グループホーム、親と一緒にの生活と色々だが何とか恋愛、結婚へと進むメンバーをつくりたい。その為にスタッフとしてやれそうなことを考えたい。
- ◎今後の親の会の活動に生かしていきたい。

【本日の運営についてお気づきの点などをご記入ください】

- ◎グループワークの時、M さんの話が直接聞けなかったのが残念でした。おふたりの話を直接全体で聞くことはできたけれど、後で直接と進行されながら、それがなかったのはどうかと思いました。
- ◎障害者ご自身の生きた話が聞けてよかったです。両者の話が伺いたかったです。

障害を理解するための講座④「差別のない未来をつくる」参加者アンケート集計結果

10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
0	1	2	0	3	4	3	0

《意見・感想・自由記述…原文ママ》

【参加のきっかけを教えてください】

- ◎くぬぎ教室からお知らせで参加。
- ◎障害者と接していく中で必要がと思い参加しました。
- ◎やまゆり園の事件はまだ薄れてないので。
- ◎自身の子が発達障害の為。
- ◎障害者と関わる為にはどのようにしてゆけばいいのかを学ぶ為。
- ◎以前ろう学校や養護学校にも行ったことがあったので。
- ◎障害を理解するため。
- ◎町田市での障がい者に対しての取り組みなどを知りたかった為。
- ◎くぬぎカレッジに参加して。
- ◎差別って何？

【この講座を通じて障害のある人とともに暮らすための学びや気づきがありましたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
11	0	0	0	2

- ◎いろいろ参加者の意見交換できてよかったと思う。よい講座でした。知り合いになること、話をする、わかることが基本だと思う。
- ◎障害を持った方との接する機会がほんとに少ないと思います。接することで差別や偏見がなくなっていくと思います。
- ◎一言で片付けられたことの無力感は誰でも感じていることなだと思いました。
- ◎早い段階（幼少期）での障害者に対するインプット（教育）及び体験が必要だと感じた。こういった参加型であると興味を持った人しか参加せず共生は難しい。
- ◎障害者と見た目で判断するケースが多い。障害者と健常者との区別はないので「話す場」の必要性。
- ◎全盲の方の話を直接聞いたのがとても良かったです。
- ◎とても良かったです。（本人のことはがきけて）
- ◎障がい者は守られる、かわいそうな存在ではない事を再確認しました。
- ◎最後の言葉やとびたつ会の人話を聞いて、今ホールの中にいる人達だけでなく、どうしたらより多くの人に障害のある人が身近になるかを考えました。とびたつ会、くぬぎ教室、もっと公民館の外の人に何かアピールできたらいいなと思います。

- ◎障害のある人とどうやって出会える？知っていくことが一番障害をなくすことにつながっていく。
- ◎共生社会のポイントの話が良かった。障害者をひとくくりで理解するのではなく個々に個人として考え、どうしたら出来るかを考え、工夫・手助けが必要だというところが大変参考になり今後の活動に生かしていきたい。
- ◎障害者の立場に立った上での考え方をいかに広め、認め合うことの重要性を改めて感じ、考えさせられた。

【開催の日程・時間や回数はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
10	1	0	0	2

【講座の準備や当日の司会・進行などはいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満	無回答
11	1	0	0	1

- ◎明るくにこやかな対応でとてもいいです。

【今後のご自身の生活や仕事に生かせそうなことはありましたか】

- ◎こちらが差別として話す訳ではなくても、受け止め方によってはそうとられてしまうのかもしれないと感じました。話し方や言葉づかいは大切なのかなと思いました。
- ◎田丸さんのコメントにあった「出来ない理由を考える、述べるのではなくやる為にどうするか」は本当に重要なポイントだと思います。要は「当事者意識を常に持つ」ということであり忘れないようにしたいと思います。
- ◎子どもから無理難題をつきつけられてもできるようにするには？を先に考えることにしようと思います。
- ◎「できない理由を探すより、やれる方法を考える」という話がありましたが、これは民間のサービスである限り、コスト、効率、ターゲット層というものがあるので解決するのは大手の企業（公共機関等）やサービス企業でしか現状難しいと感じた。ですが、意識として植えつけられたのは非常に良かった。
- ◎障害も健常者も対等である。1人の人間としての関わりが大切。
- ◎出来ることをどのように手助けすれば良いのかなど、工夫をして行きたいと思います。

【本日の運営についてお気づきの点などをご記入ください】

- ◎各グループごとのディスカッションが良かったです。
- ◎くぬぎスタッフの方の参加が多い講座でしたが、もっと多くの方に理解していただくためにも改めてこのような講座をつづけてほしいと思いました。

成果報告会 参加者アンケート集計結果

10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
1	1	0	2	4	3	3	1

《意見・感想・自由記述…原文ママ》

【参加のきっかけを教えてください】

- ◎卒業論文の調査対象としてご協力いただいております。今回も毎月のボランティアの続きとして参加させていただきました。
- ◎くぬぎカレッジ連携協議会。
- ◎教室を理解するための講座に参加したので。
- ◎くぬぎカレッジの活動に興味があったため。
- ◎くぬぎ教室のみなさんが大好きです。
- ◎カレッジに参加したので、今日の成果報告も見たいと思いました。
- ◎くぬぎ関係。
- ◎くぬぎカレッジの様子を知りたかったから。
- ◎子供が参加させて頂きました。
- ◎子供が参加。
- ◎くぬぎのスタッフをやっていて「来て下さい」とおさそいがあった（メンバーさんから）。
- ◎参加できることを知人より聞きました。

【この成果報告会はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
13	1	0	0

- ◎ダンスの発表です。みなさんとてもいきいきとした様子で発表されていて、頑張ってきたものを誰かに見てもらうことのよろこびを感じながら動いていることを、客席側からも感じる事ができました。
- ◎皆さんが楽しそうに参加していることが印象に残りましたし、一年間楽しかったんだなと感じました。参加者の一体感を感じることができました。
- ◎たのしかった。
- ◎進行など含めて、全てくぬぎカレッジのみなさんがやっている、進められていたのが良かったです。
- ◎ひとりひとり、自分らしく表現することの大切さ素敵さをひしひしと感じました。この経験を次につなげていくにはどうしたらよいか考えていきたいです。
- ◎全て良かったです。お疲れ様でした。
- ◎短かった。…もっと丁寧に活動報告を伺いたかった。
- ◎カレッジに参加していたので、今回の成果報告も見たいと思いました。

- ◎みんなでパフォーマンス。
- ◎活動の様子が良くわかった。参加した方々のパフォーマンス（ダンスなど）がとてもよかった。
- ◎皆な楽しそうに活動して良かったです。
- ◎皆さん生き生きと楽しそうでした。ダンス等。
- ◎くぬぎの事を知ってもらうのに良い報告会だったと思います。楽しかったです。
- ◎チョッキ先生の指導。

【開催の日程・時間や回数はいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
12	1	1	0

- ◎休憩時間があることで間伸びせず最後まで見る事ができたと思います。
- ◎ちょうどよい長さだと思います。
- ◎例えば、取り組んだことをそれぞれ1～2人ずつ発表してもらうとかあると、よりわかりやすかったかもしれない。当事者のご家族や近い人たちは内容を知っているかも知れないけれど、全く知らない人には説明が言葉だけではわかりにくかった。
- ◎コロナ禍でも開催して下さい、ありがとうございました。
- ◎コロナがまだまだ拡大している中、短い時間での開催で丁度良かったと思います。
- ◎今後も続けて下さるよう、お願いします。
- ◎コロナの中、実行され良かったです。

【講座の準備や当日の司会・進行などはいかがでしたか】

満足	やや満足	やや不満	不満
13	1	0	0

- ◎明るく笑顔のご対応、ありがとうございます。
- ◎丁寧で温かい対応でした。
- ◎2年間のまとめができましたね。これからの活動に期待しています。
- ◎満足です。

【本日の運営についてお気づきの点などをご記入ください】

- ◎職員、スタッフ、利用者が一緒に作り上げている様子が見られ、とても良かったです。
- ◎よく準備されていて楽しかったです。
- ◎公民館活動の中で障害者中心に催された事に感謝します。

資料 2

事業チラシ一覧

こくぶんじしりつこうみんかんしゅさい
国分寺市立公民館主催

れいわ ねんどもんぶ か がくしやう ちいき じぞくかのう まな しえん かん じっせんけんきゆう じぎやう
令和3年度文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業

知りたい・学びたいから始まる くぬぎカレッジ



ちいき かんが はっしん
～地域の人々と考え、発信していくために～

2021年6月13日から2022年1月30日まで
詳しくは
うらめん
裏面へ →

げんそく だい にちやうび ぜん かい ご こ じ じ こいがくほこうみんかん
原則 第2日曜日 全9回 午後1時～3時 恋ヶ窪公民館ほか

しょうがい ひと ひと まな ささ あ あたら まな ば さん か
障害のある人もない人もともに学び、支え合う新しい学びの場に参加し
てみませんか。「もっと知りたい、もっと学びたい」という気持ちを大切に、
じこけいはつ まな ぞうけい
自己啓発やコミュニケーションスキルを学んだり、ダンスや造形などをしま
す。ちいき こうみんかん いがい ばしょ じぶん かっどう
地域のおまつりなど公民館以外の場所でも自分たちの活動をアピールし
てみましょう。



042-324-1926



koigakubo-kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp

問い合わせ・申し込み：恋ヶ窪公民館



活動作品を展示できる移動式屋台
「くぬぎレインボー」で市内のイ
ベントに出かけ、創作ダンスなど
を披露します。



地域でよりよく暮らしていくため
のスキルや「グループホームでの
暮らし」など生活に密着したテー
マについて学びます。



自分たちの意見を学びづくりに
反映させるため、互いに意見を
出し合いまとめる「みんなの
会議」を開催します。その意見を
くぬぎカレッジに活かします。



参加者自身がカレッジの活動や楽
しさを伝える「くぬぎ青空ジャー
ナル」を発行します。活動報告の
ほかに、自分たちが気になる話題
を取材して記事にします。

日程

6月13日、7月11日、8月22日
9月12日、10月10日、11月14日
12月12日、1月16日、1月30日

日曜日 午後1時～3時

会場 恋ヶ窪公民館ほか

※日時・会場は変わることがあります

昨年度の「くぬぎカレッジ」参加者の声

みんなで協力できて、立場は一切関係な
く一緒に活動できて充実した時間だった。

ためになった

笑顔が素敵

また色々みんなと話し合ったりしてみたいです！！色々話せて楽しかった！

対象 愛の手帳2度から4度の18歳以上の方
市内に在住・在勤・在学している方

定員 20人

新型コロナウイルス感染拡大防止のため

◎参加する時はマスクの着用をお願いします

◎発熱など体調に変化がある場合は、参加できません

申し込み 電話・メールまたは直接恋ヶ窪公民館へ。多数の場合は抽選

メールの場合は

- ①講座名「くぬぎカレッジ」②住所 ③名前(ふりがな)
④年齢 ⑤電話番号 を書いて送ってください

問い合わせ・申し込み：恋ヶ窪公民館

☎ 042-324-1926 ☒ koigakubo-kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp



知りたい・学びたいから始まる「くぬぎカレッジ」

障害を理解するための講座①



知的障害がある人の中には、言葉でのコミュニケーションがとりづらいことや、安全確保や身の回りのことに周囲の助けが必要となときがあります。具体的な事例を参考に、サポートするときの基本について学びます。



- 日時** 9月26日(日) 午前10時～正午
- 講師** 国分寺市障害者センター職員
- 場所** 光公民館
- 定員** 20人
- 主催** 国分寺市立公民館
- 申込み** 9月1日(水)までに電話または直接光公民館へ。
多数の場合は抽選。定員に満たない場合は、
9月2日(木)以降先着順

《講座参加にあたって》

新型コロナウイルス感染拡大防止のため

◎参加の際はマスクの着用をお願いします

◎発熱等体調に変化がある場合は、参加できません

ご理解・ご協力をお願いします

問合せ 光公民館

電話:042-576-3991

子供でも大人でも人前で恥ずかしい思いをする、させられると心も傷つき人間関係が崩れてしまいます。つい忘れがちですが尊重し、敬意をもってかかわることの大切さを再確認いたしました

くぬぎ教室(並木)、ボランティア(アラジン)を通じて障害のある方との交流で自分自身で出来ることを考えていきたい

ケーススタディでは、他の参加者の意見・考え方が聞けて大変勉強になりました



昨年度講座参加者の声



地域でよりよく暮らすためのスキルや「グループホームでの暮らし」など生活に密着したテーマについて学びます。



活動作品を展示できる移動式屋台「くぬぎレインボー」で市内のイベントに出かけて、創作ダンスなどを披露します。

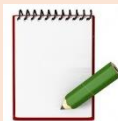


自分たちの意見を学びの場づくりに反映させる

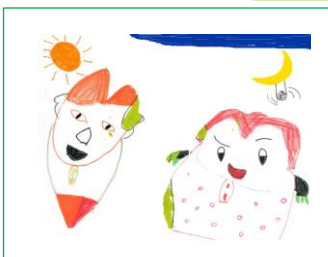
ため、互いに意見を出し合いまとめる「みんなの会議」を開催します。その意見をくぬぎカレッジに活かします。



参加者自身がカレッジの活動や楽しさを伝える「くぬぎ青空ジャーナル」を発行します。活動報告のほかに、自分たちが気になる話題を取材して記事にします。



今回の募集はこちらです！
「障害を理解するための講座」第1回
 ※第2回以降は別途市報に掲載します



**「くぬぎカレッジ」についてのお問い合わせは
 お近くの公民館へ**

知りたい・学びたいから始まる「くぬぎカレッジ」
障害を理解するための講座②

疑似体験から学ぼう

知的障害のある方は、世界をどのように見て感じているのでしょうか。体験型ワークショップを通して理解を深め、コミュニケーションや支援の方法を考えてみましょう。

講師：新宿区手をつなぐ親の会キャラバン隊 Winds



新宿区手をつなぐ親の会のメンバーが立ち上げ、疑似体験を通して障害理解を広めるために2016年4月より活動しています。

11月20日(土) 午後2時～4時

場所：本多公民館 定員：20名

10月25日(月)までに電話または直接本多公民館へ。

多数の場合は抽選。

定員に満たない場合は、10月26日(火)以降先着順

本多公民館 **042-321-0085**

《講座参加にあたって》

新型コロナウイルス感染拡大防止のため

◎参加の際はマスクの着用をお願いしています

◎発熱等体調に変化がある場合は、参加できません

ご理解・ご協力をお願いします

体験を通して障害のある方の気持ちを考えることができました。「障害のある方」と特別に考える必要はなく、優しい心をもって関われば良いのだと分かりました。貴重なお話をたくさん伺うことができ、多くの学びができました。

障害は個性だなと思いました。みんなちがっていいのだなと思いました。

障害を持つ人と関わることはあまりないけれど、街で出会ったりした時は、生かしたいと思いました。人と関わる上で大切な、思いやりを持った行動について知ることができました。



昨年度講座参加者の声



地域でよりよく暮らすためのスキルや「グループホームでの暮らし」など生活に密着したテーマについて学びます。



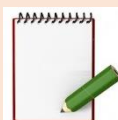
活動作品を展示できる移動式屋台「くぬぎレインボー」で市内のイベントに出かけて、創作ダンスなどを披露します。



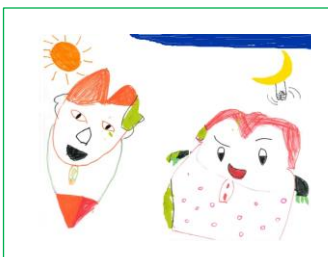
自分たちの意見を学びの場づくりに反映させるため、互いに意見を出し合いまとめる「みんなの会議」を開催します。その意見をくぬぎカレッジに活かします。



参加者自身がカレッジの活動や楽しさを伝える「くぬぎ青空ジャーナル」を発行します。活動報告のほかに、自分たちが気になる話題を取材して記事にします。



今回の募集はこちらです！
「障害を理解するための講座」第2回
 ※第3・4回は別途市報に掲載します



**「くぬぎカレッジ」についてのお問い合わせは
 お近くの公民館へ**



知りたい・学びたいから始まる「くぬぎカレッジ」

障害を理解するための講座③④

③ 地域でともに暮らすために

知的障害のある方のライフスタイルについて聞いてみませんか。結婚生活やグループホームでの生活など、障害のあるなしにかかわらず、地域で暮らしていくことについて考えます。

日時 1月23日(日) 午前10時～正午

講師 松田^{ひろゆき}泰幸さん(とびたつ会※支援者) ※町田市で活動している障害者の自主グループ

協力 とびたつ会参加者 国分寺市くぬぎ教室参加者 ほか

④ 差別のない未来をつくる

社会に大きなインパクトを与えた「やまゆり園事件」をテーマに障害者に対する差別や偏見をなくすためにはどうしたら良いか、障害のある人とともに考えます。

日時 1月23日(日) 午後2時～4時

講師 田丸啓一朗さん(障害当事者 NPO 元職員)

松田泰幸さん(とびたつ会支援者)

協力 とびたつ会参加者



場所:本多公民館 2階ホール 定員:各回 20人

申込み:それぞれに申込みが必要です。

12月23日(木)までに電話または直接本多公民館へ。多数の場合は抽選。定員に満たない場合は、12月24日(金)以降先着順

問合せ:本多公民館

042-321-0085



《講座参加にあたって》

新型コロナウイルス感染拡大防止のため

◎参加の際はマスクの着用をお願いしています

◎発熱等体調に変化がある場合は、参加できません

ご理解・ご協力をお願いします

社会に参加しているという自負が持てると自信につながると思います。お互いに幸福な社会生活がおくれる様な活動をしていけたら嬉しいです。

障害に関係なく人間としてかかわる事が大切と再度確認しました。

『困った人ではなくて、困っている人』などの理念は、自分の生活を送る中で、周りに伝えられることだなと思ったので、これから周りを巻き込んで、一人の立派な専門家よりもたくさんの理解者が増えるような社会を目指したいなと思いました。



障害を理解するための講座①②参加者の声



地域でよりよく暮らすためのスキルや「グループホームでの暮らし」など生活に密着したテーマについて学びます。



活動作品を展示できる移動式屋台「くぬぎレインボー」で市内のイベントに出かけて、創作ダンスなどを披露します。

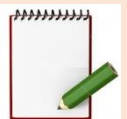


自分たちの意見を学びの場づくりに反映させる

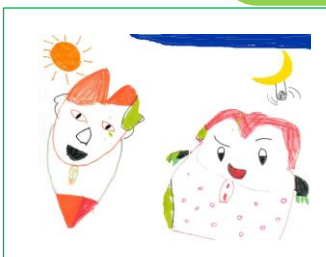
ため、互いに意見を出し合いまとめる「みんなの会議」を開催します。その意見をくぬぎカレッジに活かします。



参加者自身がカレッジの活動や楽しさを伝える「くぬぎ青空ジャーナル」を発行します。活動報告のほかに、自分たちが気になる話題を取材して記事にします。



今回の募集はこちらです！
「障害を理解するための講座」
第3回・第4回



**「くぬぎカレッジ」についてのお問い合わせは
お近くの公民館へ**

令和3年度 文部科学省受託事業

「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業

くぬぎカレッジ 成果報告会

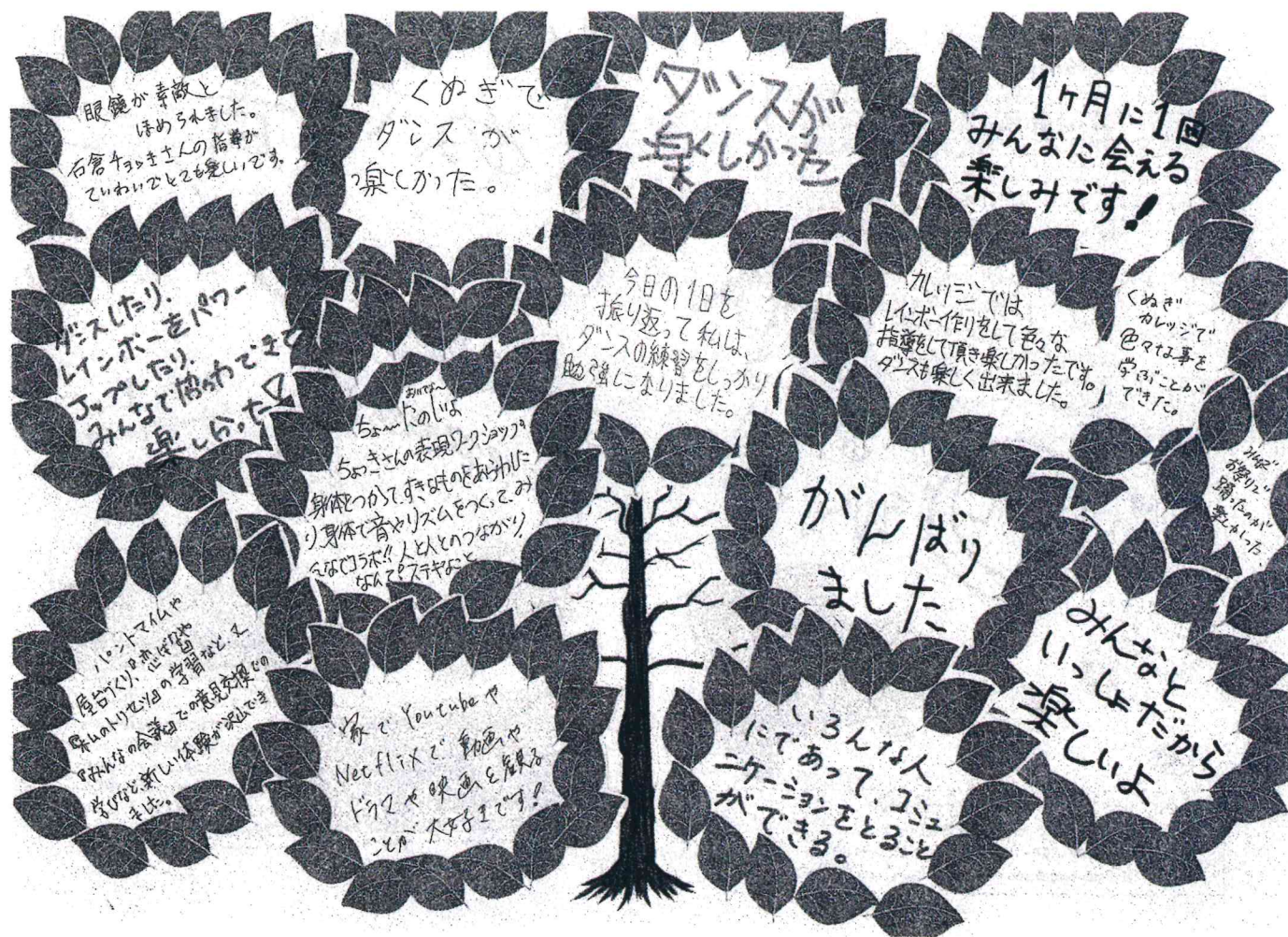
令和4年 1月30日（日）

午後 1時30分～3時

本多公民館 ホール

障害のある人もない人も共に学び、支え合う新しい学びの場として活動してきた「くぬぎカレッジ」。地域に自分たちをアピールすることを目指し、コミュニケーションスキルを学んだり、ダンスや造形などの創作活動に取り組んできました。カレッジで学び、積み上げた成果を、運営スタッフとともに参加者自身で報告します。

問合せ 本多公民館 042-321-0085



- ・くぬぎカレッジ年間活動報告
- ・パントマイム・ダンスパフォーマンス
オリジナルダンス「コロナっ禍」
- ・移動式屋台「くぬぎレインボー」お披露目



ほか



定 員 50 人

申込み 1 月 18 日(火)午前 9 時から

電話または直接本多公民館へ(先着順)

問合せ 本多公民館

042-321-0085

〈新型コロナウイルス感染症対策について〉

- ・せきや発熱など体調不良の日はお休みください
- ・手指の消毒とマスク着用にご協力ください
- ・換気のため会場内が寒くなることがあります

資料 3

くぬぎカレッジ全体スケジュール

令和3年度くぬぎカレッジ全体スケジュール

	実施日	くぬぎカレッジ内容	会場	障害を理解するための講座	スタッフ会議	連携協議会	コーディネーター会議	備考
5月							① 28日（金）	
6月	13日	※緊急事態宣言のため対面実施せず 書面開催（自己紹介ワークシートなどを各自記入・提出）	各自宅		① 2日（水）	① 29日（火）		
7月	11日	・オリエンテーション ・みんなの大会議（会議の仕方や自分の意見を発表する） 和泉澤賢司さん ・ダンス（「コロナっ禍」のおさらい）	市役所第1庁舎 委員会室		② 14日（水）			
8月	22日	・自分のトリセツをつくってみよう （自分を知る、相手に自分のことを伝える方法を学ぶ） 生島典子さん ・ダンス（「コロナっ禍」のおさらい） ・みんなの会議（くぬぎレインボーの活用について）	市役所第1庁舎 委員会室			② 27日（金）	② 3日（金）	【任意参加】25日（土） みんなの大学校オープンカレッジ
9月	12日	・レインボー改修講座 ・ダンス（公民館祭での発表に向けて練習） 石倉チョッキさん ・みんなの会議（くぬぎ連携協議会への報告について）	恋ヶ窪公民館 中庭・会議室等	① 26日（日） 市障害者センター職員 会場：光公民館	③ 6日（月） コーディネーターと スタッフの交流会		③ 6日（月） コーディネーターと スタッフの交流会	
10月	10日	・レインボー改修講座 ・ダンス（公民館祭での発表に向けて練習） 石倉チョッキさん ・みんなの会議（くぬぎジャーナル作成について）	恋ヶ窪公民館 中庭・会議室等		④ 27日（水）	③ 11日（月）		17日（日）恋ヶ窪公民館祭でダンス発表
11月	14日	・『褒め合う』ことの体験ワーク 和泉澤賢司さん ・表現ワークショップ 石倉チョッキさん ・くぬぎジャーナル原稿作成	市役所第1庁舎 委員会室	② 20日（土） 新宿区手をつなぐ親の会 キャラバン隊Winds 会場：本多公民館			④ 12日（金）	【任意参加】3日（水・祝） みんなの大学校オープンカレッジ
12月	12日	・「わたしのミライ・みんなのミライ」 佐藤加根子さん ・表現ワークショップ 石倉チョッキさん ・みんなの会議「成果報告会で何をやるか」	本多公民館 ホール					くぬぎジャーナル 第1号発刊（12月12日号）
1月	16日 30日	・「わたしのミライ・みんなのミライ Part2」 佐藤加根子さん ・報告会リハーサル 石倉チョッキさん ・みんなの会議 「成果報告会の役割分担について」 ・成果報告会	本多公民館 ホール	③ 23日（日） とびたつ会（町田市） 松田泰幸さん 会場：本多公民館 ④ 23日（日） 田丸啓一朗さん 会場：本多公民館	⑤ 19日（水）	④ 15日（土）	⑤ 17日（月）	くぬぎジャーナル 第2号発刊（1月16日号）
2月					⑥ 19日（土） コーディネーターと スタッフの交流会	⑤ 14日（月）	⑥ 19日（土） コーディネーター 交流会	【参考】26日（土）共生社会コンファレンス

文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」事業

くぬぎカレッジ成果報告書

発行日 2022年3月

編集 国分寺市教育委員会公民館課

発行 国分寺市教育委員会公民館課

〒185-0011

東京都国分寺市本多1-7-1(本多公民館)

Tel:042-321-0085